

シンフォギア装者が銀魂の世界に行くお話

龍狐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルの通り、シンフォギア装者が銀魂の世界に行くお話です。

目 次

番外編

番外編1	二年	1
番外編1—2	北斗絶唱シンフォギア／ほぼアク○ズ教	14
番外編1—3	絶唱顔	29
本編		
わいせつ物陳列罪		49
マヨネーズとゴリラ		60
ゴミクズ野郎の本性を、後から知るって怖いよね。		70
そのころ、シンフォギア世界では……		80
三人の処遇+ α の災難		89
二人と猫		103
白銀の装者と万事屋銀ちゃん		118
マリア、万事屋にお邪魔することになつたZ		131
そのころ、シンフォギア世界では……2		141
桂、一騒動を起こす。		165
真選組の一日		181
パトロール／散歩 再開の時		196
桂、またもややらかす。		220
そのころ、シンフォギア世界では……3 前半		235
そのころ、シンフォギア世界では……3 後編		254
再会と逮捕		273
江戸一番のからくり技師		289

番外編

番外編1 二年

江戸の町——かぶき町。

その町に住まう人々の中に、一人の青年——【志村新八】の姿があつた。

「はあー、ぶりにシン銀投稿再会か。作者が『東方悪正記』の改正版に力入れて、ほとんどこつちに手が回つてなかつたけど、今日からまた頑張らなくちゃ」

しばらく歩き、『スナックお登勢』とか書かれた店——の上にある、『万事屋銀ちゃん』の扉へと向かい、扉を開けた。

「何だか万事屋も久しぶりな感じがするなあ。おはようございまーす！」

扉を開け、リビングに入るが、誰もいない。

「まだ寝てるみたいだな。あれ、…マリアさんもいない…。もう外に出たのかな？」

大分前に万事屋へ神楽同様居候している女性だ。

いつもならソファーで寝ているのだが、今はいない。おそらくは外出しているのだろうと新八は思い、この万事屋の主人である銀時を起こすために、彼の寝室に入る。

「銀さん、起きてください！休みはもう終わりましたよ。作者がこの小説に再び手を付けて、忙しくなりm——」

ふすまを開けた瞬間、新八の目が点になる。

彼の目の前にいたのは、燃え上がる炎のような赤い頭髪の男性だった。

服装は白と黒を基準とした隊服のようなもので、その背中には純白のマントが風に呻られていた。

そして、目立つのは腰に下げられている、巨大な剣。

「何も変わらねーな、この町は。相も変わらずどいつもこいつもしけたツラして歩いてやがらあ」

「ちよつ！誰ですかアナタ！人んちで一体何やつてんですか、警察呼び『新八』ツ！」

目の前の、初対面のはずの人物が、自分の名前を呼んだことに、驚きを隠せない新八。

そんな彼の驚きなど知らないと、目の前の男が話を続ける。

「てめーも相変わらずみてーだな。つたく、作者が全く手を付けていない間に一体何やつてたんだか、進歩のねえ野郎だよ」

「そ、その声は…？」

新八は、ようやく気付いた。

この声は、彼が良く知っている声だった。そして、男は振り向いた。

「おいおい、休んでいる間に俺のツラまで忘れちまつたってのか？まあ男子三日合わざれば刮目して見よというからな」

そう言いながら、新八の方向を向く男。

その男の碧眼が、新八を見据えた。

「俺だよ俺、銀さんだよ」

* * * * *

「エエエエエエエエエッ!!??」

新八の驚愕の声が、木靈する。

目の前の赤髪の男性、それが坂田銀時だつた。

「久しぶりだな、ぱつつかん。元気にしてたか」

「いや、ええええ、久しぶりつて、え!? 確かに再投稿は三ヶ月ぶりですけど、この三ヶ月で一体なにがあつたんですかアンタ!?」

銀時^ご自慢の銀髪が完全に赤く染まり、瞳も碧色にカラーチェンジしていた。

もう銀さんじやなかつた。赤さんだ。

「そりゃあこんだけ時間が立つてれば、イメチェンくらいしようと思うだろ?」

「いやこの小説の原作要素『銀魂』! 銀髪が売りのアンタが一番変えちゃ駄目なチャームポイント変えてどうする!?」

まつたく、その通りである。

「それに、ほとんど別キャラになつてんじやないですか! 主人公の命の危機を颶爽と助けた剣聖みたくなつてんじやないですか!」

「何その赤髪!」

「何その碧眼!」

「何その騎士の服装!?」

何度も言うが、もう銀さんじゃない。

肩書も『白夜叉』じゃない。ただの『剣聖』だ。

「何つてお前、ひょつとしてあの約束忘れた？」

「は？」

「作者がまた次回話を書くのをさぼつた後、俺達で打ち合わせした

じゃん」

「は？なんのことですか？」

目の前の『剣聖（仮）』は語り始める。

「きつとこの後、作者がさらに物語を面白くするために、激ヤバなラスボスを出す可能性だつてあるわけだ。だが、もしそれが本当に出てきた場合、俺たちは一方的に蹂躪される。そんなのは読者がつまんないつて感想送つてくるに決まっている。だから、少しでも読者に興味関心を持つてもらえるよう、俺たちは強くなる必要があるって話をしあげやん」

「」

「この空白の時間を利用して各々がそれぞれのやり方で力をつけてくる。そして、ニュー万事屋として必ずまた集結しようつて——」

回想が入り、四人がそれぞれ別の道へ歩き出し——。

『『『『一年後に、シャボンディ諸島で！』』』

「——つて知らねーよそんな約束！シャボンディ諸島つてどこおお！？」

「どこでもいいんだよ、そんなもんは。大切なのは語感とインスピレーションだ」

「インスピレーションじゃねーよ！それ違う物語の約束！誰もおめーらの事なんて待つてねーよ！」

実に曖昧な回答をしながら、銀時はいつもの服装に戻る。――
が、髪と瞳はそのままだ。

「つたく、こつちは必至に修行してきたのに。何やつてたんだよお前、
大変だつたんだぜ俺」

「ガルザ・グラントヒルテつて言う女と死闘を繰り広げたり。14歳の
金髪幼女気絶させて夜の王都の夜景をバックに飛んだり、拳句の果て
にはその幼女を王選候補者の一人として推薦したり――」

「さつきから別の小説の思い出借用しすぎだろ! ていうかこれ三ヶ月
で全部やつたの!？」

「は? 三ヶ月? なに言つてんのお前? 現実世界では三ヶ月だけど、こ
の小説の中じゃ2年経つてる事になつてるからね」

「なにその中途半端な引き延ばし? つーか嘘でしょ? この世界はサザ
エさん方式で年は――」

「嘘じやねーよ。俺の変わりよう見ればわかるだろう?」

確かに、銀時は成長と言うか完全に別キャラになつていて、新八
はまだ認められない。
そんなとき――。

「ただいま」
「えつ?」

一人の長身の女性が、万事屋へ入つて來た。

その女性は、茶色のゴーグルや帽子、布を体に巻いていて、全体が
見えない仕様となつていた。

「オツス、久しぶりだなー。2人とも、元氣にしてたか? ……アレ? 新
八オメー背エ縮んだんじやねーか?」

「えつ、あの、すいません、アナタ誰ですか？」

「誰つて、オラだよオラ」

そう言い、帽子やゴーグルを外した。

「神楽アルよ」

「だあだあだあだあだあだあだあツ……！」

女性の正体。それは神楽。

神楽はとても女性的な体型となつており、出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる——マリアみたいなグラマスクな体型をしていた。

「ええええええツ!?」

「ほんと相変わらず冴えないアルな」

「お、お、お…？」

「そーなんだよ。コイツ二年間なにもしてなかつたらしいぜ?」

「ええ…、ええ!」

「ちよつ、コレ、神楽ちや、神楽さーん!!嘘でしょおーー!?メツチャ大人になつてんじやないすかああ!」

「女子三日合わざればパンパンして見よ言うアルからなあ」

「言わねーよ!」

新八はため息を吐き、二人を見る。

確かに二人は変わつた。ていうか銀さんは別キャラになつた。

「あれ、そう言えば定春は?」

「定春なら、神楽の旅と同行してたな」

「帰るとき、ペツトは一緒の船に乗れなかつたから、別の船で送り届けてもらつたネ」

そんなとき、『ピンポーン』と、チャイムが鳴った。

「あ、きっと定春ネ！見とけよナツパ、定春もすっごく成長してつぞ！」

「誰がナツパだ！でも、定春は動物だから、成長したと言つても中身だけでしょ？」

「そんなことないアル！とにかく行くネ！」

三人は玄関に向かい、神楽が扉を開けた。

そこには、小さな定春と、帽子を被つた宅配のおっさんがいた。神楽がサインを書いている間、新八は安堵した。

「ほら、やつぱり変わつてないじやないか。これのどこが成長したつて言うんだよ神楽さん。つーか、前よりちよつと小さくなつてない？」

「ハイ、受取書」

受取書にサインを書き終わつた神楽は、渡した。——小さな定春に。

小さな定春は、扉から出て行き、姿を消した。
残つたのは、宅配のおっさんのみ。

「あの、すいません。定春行つちゃつたんですけど。あの、ペットが逃げちゃつてるんですけど、オジサン」

おっさんが、帽子を取り外す。
そこにあつたのは、白い犬耳。

「お久しぶりです。定春。ただいま服役から戻りました」

「こつちかよおおおおおお！？ちょっと待てえええ！んなワケねーだろおおおー！コレどう見てもただの運び屋のオッサンじやん！どう考え

てもあつちの犬が定春じやん！」

目の前にいるのが、定春だつた。

運び屋のオツサンにしか見えないが、定春だつた。

「アレは狛犬星の配達員さんアル。人見知りの定春のためにそつくりの種族に送つてもらつたネ」

「そつくりつーかアレが定春だろ！つーかアレとコレがどう見たらそつくりなワケ！」

「だから、成長したつて言つたアル」

「成長どころの騒ぎじやねーよ！全く別の生き物になつてるよ！」

「新八、犬つてのは人間より成長がはるかに早えんだよ。二年も経つちゃもう立派なオツサンなんだよ」

「ホントに立派なオツサンになつてんだろーがああああああ!!!」

犬が人間より成長が早いのは常識だが、もうこれは種族と言う壁を超越した、全く別の生き物へと変化していた。

「——新八兄さん、何やらわしや、しでかしちまつたようで、申し訳ありやせん」

「兄さん？」

「姉さんを責めるのだけは、およしになつておくんなせえ。ケジメは、わしがつけます」

定春（オツサン）がケツに手をやり、ズボンを破くと、そこから立派な尻尾が出てきた。

耳だけでもそうだが、これで完全に定春だと認めざる負えない状態になつた。

そして、どこからか板とナイフを用意し、板の上に尻尾を乗せた。

「わしのワンコですむなら、1本でも2本でもつめますんで——

「待てえええええーー!!待て待て待て待て！」

即座に定春の脇を両腕で拘束して、止めた。

「ワンコつて何、何でエンコみたいになつてんの!?何この定春！何でこんなVシネマティストなのお!?——あれ?
?ちょっと待つて」

その時、新八がある異変に気付いた。

「よく見たら尻尾の先にあるコレ——」

その異変とは、尻尾の先。そこには——。

「定春!?ちつちやい定春ついてる!」

尻尾の先、そこには小さな定春がくつっていた。

「なんだこれ?」

銀時がその小さな定春に触る。

「どーいうことですかコレ?」

「オジキ、兄さん。少し、昔話をしてもいいですか。——」

——ある所にとつても素敵な主人達に飼われる、とても幸せな犬
がいた。だが彼はいつも思つていた。自分はこんな素敵な主人達に
飼われるにふさわしい素敵な犬になれているだろうか。さらなる
躍進を目指す主人達と共に前へ進むために、彼は主人達と同じ己と闘
う道を選んだ

——来る日も来る日も、焼けた砂の上に尻尾をつけ続ける

「それ何の意味があるの?」

——来る日も来る日も、だらだらと【ベスト・キット3】を尻尾
に見せ続ける

「それ何の意味があるの?」二回目

——やがて鍛え続けた彼の尻尾には、硬いイボのような物が出来始めていた。それは日増しに大きくなり頑強になっていく。しかし、イボが大きくなるにつれ彼の体は小さくなっていた。まるでイボに力を吸い取られるように。わかりますか? そう、そのイボが——

「わしです」

「分かるワケねーだろおおおおおお!!!」

「要するに尻尾からできたイボと本体が入れ替わったアル」

「要しすぎて意味分かんねーんだけど!」

全くである。

イボと本体に入れ替わるなど、普通ないから。

「ゞ安心ください。わしと定春は他人に見えて、尻尾でつながり意思も疎通しあう運命共同体。イボ兄弟です」

「うまくねーんだよ!!」

「イボ春と呼んでください。よろしくお願ひしやす」

完全に本人が定春とは完全に別の存在であることを自白したが、今 の混乱した新八にはそれが分からぬ。

「呼ばねーよ! こんな得体の知れないペツト飼えるワケねーだろ!」

「認めない! 僕はこんなのは認めないと!!」
「おい待てナツパ!」

新八は万事屋を飛び出し、ある所へ向かつた。
場所は——スナックお登勢だ。

「お登勢さん!!」

急いで、扉を開けた。

「ちょっとお、聞いて下さいよ、銀さん達が！」

「何だい騒々しいね、レディーの部屋だよ。ノック位して欲しいもん
だよ」

そう、お登勢が。

「何か揉め事でもありましたか、新八様？」

そう、たまが。

「どうせまた口クでもねえ話でも持つて来たんでしょ。シカトシカ
ト。関わるだけ損ですよ」

そう、キヤサリンが。

いつもと変わり映えない、日常が広がっていた。

「やつぱりい、皆全然変わつてないじやん。二年も経つたなんて嘘
じやん」

「何をワケの分からぬことを言つてんだい。それはそうと、アンタ
随分とまた——」

「お久しぶりです」

「お久しぶりです」

「お久しぶりです」

「——」

そこには、顔がイボ春になつた、三人がいた。

「全員イボ春じやねえかああああああああああ!!!」

たま「アレ? ひよことしてワシ等のことご存じで?」

イボなんてできるの!?

たま「皆さん大変向上心の強い方でこの2年、頑張りすぎて我々を作つてしまわれて。とりあえず【イボ勢】【イボリン】【イボ】とお呼び下さい」

後ろを振り向くと、そこには『剣聖銀さん』がいた。

「だから言つただろ？ 皆なあ、お前の知らない所で日々努力してんだよ。成長しようとしてんだよ」

「ほとんど皆イボしか成長してませんけど!?」

ねえ。だつたら現実を受けとめて前を見ろよ」

「これから挽回するチャンスはいくらでもあるだろ？ 今のお前はそのチャンスを、イボを作るチャンスを拒絶しているんだぞ！」

「全力で拒否するわ、そんなチャンス!!」

もう、駄目だ。

新八以外は全員がここまで成長してしまつてゐる。だが、混乱が新八の頭の整理を邪魔していた。

——そんなとき、新八の脳内に、一人の女性の姿が浮かんだ。

「そうだ、マリアさん！マリアさんはどうしたんですか？」

「マリア？ マリアはな 「なあ、今マリアつて言つたか!?」 ん？」

そのとき、女性の声が、銀時の声を遮つた。

二人がその方角を向くと、そこには二人の女性と少女がいた。

一人は女性。歳の頃は20と言つたところか。

ボサボサな赤い髪が目立ち、肌の露出が目立つような軽装をしており、その服装が、グラマスクな彼女の体型を強調している。そんな美人だ。

そしてもう一人は、少女。歳のころは13歳。

甘栗色のストレートな長髪が目立ち、非常に可愛らしい、人形のような顔立ちをした少女だ。

「教えてください、今、マリアって言いませんでしたか？ その人って、ピンク色の髪をしていましたか？」

「そうですけど……あの、マリアさんのお知り合いですか？」

新八がそう答えると、二人は嬉しそうな顔をした。
そして、赤髪の女性が、言葉を続けた。

「実は、アタシたちはそのマリアを探しているだ。知つてゐるなら教えてくれ！」

「あの……その前に、まずあなたたち誰ですか？」

「ああ、紹介が遅れた。まずはアタシから——。」

「アタシの名前は、【天羽奏】だ。よろしく」

「私の名前は【セレナ・カデンツアヴナ・イヴ】と申します。よろしく
お願ひします」

そう言い、二人——奏とセレナは、ほほ笑んだ。

番外編1—2 北斗絶唱シンフォギア／ほぼアク〇 ズ教

奏とセレナは、気づいたら、全く違う場所にいた。

二人の共通点は、原作世界に遊びに行こうとした点。ギャラルホールのゲートに入り、目的地に着いたと思ったら、何故かここといった。

「あれ、セレナ!?」

「奏さん!? どうしてここに!? それに、ここは…?」

「アタシにも分からぬ…。なんなんだ、ここは?」

二人の眼に映るのは、大量にスクラップされたゴミだ。
ここはさしづめ、スクラップ工場だろうか?

「スクラップ工場…なんでこんな場所に…?」

「あ、奏さん! 誰か来ますよ!」

そのとき、セレナが人影を見つけた。

奏がその方向を見ると、砂煙がこつちに向かつてきていた。その中には、複数の人影だ。

「乗り物にでも乗つてるのか…?」

「あ、見えてきまし、た、よ…」

二人は、絶句した。

人影の主は二人や三人どころじやなかつた。その数、ざつと五十名。

しかも全員がバイクを乗り回し、その恰好はボロボロの服に、棘付き肩パット、そして共通して髪型はモヒカンだ。

全員が武器に鉄バットや銃などを持つている。

完全な、野蛮人だつた。

その内の一人が、二人に話しかける。

「おいおい、お嬢ちゃん。どうしたのかな？俺らの縄張りに勝手に入りこんじやつて！」

「おい！この二人クツソエロい恰好してるぜ！こりゃあ確実に男を誘つてんな！ヒヤハハハハ！」

「「ヒヤハハハハ！」」

モヒカンBの言葉に、他のモヒカンが同調して笑い出す。
これだけで、二人は生理的嫌悪感を隠せない。

「奏さん…この人たち、怖いです…」

「安心しろ、セレナ。アタシたちにはシンフォギアがある。こんな野蛮人どもなんかには負けねえよ」

「でも、ギアは人を傷つけるものでは…」

「何言つてんだ！こいつら見ろ！」

周りには少女と女性を囲む野蛮人五十人。

言うなれば北斗の拳のモブキャラたち。二人には『I A M S H O C K！』と言う幻聴が聞こえたような聞こえなかつたような…。

「襲い掛かつてくる気満々だぞ！やらなきや、こっちがやられる！」
「だけど…！」

そんなとき、だつた。

後ろの方から、もう一台の、バイク音が。しかも、バイクの影が普通のよりデカかつた。

いや、あれはバイクと言うより、三輪自動車だ。そして、前方にモヒカンが操縦しており、その後方に誰かが立っているのが見えた。

「おい、ボスだ！」

「てめえら！ボスが来たぞ！」

周りのモヒカンたちが騒ぎ出す。

これほどの野蛮人たちをまとめ上げるほどの人物だ。相当なワルに違いないと、奏はアームドギアである槍を構える。

そしてボクの全貌が露れになる

かの懇意に
意外にモテ懶な

肩口まで伸はしたボアカットの蒼い髪、それを片方にまとめてサイドテールにしている。私服は動きやすさを重視したもので、Tシャツ一枚の上に、薄いジャンバーを着用している。

彼女の口の中から、くちやくちやとガムを噉む音が響く。
彼女は三輪自動車から降りて――。

てめえらか？俺らのシマ、荒らしてん奴は…？」

あああ…！」

〔 〕

二人の目元が、暗くなつた。

瞬間、画面が新八の手によつて破られる。回想を、強制中断させられた。

「あれ翼さんか!? 真面目一筋のイメージがある翼さんか!! 完全にヤンキーになんつてんじゃないすか!!」

「翼か…。あいつも、成長したんだな」

「成長つーかむしろ退化だよ！人間性や社会性が丸々劣化してるよ！」

あれから少し時間が経ち、剣聖銀さんと新八は、奏とセレナを連れて万事屋の応接室へと座っていた。

そして、二人からここまで来た際の事情を聞かされ、新八がツツコんだ形だ。

「あんな翼…見たくなかった…」

奏が半泣きになりながら、目をハンカチで覆った。
かつての相方が、あんな風に変貌していたら、無理もないが。

「なんなんですかアレ!?もう銀魂要素が微塵もないよ！【北斗絶唱シンフォギア】になってるよおおおおお!!」

北斗の拳×戦姫絶唱シンフォギアのコラボ作品だとでも言うのだろうか？

ちなみに、この作品は全く違います。

「ていうか、真選組はなにをしているんですか!?土方さんがいたはずだから、あんな風になるワケないじゃないですか！」

「何度も言うがぱつたん。ここ2年で皆変わったんだよ。いい加減受けとめろ」

「い、いや……まだマリアさんがいる…。僕は認めない、認めないと

⋮

まだ現実が受けとめ切れておらず、現実逃避を続ける新八。
その現実逃避の一環として、新八は話を変える。

「あの……聞きたいんですけど、セレナさん、でしたつけ？」

「はい。そうです」

「セレナさんの苗字……カデンツアヴナ・イヴつて、マリアさんと同じ苗字なんですけど……もしかして…」

「はい、マリア姉さんは、私の姉です」

目の前の甘栗色の髪の少女、セレナはマリアの妹だと言う。

確かに、どこか面影がマリアに似ているような感じがすると、新八は思う。

「それで、あなたは…」

「アタシか？アタシは……まあ、マリアの仲間だな」

彼女、天羽奏はどこかギクシャクした返答をする。
次に、銀時が。

「……なるほどな、話は大体分かった。お前たちは、仲間であり姉であるマリアを、探しにここまで来たってことでいいのか？」

「はい。そういう風に考えてもらつて構いません。それで……私たちかも質問していいですか？」

「ああ、実はアタシも気になつてたんだ」

「……なんか、情報と違うつて…」

「――情報？どういうことですか？」

新八が首を傾げる。

情報とは、一体なにか。言つてしまえばそのまんま情報だが、一体なんの情報なのだろうか？

「実は、この町の名前を聞いたり、あなたたちを見た瞬間に、頭の中に、

情報が、入つてくるです」

「情報が入つてくる…？」

「ああ。例えば、この『かぶき町』の文字が目に入つた時なんだけど…」

——かぶき町。

江戸の下町に所在し、飲食店の立ち並ぶ繁華街である。ヤクザなどの土着の権力者により天人があまり住んでいない土地らしい町。

「——つてな感じで、情報が流れてくれるんだ」

「ちょっと待つてください。これ僕にも見えるんですけど。明かにテロップが僕らの頭の上にくつきりと存在しているんですけど」

新八の言う通り、テロップせつめいぶんが彼らの頭の上に存在していた。
テロップの存在を見る新八に、二人は驚愕した表情を見せた。

「これが見えるのか!?

「本当に!?」

「は、はい……。見えますけど…」

「実はこのテロップ的な、周りには見えてないのか、当初すげえ驚いたら周りの人々に笑われてな…」

「見える人と見えない人に、なにか違いがあるのでしようか?」

「銀さんたちは? 銀さんたちはどうなんですか?」

もし頭上にあるテロップに、見える人と見えない人の区別があるのなら、出来るだけ確証材料は多い方がいい。

銀時たちの返答は…。

「見えねえな」

「オラにも見えないネ」

「すいやせん、新八兄さん。ワシにも見えません」

どうやら剣聖銀時、神楽さん、イボ春には見えていないようだ。

「僕しか見えないのか…。一体、違いは何なんだろう…?」

「さあ：私にもわかりません…」

「いいんですよ、僕にも分からることはたくさんあるので。……ちなみに、僕たちのことを見た時つて言つてましたよね？つまり、僕たちの情報もすでに知つているですか？」

「あ、はい。騒がしかつたので……すぐそつちに目が入りました」「おい新八、お前もうちょっと音量小さくした方がいいんじゃないかな？」

新八のツッコミ、二人がここに来た主な理由だつたようだ。

だが、二人にとつてはこの出会いは僥倖だったかもしない。

「これはもうクセだし、もうイメージが定着してるから無理ですよ。それで、なんて出たんですか？」

「あのな……銀時さん？神楽さん？定春さん？は、情報と現実が全く一致してないんだよな…」

「……つまり、あなたたちに流れている情報は、僕の知つている銀さんたちとまんまつてことか…。それで、僕は？やつぱり、僕はなにも変わつてないから、情報との齟齬もないだろうし…」

「あ、いえ、その…」

「あの、だな…」

なんだろう、二人の端切れが悪い。

と言うより、言うのを躊躇つてている？そんなとき…：

——志村新八。

ツツコミ役。本体はメガネ。人間をかけたメガネ。メガネが無いと体が屍になります。（以下略）。

「ちよつと待てええええええ!!なんだこの情報!!誤りだよ、間違いしかねえよ!!つーかここでもメガネネタかましてくんじやねええええええ!!本体人間だから!・純度100%の人間だからああああああ!!」
「——と、人間の体を操っているメガネが言っている」

ここで、剣聖銀さんが悪ノリをかます。

「そこー! 同調すんじやねえええ!! ていうかなんだ(カツコ以下略)」つて! さぼってんじやねえよ!! もつと情報書けよおおおおお!!」

新八のツツコミが炸裂する。

それを見て、二人は、「ツツコミ役」と言うのは本当なんだな…と思つた。

「——あの、申し訳ないだけど…話進めていいか?」

新八が熱くなつていると、奏がそう言つた。
確かに、まだ話の続きだ。

「あ……すみません。それで、銀さん。マリアさんは今どうしているですか?」

「まあついてこれば分かるよ。あんたらもついてきな」
「じゃあオラお留守番してるアル」

「留守は任せてください」

神楽さんとイボ春は留守番をするようだ。

銀時に言われるがまま、三人は万事屋を出て、歩く。

——歩き、歩き、歩き、歩き、歩き……。

30分くらい歩いた後、町の見た目はかぶき町とはすっかり変わつ

ていた。

メルヘンチックな見た目の住宅が立ち並んでおり、その中心に立派な教会が存在していた。

そして、剣聖銀さんがその教会の扉の前で立ち止まる。

「……だ」

「教会…？」

「ここに、マリア姉さんが…？」

「まさか、マリアの奴宗教にハマったのか？」

「まあ、ハマつたって言うか——」

剣聖銀さんの端切れの悪い言葉と同時に、銀時の手によつて扉が開かれる。

そして、三人の目に映つたのは——。

「——神は、言いました。成長とは、努力の証であると。しかし、努力は形となつては現れないと」

説法だつた。

教会の内装は定型的なものだ。

木製の巨大な丸い物体がご神体として飾られており、それに向かつて両手を合わせて握りこぶしで祈つている、たくさんの人々。

そして、その教えを説いている、修道女の恰好をした、ピンク色の長身長髪の女性——。

その女性の声は、とても聞き覚えのある声で——。

「——」

「——しかし、そんなときでした。神は、私たち人間に、努力の証を授けたのです！」

「ハマつたつて言うより、教祖やつてるね」

——マリア・カデンツアヴナ・イヴだつた。

*

*

*

*

三人の絶叫が教会に響く。

今三人の目の前に存在しているのは歌姫マリア——否シヌターマリアであつた。

「ええええええ!! あれ、本当にマリアさんですか!?」

「何言つてんだ、逆にあれのどこがマリアじやないって言うんだ?」「や、確かこそうですサゾ!見じ用はそのままマリアさんですサゾ!」

服装とか丸々違うじゃないですか！それに今教祖つったか!?この宗教マリアさんが創ったの!?」

「——どうしたのですか、迷える子羊よ」

ツツコミをしている新八に、マリアが話しかけてきた。その喋り方は、とても修道女らしい喋り方だつた。

「久しぶりね、新八くん」

「ま、マリアさん：どうしたですかその恰好！？」
「修道士の服よ？それがどうかしたの？」

新八がマリアの恰好について尋ねると、当たり前の答えが返つて來ただけだつた。

「な、なあマリア……こつてなんなんだ？」

次に、奏がマリアに聞いた。

教会と言うことなのだから、何かを祀つていることは確かだ。

「あら、奏。あなたも入信しにきたの？」

「いや違う。一体ここは何を祀つてているんだ？」

「あら、あれを見ても分からぬの？」

マリアは、神体であろう木星の巨大な丸い物体を見据えた。
その瞳は、曇りなど存在せず、無垢な子供のようだ――。

「あのお方は、【イボノカミ】様よ」

「イボノカミ!? イボノカミってなんだ!? イボの神様か!? つーかあれど
う見てもただのイボじやねえかあああああ！」

どう見ても、木製のイボ。まさかここでもイボが浸透していた。
しかもイボノカミなど訳の分からぬ神を、この教会は信仰してい
た。

（まさか宗教にまでなっているなんて…！ 一体、江戸はどうなつてしまつたんだ!?）

「新八くん。今の言葉はイボノカミ様への冒涜よ。今すぐ撤回と謝罪
をしなさい」

瞬間、マリアの顔が新八の顔に近づく。ものすごく近づく。
どのくらい近づいているのかと言うと鼻と鼻がくっついているほど近づいている。

普通なら、ラブコメみたくキスシーンに近いが、今のマリアからは恐怖しか感じられなかつた。

「ゞ、ゞめんなさい…」

「そう、そうよ。イボノカミ様はとつても優しいの。きっと、今の謝罪もイボノカミ様は快く受け止めてくれるでしょう」

マリアは木製のイボに、天に仰ぐような形で祈った。
彼女は、熱心な宗教家へと転職？――を果たしていた。

唖然としている新八と奏の代わりに、今度はセレナが。

「ま、マリア姉さん…？」

「あら…セレナ。久しぶりね、元気にしてた？」

「は、はい…っ」

マリアはここにセレナがいることにあまり興味を示さず、ただ挨拶をしただけだつた。

「い…」

「ま、マリア姉さん…？」

なんだか、マリアの様子がおかしい。

それに同調するように、教会内の雰囲気も、どんどんと暗くなつていく。
そして――！

「駄目よ!! 変わらなきや!!」

マリアが、鬼気迫るような顔でセレナに怒鳴つた。

「ヒツ！」

「いい、セレナ。努力すれば、人は必ず成長するものなのよ！ そしてそ

の成長の証——それこそがイボ！イボとはイボノカミ様が私たちに授けてくださった努力の証なの！それを一つも作つていになんて、セレナ！あなたは成長する気はあるの!?」

セレナ！あなたは成長する気はあるの？

お、おいマリア、そのくらいに――

「奏や薪ハ君セモヨリ何一つ變れテていなししやない二年よ?二年
!こんなに時間が経つていると言うのに、なんで貴方達は何一つ變
わつていないので!」

「え、あの、ちよ…」

「マリア、こいつらはな、一年間全く努力をしていなかつたんだぜ？」

「あつ、ちよ！」

「なんですか？」

銀時の爆弾発言が、見事に起爆した。いや、それだけじゃなかつた。起爆した燃えカスは、周りの爆弾へと燃え移り、誘爆を起こした。

「え、なんだ、この状況？」

「まごかとは思つたけど、本当に一年間なはもしてこなかつたのね……」「「「「それはイボノ教の教えに反する」」」

「マリア姉さん……？」

月刊文庫

変化 すなれや

一斉に、信者たちが——無数のVシネマ風のオツサンの顔が新八たちの瞳に映つた。

「「「「イボを生む」となり!!」」」

「全員イボ春ウウウウウウ
!!!!??」

新八の絶叫が響く。

信者たちの顔が、全員イボ春で統一されていた。

「なんだこれええええええ!!」

「ぜ、全員が同じ顔…!?」

—キモいよ！もう摩訶不思議を超えてキモいよ!!

「貴方達にも、教えねばなりません」「成長の、素晴らしいを!!」「」

全員が、三人に近寄つてくる。

「に、逃げましょう!!」

ああ！

一
はいツ！

三人は本能的に危機を感じ、すぐに教会から飛び出た。

「待ちなさい！」

待てエ！」

三人が猛スピードで逃げても、後ろの集団が猛スピードで追いかけてくる。

「貴方達も成長と言う名の変化に気付いて、一緒にイボノカミ様を信仰しましょう！・さあ！・この入信申込書にサインを!!」
「〔〔〔〕〕の素晴らしいイボノ教に祝福をオオオオオオオオ!!」」

「イヤアアアアアアアアアアアアア!!」

一人が悲鳴を叫ぶ中、新八の咆哮が、空に木霊した——。

番外編1——3 絶唱顔

——あの後。

新八、奏、セレナの三人は無事に逃げ延び、場所は変わつて志村宅。家に着いたあと、新八は二人を姉に任せて新八は自身の部屋で落ち込んでいた。

「——」

「新ちゃん、入つていい?」

部屋のふすまの奥から、姉——妙の声が聞こえた。

「ごめんなさい。今は、誰の顔も見たくないんです」

「——」

「皆、いつの間にか遠くに行つてしまつてゐる気がして。いままで今迄だつて、ホントは何度も感じてたんです」

「——」

「姉上、僕、よくこんな夢を見るんです」

そう言い、新八は自身の夢の内容を語る。

“暗がりの中、銀時、神楽、新八の三人は走つてゐる。しかし、周囲は足が速く必死に追いつこうとしても、結局、最後は暗がりに一人になつてしまふ”、そんな夢を見た。

「それだけじゃないんです。前回の投稿日、『3月17日』なんです。二か月半も放置されて、悲しいんです。それに、作者が久しぶりにこの小説に手を出した理由も、自分の誕生日で気分が有頂天になつて、るからなんですよ？いくらあと数年もすれば社会人になるから忙しいと言つても、その理由は酷いと思うんです。もつと、マシな理由で、手を付けて欲しかったんです」

作者のリアル話を愚痴る新八。（おいこら、それ言うんじやねえよ。
あ、これ書いてんの俺だつたわ。ガハハ。でもこつちは東方悪正記を
社会人になる前になんとしてでも完結させたいんじやアアアアアアア!!

b
y
作者

そんな新八に、妙は――

「新ちゃん、あなたは幸せね」

その言葉に、微妙に反応を見せる新八。

「だって、暗がりの中でも進むべき目標が見えているんだもの。本当に悲しい人は、走るべき方向も見えずに立ち止まっている人、そして本当に辛い人はどっちが前か後ろかも分からぬ暗がりを、先頭切つて走っている人」

「確かに歩調を合わせてくれる優しい人なんかじゃないかも知れない。グニャグニヤ回り道が多い人なのかも知れない。それでもあなたは、その人の走る方向が前だと信じているんでしょう？それはね、とても幸せなことなのよ、新ちゃん」

—

「どんなに遠くなつても、見えるわよ。足さえ止めなければ、きっと追いつけるわよ。だつて、私がずっと隣で、あなたのケツ引つ叩いてあげるんだもの」

ねうえ
姉上

新八のメガネの奥から、水滴が零れる。

「それに、作者のことだつて悪く言つちやだめよ？作者の意見だつて、一理あるのよ？物語を作つたのなら、それを完結させるのが、製作者の使命もある。それに、社会人になつてからだとそれも難しくなる。だから、今しかない。作者だつて、自分なりに頑張つているのよ

？事実、社会人になつたせいで一話の投稿が大分遅れている作者だつているのだから」

1

「それでも新ちゃんが納得できないというのなら、私が『第四の壁』をぶち破つて作者を引きずりだすから」

新八の涙腺が——決壊した。

「姉上ええええええええ!! 2年後なんてもう関係ねーよ! 姉上となら、僕はどこまでも、走つていけまーあす! そして、一緒に作者を殴りに行喝を入れきましょおおおおお!!」

新八は走り、ふすまを開けた。（作者は逃亡準備中）
その奥には、最愛の姉、妙と――、

「ああ、それでこそ我が弟だ！必死にお妙さんと俺に食らいついて来い。手加減はしない、だが必ず君たちをネバーランドに連れて行つてみせる！」

近藤勲が、いた。

「もおー、黙さんつたら、あんまり張り切つて私たちを置いて行かないでくださいね？どこまでもついていきますけど」

「さあーて、元氣出たところで夕飯だ。ホラホラ、早くしないと置いてつちやうぞ」

「今日のご飯は何かなー
いやん待つて黙さん」

「うふふ、黙さんが好きなもの」

「えつ！カレーラ——」

「卵焼き」

「だよねー。や、やつたー。コレで嫌なこと全部忘れられるなー」

[]

その光景を見た新八の目は、瞳孔が開き、目が血走っていた。徐々に血涙、鼻血、吐血していき――

全ての怒りが、この小説を書いている本人に向けられた。（え、俺悪くない？ 皆もコメントで養護頼むぜ！）

* * * *

一
昼。

そこには五人の人物が集まっていた。

「ハイ、勲さんアーン」

妙が箸で劇物を掴み取り、黙の口に向ける。

「オイオイ、お妙さん。ご飯くらい自分で食べられるよう」「もおー、何照れてるのよ黙さんつたら」

「えへ、えへへ、えへへ、えへへ」

「私たちも夫婦でしょ？これ位いいじやないですか」

〔〔〔――〕〕〕

そんな二人の目の前に座る、三人の男女。新八、奏、セレナ。三人の表情は、一貫していて額から目元にかけて黒く染まっていた（演出的に）。

その理由は、明白だ。机に並んでいるのは、妙が作つたであろう漆黒の劇物^{たまごやき}が大量に並んでいたから。

三人が手を付けて^{絶唱顔}いるのは、実質白米だけだ。

さつきまで、血塗れを晒した新八を見て、絶叫していたと言うのに。

「ホントにお妙さんは甘えん坊なんだから」

「どつちがストーカーやつてたか、いまとなつちや分かりやしないよねえ」

「そんな言い方やめてよ。お客様もいるんだから。それに、もつと早くに勲さんの優しさに気付いていたら、もつと早くに幸せになれたいたのに。まさか真選組を辞めて一緒に道場やつてくれるなんて」「真選組はね、俺なんかいなくともやつていけるんです。頼もしい奴らが一杯いるから。ただお妙さん、あなたは僕が支えてあげなきやダメでしょ？僕も、あなたがいないとダメなんです」

「もう勲さんつたら！」

近藤の顔を恥ずかしそうに殴る妙。その攻撃を、まるでMかのように顔を赤らめて笑う近藤。

「「「（）」」馳走様です」」

三人が、無力な声でそう言う。

こんな色氣話を聞かされでは、食欲が進まないのも無理はない話である。

「あら新ちゃん、それにお一人も、全然食べてないじゃない」「新八君、仕事に差し支えるよ、それじゃ」「え？」

無気力な声で、仕事は反応した。

「今日は君の記念すべき初出勤日じゃないか」

「そうよ」

妙が横に置いてあつたハンガーを手に取つて、新八に近づいてくる。

「勲さんがせつかくいい仕事紹介してくれたんだから期待に応えなきや、ハイ」

——そして、着替えて……。

その服装は、真選組の服装だった。

「

「俺の代わりに君が行つてくれるなら心強いよ。真選組を頼んだぞ」「研修が終わるまでは住み込みらしいから、なかなか会えなくなるけど、頑張つてね。私たち二人——いえ、三人が応援してることも忘れないでね」

「——え？」

ここで、初めて素つ頓狂な反応を示した二人。

「うむ……ん？三人：三人つて」

近藤も動搖を表した。これは、つまり――、

「うふ、新ちゃん。帰ってくる頃にはあなたも叔父さんよ。この子に自慢できるような立派な侍になつて帰ってきてね」

「ほ、本当ですかお妙さん!? 聞いたか新八くん――」

近藤が振り返ると、新八は既にそこにはおらず、少し遠くの方で走つて言つているのが見えた。

「い、いつの間に……！」

「これ、私たちも追いかけた方がいいのでしょうか？」

「当たり前だろ！ 行くぞセレナ！」

新八の後を追いかけるために、二人も走る。

「フフッ、あんなにやる気出しちゃつて」

「全く、頼もしい義弟、いや、叔父さんだな」

——街中にて。

街中で歩くカツブル二人。とその他モロモロ。

「あん時イカ藏が——ん？」

「ああああああああ!!!」

「——ん？」

新八が自前の脚で爆走していた。

「ああっ、おおおおおおおおおおおおお!!!」

そして、すぐに見えなくなる。

「な、なんだつたんだ今 n——ん?」

「待てよ新八——!!」

「待つてくださいあーい!!」

そしてその後ろを、同じく爆走してくるインナー姿の女性と少女。あまりにも速すぎてシンフォギアを使わざる負えなかつたようだ。再び、見えなくなつていく。

「おおおおおおおおおおおおッ!!」

川へ、ダイブ。高速でクロールを使い泳ぎ、また地上を爆走していく。

「待つててばー!」

「止まつてくださいーい!!」

二人のインナー姿の女性と少女が、川を飛び越えて新八を追う。

——特設ドーム。長距離走会場にて。

「うえええーあああああああああああッ!!」

走っているアメリカの現役ランナーを軽々と追い越す。

「待てよー！」

「待つてー!!」

ランナーを追い越す二人のインナー少女とインナー女性。

——夕暮れをバックに、新幹線が走る線路。

「うえええーあああああああッ!!」

走っている新幹線を追い越し、そのまま爆走していく。

「なんで生身で新幹線より早く走れるんだよあいつはー!?
『愛憎の力だと思います!』

——野生動物が蔓延る、夜の森の中。

「ああああああああああああああッ!!」

クマ、猿、ゴリラなどの危険生物が見守る中、発狂しながら爆走する新八。

「どいてくれー！」

「あなたちは攻撃できません！」

野生動物たちに、足止めを喰らう二人。

——夜明けをバツクに、砂浜を走る新八。

「ああああああああああああああ!!」

二人は、追つてきていない。

そして、岸で立ち止まり——、

「マジでかああああああ!!!」

溜まつていた言葉を吐き、ザバーンと波が鳴る。

「神様ああー！一体僕が何をしたというんですかあ！たつた三ヶ月と二か月半休んだだけでこんな仕打ちあんまりだあ！」

(原作じや一年休んでたんだ。五ヶ月くらい別にいいだろー?)

幻聴が、どこからか聞こえた。

「万事屋の皆だけじゃなく、あのストーカーゴリラまでもが姉上を堕とし、僕の兄になるまで急成長を遂げてるなんてえー!!」

「完全に邪魔者になつてたじyan。完全に厄介払いで真選組に押し付けられてんじyan！万事屋でも、家でも置いてけぼり！こんな短い間僕の居場所はなくなつてしまふようなものだったのかああああ!!」「ひつ、酷いよ。まるで一人だけ知らない世界に放り出されたような気分だ…。僕は、これから一体どこに行つたら——」

新八の涙で、地面が濡れる。

——そんなとき、だつた。新八の左手に、優しく誰かの手が触れた。

「分かるよ。君の気持ち。だつて、僕も同じだから」
「——ツ！」

その声は、とても聞き慣れた声で。

新八が振り向くと、そこにいたのは、柳生九兵衛だつた。
しかも、恰好がとても女性らしくなつていて。

「あつ、きゅ、九兵衛さん？メ：メチャクチャ女の子らしくなつてる。
つーか、手——」

「あつ、ご、ごめん」

九兵衛は恥ずかしそうに少し離れた。九兵衛は男性に極度の抵抗
があり、自分から触れない限りはその男性を投げ飛ばしてしまふほど
だ。

そんな彼女が、自らの意思で——、

「九兵衛さん、男に触つても平気になつたんですか？つーか、そのカツ
コ…」

「ご、ゴメン。泣いてる新八君見てたら、ほつとけなくて。お妙ちゃん
がいつてしまつたから、僕も変わらなきやなつて」
(そうか、姉上への失恋がきっかけで…)

柳生九兵衛は、志村妙を愛していた。

それは本人ですら「自分が男性人格として妙を好きなのか、それと
もただ単に百合なのか分からぬ」と言うほどに。
しかし妙がゴリラと結婚してしまつたがために、変わつてしまつた
のだろう。

「へ、変かな？」

「ゞ、ごめんなさい失礼なこと言つて。メチャクチャ可愛いです。メチャクチャ好みです。あつ」

そこで、新八は自分が少し恥ずかしいことを言つていたことに気が付いた。

しかし、九兵衛の反応は初々しく、

「あ、ありがとう」

「あ⋮」

「あ、あの。新八君、君は一人じやないよ。僕もいるから、だから辛い時はここにおいでよ。僕もよくここのに来るから。同じ気持ちの人があるだけで、ちょっとは気が楽になるだろう?——その代わり、僕もいいかな?」

「え?」

「いや、あの⋮」

そういう、九兵衛は再び新八に向かつて手を伸ばす。

「たまに触る、実験台になつてもらつても」

(え、何コレ?)

「新八君だと、平気みたい。どうしてだろう?やつぱり、妙ちやんと似てるからかな?それとも——」

「うつ!」

新八の手に手を伸ばし、触れた。そして、新八も同じように、手をつないだ。

だが、恥ずかしくなつたようでお互い顔を逸らす。

(むつ、胸が張り裂けそうだあ!)

「僕、妙ちゃんを忘れないんだ。これからは、ちゃんと男の子と向き合わなきゃいけないって、だから、いい？」

互いを見つめ合い、顔を赤らめる。

(九兵衛さんつてこんなに可愛かつたけえええ!?)

「いいよおおお！全然いいですよおおおお！たまにじやなくて、毎日でもいいです！僕にできることなら、なんでも強力します！毎日触ります！」

「ホント？嬉しい。じゃあ、いっぱい触つて」

新八の手を今度は両手で掴み、立ち上がる。
そして——股を少し開いた（立った状態で）。

「優しく、実験してね」

そういう、九兵衛は自身の意思で、新八の手を自分の股へと向かわせる。
そんなとき、だつた。

「はあ、はあ：新八、どこ行つた？」

「確かここら辺で目撃情報が…って、あ！いまし……って、えええ！」

そんな時、後ろの方で、奏とセレナが現れた。シンフォギアの状態で今までずっと探していたようだ。

しかも、このR—18の案件の最中に、だ。

「なななな／＼／＼！何やつてんだあの二人はああああ！！？」

「と、とりあえず止めましょう！」

「そそそそ、そうだな！おい目を覚ませ新八ー！」

二人がこちらに向かつて走る。

しかし虚しく、行為の途中の二人の耳には届いていなかつた。

(えつ、ちょつ、待つてえ！九兵衛さあああああん！そんなつ、そんな実験してたらあ、僕は！僕はあー！マツドサイエンティストになつちやうよおー!!!)

(「ああああああああああああああつ!!」)

二人の絶叫と、新八の心の絶叫が響いた——瞬間、三人は異変を感じ取つた。

その異変とは——九兵衛の股間。そこには、ナニか、フニフニしたものがあつた。

新八は何度も手を動かし、無気力な顔でその感触を何度も確かめる。

「――」

「アレ？ 何かあるんですけど。触り慣れた何かが」

新八は力が抜けた手を、九兵衛の股から離す。
そんな彼を他所に、九兵衛は説明を続ける。

「どうだろう？ 新八君のと比べて、先日工事が終わつたんだが、異常なのか正常なのかもよく分からなくてな」

「——工事つて、なに？」

「ナニだ」

「ナニつて、何？」

「男の子をつける突貫工事だ」

瞬間、三人の目が白目になつた。

つまり、九兵衛の股には、男の象徴である、アレが取り付けられて

いると言うことになる。

「何をしどんのじやああ！おのれはあああああ！！『たま』に触るつてそつちの『玉』かああああ！」

「な、なななななにやつてんだよあんた!?」

「ど、どうしてそんなもの付けたんですか!?」

急に現れた女性と少女にも動搖を示さず、九兵衛は言葉を続ける。

「以前のようにではなく、上は女、下は男。ハツキリと分かれた者に生まれ変わったのだ」

「結局更にややこしい事になつてんだろーが！」

「なんでそれをする必要があるんだよ！バカかあんたは!?」

「今からでも遅くありません！すぐにでも――！」

「出会い系ばかりの君たちに言われる筋合いはない」

「いやアタシ等は出会い系とかそんなんじゃなく、『女』として言つてゐんだよ！」

「そうです！それはいくら何でも…！」

だがしかし、九兵衛の意思是固く、それにぽつと出の人物の言葉など聞く耳も持たず、

「もう男だ女だと追及するのは疲れた。今は、性別を超えた存在にされる新世界を、の人たちと探している」

そういう、海岸の方にいた人物たちの方を見る。

そこには、女性ものの水着を着た、オカマたちがいた。

「九ちゃん。そろそろ帰るわよ」

「この人どんでもない新世界に行こうとしてるよ！青ヒゲ海賊団と新世界にボンボヤージュしようとしてるよ！」

「ダメだ！それは行っちゃダメな新世界だあ！」

「——？」

叫ぶ二人。そして、精神年齢上にその意味がまだ理解できていないセレナ。

「つーかかまつ娘俱楽部こくらぶで働いてんのアンタ！」

「フン、一応エースをやらしてもらっている」

「フンじやねーよ！色々衝撃的過ぎて全然ついて行けないんですけど！」

「——いい加減にしろ、九兵衛殿」

「「「——ツ!!」「」」

その時、九兵衛と新八には聞き慣れた声が。奏とセレナには初めて聞いた声が聞こえた。

その方向を振り返る。そこには、ロン毛の男が太陽の光をバックに立っていた。

「そんな粗末なものをつけて、あくまで俺とキヤラをかぶらせてくるつもりか」

「——貴様は

「な、なんだ？」

「え、え？」

「両者堅物マジメキヤラ、違う所といえば性別くらい。その支えなくして俺の出番を食う魂胆か。フフ、だが読みが甘かつたな。そなたがその粗末なモノをつけている間に——俺は！」

その人物が、服を脱ぎ棄てる！

「おつ」

「えつ!?」

「え…?」

その人物——桂小太郎は、女物のチャイナ服を着て、バラの背景をバツクに、叫ぶ

「ズラ子は、とつたどオオオオ!!!」

* * * * *

「かぶつてねーつて言つてんだろーが!!腐れ電波バカアアアア!!!」

「うおおーつ!」

新八は桂——ズラ子を海に勢いよく投げ飛ばした。

「キヤラ被りを気にしてキンタマとつてくるバカがお前以外に何処にいるよ!つーか結果的にニユーハーフキヤラ自ら被せちまつてんだけおー!!」

「しつ、しまつた。局地的戦術にこだわるあまり対局を見失つたわ」「対局依然にとんでもねーもん失つてるからね!?」

「——九兵衛殿。やはり私たちはどこまでいっても被り倒す運命から逃れられないようね。出番が欲しければどちらか一方の存在を消すしかない」

「そ、そんな！共存して、仲良くなる道はないんですか！」

そんなとき、セレナが叫ぶ。優しい彼女のことだ。存在を消す——つまり、殺し合うと言うことに反応したのだろう。

「少女。これはもう運命——必然なのよ」

「それに、キャラ被りと言うのはキャラクターにとつて死活問題……同じ特徴を持つ者は、この世界に二人もいらない！」

「その通り！——これは私たちの問題。だから口出し無用よ。——九兵衛殿。タマと胸がある者、タマも胸もない者、どちらが真のオカマかはつきりつけようではないか！」

九兵衛とズラ子が飛び——、

「カママつ娘俱楽部のエースは、この『僕／私』だああああ!!!」

「それは取り合う価値のあるものなんですかあ!?」

「それは取り合う価値のあるものなのかなあ!?」

二人のツッコミを他所に、空中にて黄金のオーラを纏いながら戦闘を繰り広げる二人。

唯一、セレナが心配そうな目で二人を見つめる。

「やつぱり、殺し合いなんて——」

「いや、あれに関しては無視していいぞ、セレナ」

「ええ!? なんですか!?」

「動機が下らなすぎるからな」

奏もこれに関しては諦めたようで。

「……なんてこつた。まさか成長どころか性別まで変わる人が出てくる

なんて。ただ一つ全員共通してるのは、アホなのは変わりないって事だけだ」

「おい、それは聞き捨てならねえな」

「そうです！」

新八のまとめに、二人が反論を示した。

「翼はちょっと家事ができない残念な子つてだけだ！」

「マリア姉さんはおつちよこちよいなだけです！」

「それを言い換えれば『アホ』って言うんですよ？」

そのとき、『ポフッポフッ』と、言う、車の音が鳴った。
三にが後ろを振り向くと、そこには真選組と書かれた白と黒の車が。

「いたいた、オイ腐れメガネ。てめえ初日からエスケープきめこむたあいい度胸じゃねーかああん？」

「——死ぬ準備は出来るか？ああん？」

車の窓が開き、そこからバズーカ砲の銃口が出てきた。
そして、容赦なく発射される。

「「うわああああああ！！」」

着弾し、爆発を引き起こす。二人はシンフォギアを纏っているから
ある程度は問題ないが、新八は別だ。

新八は前に押し出され、地面とキスをした。

「な、なんだよ急に……！」

「あつ、志村さん！大丈夫ですか!?」

「ごあぐつ、う、お、沖田さん？そのバズーカは沖田さん——」

「何寝ぼけてんだア。しばらく会わねえうちに脳みそにもメガネが必要になつたかああん？」

「俺だよ俺。真選組鬼の副長」

その男は、タバコをふかし、体にニコチンを取り入れる、容赦無用の金髪の男――！

「ジミー山崎だよああん？」

——山崎さがる退

真選組の監察（密偵）。黒目黒髪の冴えない地味な男性であり、職種も地味。

あると言える特徴は圧倒的な地味さとバドミントン（ついでにアンパン）。

二回目の人気投票では9位。

「ええええええええええ!!!!??」

本編

わいせつ物陳列罪

どうも皆さん。私の名前は【立花響】って言います。

S.O.N.Gという組織で【シンフォギア装者】をやっています。

私……誰と話してんんだろう？

まあそれはどうでもいいとして、私は今……

「はい、お前ら三人、わいせつ物陳列罪で逮捕な」

私の先輩である憧れの【風鳴翼】さんと、同じく先輩であり友達である【雪音クリス】ちゃんと三人で茶髪で黒い服を着た。刀を持った男性に手錠をかけられました。

「ちよ、話を聞いて——」

「話なら取調室で聞いてやらあ。ほら、乗った乗った」

そしてそのまま黒服で刀を持つ人たちに。パトカーに乗せられて
：連行されました。

どうしてこうなったんだつけ…！？

そう、あれはさかのぼること数時間前のことだつたかな？

私や翼さんやクリスちゃんは、急に指令室に呼び出された。

「師匠ッ!! どうしたんですかッ!?」

私は指令室にいる私たちの司令であり私の師匠、そして翼さんの叔父である【風鳴弦十郎】さんに呼び掛けた。

「響くん！ 翼！ ク里斯くん!! よく来てくれたッ!!

「叔父様！ この度は一体…？」

「皆さん、聞いてください」

そしてそこに私たちS・O・N・Gの研究者であり私の友達でも

ある【エルフナイン】ちゃんが翼さんの問いかけに答えてくれた。

「この度、ギャラルホルンが起動し、また平行世界への扉が開かれました」

「またカルマノイズかよッ!!」

【ギャラルホルン】――今だに謎が多い完全聖遺物で、平行世界側に異変が起こるところ側の世界につながるらしんだ。

ギャラルホルンが発生させるゲートを通れるのはシンフォギア装者だけで、それで私たちは平行世界の異変を解決するべく、平行世界に行かなければならない。

「そのことなんですが……実は少し変なんですね」

「変?」

クリスちゃんがエルフナインちゃんにそう問いかける。
変つてどういうことだろう?

「はい、皆さん。ギャラルホルンが平行世界私たちの世界を繋げるとき、とても大きな音が鳴ることは知っていますよね?」

それは私でも知っている。毎回その音で平行世界と繋がつたんだなってわかるから。

「それがどうかしたのか?」

「実は…音の大きさが変なんです」

「音の大きさ?」

「はい、いつもは大きな音が鳴りますが、今回はなぜか大きな音と小さな音が交互に鳴り響いていたんですね」

「それはつまりどういうこと?」

「理由は分からぬ。だが、もしかしたら今度の平行世界は今までと

は違う可能性がある。マリアくんは今は別の任務についてもらつて
いるし、調くんと切歌くんは今学校の補習で手が外せない。だから君
たちで行つてもらいたい

「分かりました師匠ッ!!!任せてくれさい!!」

「ありがとうッ!!では、行つてきてくれッ!!」

「「はいッ!!」」

そうして私たちはギャラルホルンの光を通つて、平行世界に向かつ
たんだけど、着いた先は……

——ガヤガヤ……

ザ・昔と言えるような街だつた。

周りの人たちも浴衣のような昔の服を着ていた。

時代的には…江戸時代くらいかな?

でも、そんなことより…問題は…

「まずいぞおい…………めちゃくちゃ人に見られてる…!」

クリスちゃんがそう言う。

実際、何故か私たちがついた先は街中。つまり、人がたくさんいる
⋮
ということで、今急に表れた私たちを『なんだなんだ』とたくさん
の人が見てる。

まさかこんなことになるなんて……

「はいはい、どいたどいた」

すると、周りの人を搔き分けて黒い服の人に入ってきて、私たちに
近づいてきた。

その人の第一印象は爽やか系のイケメンさん。

そしてその人は……

「はい、お前ら三人、わいせつ物陳列罪で逮捕な」

私たちに手錠をかけました……

そして、今現在こうなっているわけです……

「いやあ～～まさかパトロールの最中にビッチを見つけるとはねえ～」

「ちよつ！私たちはビッチなどでは…」

「うるせえよ。大体なんだ？その恰好？プ〇キュアだつてもつとマシなもん着てるぜ？」

プ〇キュアがなんなのかはわからないけど、実際そんな勘違いされても仕方ないのかな…？」

シンフォギアって、端かた見たらすごく変だもん…性能はすごいのに…

「あのなあ…頼むからアタシ等の話を――」

「だから話は豚箱で聞いてやるつて言つたでしょい？頭も裸になつてきてやがるのか？」

「おい!!さつき取調室ツつたよなつ!?豚箱になつてるぞツ！」

「そんなこと言つたけつなあ～～？まあちゃんと話くらいは聞いてやらあ。裏社会に売り飛ばしたでなあ

「ひいいい！」

「ちよツ!!!裏社会つてどういうことですかツ!?

「そのまんまの意味でさあ。裏社会にはお前らのような変態でも買いたいってやつがいるぜ?」

この人…悪い人だツ!!爽やかな顔しててのに、すぐ怖い人だツ！完全に私たちを売り飛ばす気だ…ツ!!

「翼さん、クリスちゃん。これ逃げないとやばいよ…」

「ああ。私もそう思う。あれは完全に裏の世界の人間だ…！」

「でも、ここで逃げたらアタシ等完全にこの世界で逃亡犯になつちまうぞ?」

「売り飛ばされるよりはマシだろう。では、私の合図で一斉に飛び出
すぞ。せーの——」

そうして一斉に車から飛び出そうとしたその時、

「まあ嘘なんだけどよお」

この一言で、三人で一斉にこけた。

「う、嘘……？」

「顔が完全に本気だつたぞ……？」

「あれで嘘なんてありえねえだろッ!!」

「はっ、なに言つてんだおめえら。俺だつて仮にも警察だぜ？そんな

ことするわけねえだろおよお」

「な、なんだ……よかつた……。あ、ところで気になつたんですけど……

あなたの名前教えてください」

「どうしてそこでその質問が来るのかは分からねえが……いいぜ。教え
てやるよ。

俺の名前は【沖田総悟】だ

沖田総悟…?

あれ? 確か私の知ってる歴史に沖田総司って人がいたはずだけど
……

「総悟? 総司じやなくてか?」

どうやら翼さんも同じことを思つていたそうだ。

「は? 何言つてんだおめえら。 それはオリジ n——なんでもねえ
や」

「今、なにか言おうとしなかつたか?」

「おめえの耳はストローかあ? ああそりゃ。 もうそろそろつくぜえ」

そして総悟さんは車を走らせる。

そういえば、他の人たちはどうしたんだろう…?

「他のやつらならパトロールの最中だぜ」

「なんで考えてること分かつたんですかッ!」

なんで私の思つてることバレたのッ!?

「なんでつてそりやあ……」都合主義つてやつでさあ。 さてそろそろ
……ん?」

すると総悟さんは車の窓を開けて後ろを見る。
私もなんだらうと思い後ろを見てみる。
そこには……

「待てい真選組ツ!!」

そこには、原チャリに乗つて車に追い付いてきた、ロン毛の男性がいた。

そしてその隣には……何あれ？白い着ぐるみ？の人がいた。
ていうかなんで自転車で車に追い付けてるのツ！？

「桂ツ!!」

「また会つたな真選組1番隊隊長沖田総悟ツ！」

「まさかわざわざテロリストの指名手配犯自ら来るとはなあ。豚箱に
でも入りに来たのかい？」

「テロリストツ！」

もしかして私たちピンチ？いや、私たちはにはシンフォギアがある
けど、このままだと沖田さんが危ないツ！

「そんなわけがなかろうツ!!今日こそはお前ら真選組を壊滅させてや
るツ!!手始めにお前からなツ！」

“ そうだそうだ”

あの白い人？はプラカードで話している。

「そんなことはさせねえが……ところで桂、その怪我どうした？」

……それは私も気になつてたな……

だつてこの人、血まみれなんだもん……

「ああこれか？実はさつきこの原チャリでサファリパークを走つてき
たんだ。ライオンとかがすごい近くで楽しかったぞ」

「お前ただのバカだろッ！」

クリスちゃんがそうツツコんだ。でも、私もそう思う。あの血塗れ
の姿を見て思つた。多分檻の中を走つていたんじや……

「はつ！さつきまで街中でそんな恰好をしているお前には言われたく
ないぞッ！」

「お前見てたのかよッ！」

「当たり前だ。なにせさつきまであそこでバイトをしていたからな」

「なんでテロリストがバイトをしているんだ…？」

「資金確保だ！」

「以外と真面目！」

「ていうか血塗れでバイトしていたのかッ?!」

「当たり前だッ!!この程度の怪我、俺の覚悟と比べればどうというこ
とはない！」

「いや手当てしろよッ！」

「ところで君たち、その恰好はもしかしてプ○キュア？もしくはセー
○ームーンか？いや、セー○ームーンはセーラー服を着ているからそ
れはないか……あ、もしかしてガ○ダムが女性に擬人化したとか…」
「お前は何言つてるんだッ!?」

本当にそれなに!?

私たちつてこの世界の人たちに一体どんな風に見られてるのツ?!

「てめえら、なにベラベラ話してんでえ。桂ツ!!くたば
れえええええええ!!!!」

すると、沖田さんはハンドルを右にやり、その衝撃で桂さんが空に吹っ飛んだ。

「ええええええええええ!!!!」

「何故ぶつかつただけで空を飛ぶのだツ!?」

「ていうかあいつ大丈夫なのかよツ!?」

「あつ!しまつた!あれじや桂を捕まえられねえ!」

「安否はツ!?」

「どうでもいいに決まつてんだろうよおい!!むしろ死ねツ!!!」

「酷!」

「まあ、吹っ飛んじまつたのはしようがねえか。あとで【土方】さんに報告しねえとな……。さて、そろそろつくぜえ」

そして、車から降りるとそこは……

「ここが俺たち、真選組の屯所だぜえ」

真選組と書かれた場所だつた。

そして門番の人があいさつしてきて、そして中に入ると……

「よお総悟。そいつらが報告に来た変態三人組か?」

黒髪の、黒い服を着た男性がいた。

後、私たち変態じやありませんツ!!!

マヨネーズとゴリラ

「あの…私たち変態じやありませんッ！」

「は？その恰好のどこが変態じやないっていうんだよ？」
「うつ……」

正論を言われると何も言えない……

「そんなことよりてめえら。特別に教えてやる。こいつは【土方十四郎】つて言つて、俺たち真選組の副長だぜえ」

「敬語を使え総悟ッ!!まあいいか……そう、俺こそが鬼の副長、土方十四郎だ。名前くらい知つてんだけ？」

「知らないな」

「知らねえよ」

「ごめんなさい、知りません……」

土方歳三は知つてているけど……この人たち少し名前違うからなあ
……

しかも、私たちこの世界の人間じやないし……

「…………」

「……ブツ」

「総悟ッ!!おめえ今笑つたろッ！」

「何言つてんすか？俺は別に土方さんのことは笑つてませんよ。ただ自分が有名だと勘違いしているお調子者を笑つているだけですぜえ」

「それ俺のことだろおおおおお!!」

「えつ、もしかして土方さん。今まで自分のこと超有名だと思つてたんでですかい？そりやあ失礼しやした。土方さんが有名になつていてる勘違いした理由はたぶん……今まで斬り殺した奴らが土方さんを知つてているだけで、一般市民にはあまり伝わつてないんじゃないですかねえ？」

「てめえ総悟ッ!!俺のこと舐めてんのか!!」

「ええ舐めてやすぜ。前も言つたでしょ。俺が舐めてるのは土方さんだけだつて

「殺すッ!!!」

そうして土方さんは持つてゐる刀を抜刀して沖田さんに斬りかかつた。危ないッ!!

私は沖田さんに向かつている刀を受け止めようとした。だけど

……

「これなあ～～んだ?」

沖田さんは懐からあるものを取り出した。あれは……?

「マ、 マヨネーズッ!!?」

それを取り出した瞬間に土方さんは刀を振るうのを止める。ていうかなんでマヨネーズッ!!

「て、 てめえ!!」

「どうしやしたか土方さん。このマヨネーズがどうかしやしたか?」

「そ、そ、それは…………」

「ああ、これですかい? 実は土方さんの部屋の隠し倉庫に締まつてあつたのを拝借しておいたんですよ」

「そ、それは……俺の手作りマヨネーズッ!!返せこの野郎ッ!!」

土方さんはそのマヨネーズを取り返そうとするけど……

「ああ～～～やつちまつたあ～～～」

「# &%? * - ? @ ; + ◇ ? □ ~ ||ツツツツツツツツ!!!!!!」

言葉にならない叫び

なんと、沖田さんはそのマヨネーズを地面にぶちまけた。
そして土方さんは奇声を上げてしまつた。あのマヨネーズにどう
してそんなにツ!?

「うるせえし…手錠で耳がふさげねえ…」

「たかがマヨネーズに一体どうしてここまで……?」

「お、俺の高級卵ツ!! 高級塩ツ!! 高級酢ツ!! 高級コショウツ!! 高級
油アアアアア!!!」

あ……もしかしてそのマヨネーズって、全部高級品をふんだんに
使つてたんだ……

「すいやせん土方さん。手が勝手に動いてしゃいまして。本当はこん
なことするはずなかつたんですがねえ」

その時の沖田さんは……すごい顔で笑つていた。
絶対わざとだ……

「てめえええええええ!! 殺すツツ!! 絶対殺してやるうううううううう
!!!」

そしてすごい勢いで沖田さんに刀を振るう。
まずい!!間に合わないツ!!

「油断したな土方ああああああああああああああ!!!」

その瞬間、土方さんがものすごい勢いで吹つ飛んだ。
あれ?逆じやない?

「こうなるだろうと思つて、用意して正解だつたなあ」

沖田さんの手にはバズーカが握られていた。
なんでバズーカッ!!?

「おめえ、さつきまでそのバズーカ持つてなかつたろッ!? どつから取り出したんだッ!?

「そんなの今さつき出現したに決まつてるだろおよお」

「何故出現するのだッ!?

「そんなの、ギヤグの特権つてやつだ

「何故そこでギヤグッ!?

「ていうか土方さん無事なんですかッ!?

「ああそうだ。死んでくれたらいいんだけどなあ……

「物騒なこと言わないでくださいッ!!」

煙が晴れると、そこにはピクピク痙攣しながら上半身が壁に埋もれている土方さんだった。

「土方さんッ!!」

「ちつ、まだ生きてたか」

「殺すつもりで撃つたのかッ!?

「当たりまえだろおよお。逆にバズーカつてのは人を殺すために撃つもんだ。いい加減死んでくんねえかな…」

「酷いじやないですかッ!! 上司なんでしょうッ!?

「確かに上司だけど、本当に心配していいのかい?」

「どういうことですか?」

「おめえら、もしかしてわかんなかったのか? 実はな、土方の野郎。お前らのこと視姦してやがったんだぜ」

「「ええええ??」」

し、視姦つて!?もしかして／＼／＼…
でも、そんな素振りなかつたような…／＼

「土方の野郎はな、ああ見えて結構エロいんだぜ?きつとお前らのあ
んなところやこんなところ……具体的に言うとお前たちの【ピ——
————】とか【ピ————】を想像してたにちがいえね」
「「きやああああああああ!!」」

「なんでそんなこと平氣で言えるんですかああああああ／＼／＼!
わわわわわ……／＼／＼

「なんでそんなこと平然と言えんだよツ!!」
「当たり前だろおよ。そんなんで驚いてたらこじややつていけ
ねえゼ?」

「そんなんでつて……それ以上にすごいものがあるのかツ!?」
「あるに決まつてんだろうよお。さて、そろそろ行くぜ。出ないとお
めえら土方に【ピ————】されるぞ」

「「行きますツ!!」」

あの人…………眞面目そうな見た目だったのにそんなエッチなこと
考えてる人だつたなんて……
近寄らないでおこう……

謎のナレーター

こうして、土方の知らない間に、土方の評価は底辺、いや、奈落の
底まで落ちて行つたのであつた。

そしてその時、沖田がものすごく悪い顔を誰も見えないようにして
いたのは言うまでもない

「さて、お前らには俺たち真選組の頭、【近藤】さんに会つてもらうぜ」「近藤……もしかして近藤勇かッ!?」

「ちげえよ。近藤さんの名前は勲だ」

やつぱり、この世界つて私たちの知つている歴史と少し——いや、
大分違う……

そして沖田さんは一つの部屋のふすまの前で止まつた。

「ここに、局長の近藤さんがいるんだぜ」「どんな人物なのだろうか……?」

翼さんもやつぱり疑問に思うよね……

私だつて疑問に思うよ。だつて沖田さんは爽やかな見た目だけど
悪そうな人、土方さんは眞面目そうだけどエッチな人だし……どんな
人なんだろう?

「ついでだ。お前らに近藤さんの秘密を教えてやる」「秘密?」

「そうでえ。近藤さんは毎回この時間帯にある練習をしているでえ。

「これは俺が裏ルートから仕入れた情報だ」

「裏ルート…？」

「そこは聞くんじゃねえぜ。このままノックすると入るのに時間が掛かっちゃう。だからそのまま入るぜ」

「近藤さん。開けますぜー」

そして沖田さんはふすまを思いつきり開けた。

そこには……

「お妙さ——んツ!!」

全裸の男の人が、誰かの名前を叫びながら布団に飛びついていた。
そしてその時に、見えてしまった……

「「「きやああああああああああああああ!!」」

その時、私たちは思いつきり叫んで、無我夢中に歌つた。

そして翼さんはアームドギアを大きくして、クリスちゃんはミサイルを出現させて、私は拳にフォニックゲインのエネルギーを集めて、裸の人に集中攻撃をした。

「うわああああああああああああああああ!!」

裸の変態の人は声を大きく上げる。

「うおおい……なんだこりや……？」

「「「あ…………」」

たぶん、この時の私の思考と二人の思考はつながったと思う。
やってしまった。と……

「すげえ威力じやねえか……」「えつ、そつちツ!?」

てつきり部屋壊しちやつた挙句、あの人に攻撃したこと怒られると思つたのに……

「いやあ、近藤さんのあの姿を見せて驚くお前らの姿を見たかつたんだが……まさか急に歌いだしたと思つたらこんな結果になるなんてなあ……」

「あれ知つてて見せたんですかツ!?」

「当たり前だろおよお。最初に言つたる。練習してるつて……」

「逆にあれはなんの練習なのだツ!?

「なんでも、今近藤さんが絶賛ストーカー中の女と一夜を過ごすときのための練習らしいぜ」

「はあツ!?ストーカーツ!?

「何故警察がストーカーをしているのだツ!?しかも局長なのだろうツ!?

「し、しかも一夜つて……あわわわ……//／＼

「まあ、俺もそんな日は一生来ないと思つてるから、気にすんな」

「どこを気にしなければいいんだろう……?」

「局長ツ!!どうしたんですかつて……沖田隊長ツ!?それに……痴女?」

「「「痴女じやない!!!」」

すると、そこに黒髪の沖田さんたちと同じ服を着た男性が走つてきた。

「ていうか、手に何持つてるの?
……アンパン?」

「おお、【山崎】。どうしたんでえ」

「どうしたも、こうしたもないですよ。急に大きな音が聞こえたと思ったら、こんなことになつてたんですから」

「ああ。それならさつき変態をこの変態が退治したぜ」

「「変態じやない／です／つての!!」」

「あ……またあのゴリラか」

無視された……

ていうか今、ゴリラって言わなかつた?

上司にゴリラって……ていうかゴリラってどういうこと?

「でも、変態が変態を倒すつてなんかシユールだなあ」「それのどこがシユールなんですか。ていうか、その子たち手錠をかけてるつてことは、犯罪者なんですか?」

「おうよ。わいせつ物陳列罪だ」

「ああ、確かにそうですね。そんな恰好してれば……」

「うううう……翼さん、クリスちゃん。一回元の姿に戻らない?」

「そうだな……最初からそうすればよかつたな」

「ていうかさつきまでそんな暇さえなかつただろ……」

そして私たちは元の服装に戻るために一回光に包まれる。

そして光がなくなると私たちは元の服装に戻る……はずだつた。

「「……え?」」

私たちは、しばらく思考が停止してしまつた。

何故なら、私たちの今の姿は、元の服装ではなく……

沖田 「…………」（ゴミでも見ている目）

山崎 「…………」（鼻血を出している）

「「「き」や…………き」やあああ！」！」

全裸、だつたから……

「ゴミクズ野郎の本性を、後から知るつて怖いよね。

どうも、立花響です。

私たちはわいせつ物陳列罪で警察の人に逮捕されて、爽やかそうな見た目なのに悪い人の【沖田総悟】さん。

真面目そうな見た目なのに沖田さん曰くエッチなことを考えているという【土方十四郎】さん。

そして変態の【近藤勲】さん。

もはやこの人たちが本当に警察なのか疑つてしまふところなんだけど、今、私たちは……

「みみみみ、見ないでくださいッ!!//」

シンフォギアを解除したら、何故か全裸になつていきました! //

「……山崎、童貞のお前には刺激が強すぎらあ。とりあえず毛布持つてこい」

「ちよツ! 童貞は沖田隊長も同じじやないですかツ!」

「そうだが、とりあえずいいから毛布持つてこい」「分かりましたよ！」

そうして山崎さんは毛布を取りに行つてくれた。

「ていうか、お前いつまで見てんだよツ！」

「頼むから、見ないでくれツ！」

まさか…会つて間もない男性に自分の全裸を見られるなんて……

——カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ
シャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ
シャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカ
シャカシャ——

ツ!!??
その時…多分、いや、絶対だろう。

カメラのシャッター音が鳴り響いていた。

その音の方を見ると……

「…………」

シャッターを切つていたのは沖田さんだつた。

「なななな／＼何やつてるんですかツ!!?」

「いや、ちょっとした小遣い稼ぎでさあ」

「まさかその写真を売る気かツ!?」

「ああ。お前ら、結構なベッピンさんだからな。高く売れんだろうよお」

「おい！マジでやめろッ！」

「あつちよツ!! クリスちゃん!」

クリスちゃんが立つてしまつたことで……見えちゃつたあああああああ!!!

「お、これは高く売れるぜえ～」

「えつ……？……ああああああああああああああああ！！！」

クリスちゃんは今すぐ隠すけど、もう遅いよお……

「お前、今すぐそれを捨てろッ！」

「俺が犯罪者の言ふことを聞くとでも？」

「今でも貴様は十分犯罪者であらうッ！」

卷之三

「「「それ警察の言うことじやない／だろ!!」」

この人さう、危険警察じやな、おうううう！

「沖田隊長ツ!! 毛布持つてきましたつて、なんですかこの状況」「おお山崎。こいつらの裸の写真、一つこれくらいでどうよ?」「ええツ!? これはちょっとお得かも…………入りませんよツ!!」

今、
お得かもつて…!!

とりあえず、私たちは毛布で体をくるむ。

「はあ……何と言いうことだ……」

「まさか、裸を取られるなんて……」

「沖田隊長。その写真今すぐ消した方がいいですよ」

「ええ～。本当にいいのかよ山崎」

「何がですか？」

「実はな、俺はさつきあの銀髪の【ピ――】を激写したんだ。見たくはないかあ？」

「まあまあまあまあまあ

〔二〕

「えー、マジですか！」「では……とはかくマジでやはいてすよそれ！」
「とりあえず、これを裏ネットにばらまくか……」

え、本当にまずい!!

「や、やめろおおおおおおおおおおおお!! キリタアアアアアア
バアアアアル トロオオオオオオン!!」

クリスちゃんはすごい声でシンフォギアを纏つて、沖田さんをミサイルで攻撃したッ!!

それはますいよクリスちゃん!!

二
ツ
!!

「ああああ!! 沖田隊長ますいですよッ!!」

すると、そのとや……

「おい総悟てめえ!! さつきはよくもやりやがつたわは?」

「土方ツ!! いいところに来たなツ!! 土方シールドツ!!」

……土方さんが現れたけど、沖田さんの盾にされちゃった……

「く、クソ……サデイスティック星の王子……め……」

そう言つて土方さんはまた倒れた。

ていうか、サディスティック星つてなに!?

「変態死すべし慈悲はない……てなあ

「今はお前が変態だろツ!!」

「まあまあ落ち着け目ノツ」

「三乳のパ」

「う、この変態野郎ッ!!」

クリスちゃんはそうして胸を隠す

「それ、逆に胸を強調してさらにエロくなつてるぜ？」

クリスちゃんは完全に顔が真っ赤になってしまった。

「まあ、それはどうでもいいとして……山崎」

——はいツ！なんですか？

「ええ? されば、用意が三つあります」

！それは、自分でやつて、【三】分かれました。

そして山崎さんはそのまま走り去つていった。

「ところでてめえら。取引と行こうじゃねえか」

「取引だとお!? さんざんアタシらのこと辱めたクセに何言つてやがるッ!!」

「辱めた？何言つてんでえ。また序盤だぜえ。まだ【ピ——】 もしてねえだろうよお」

「なななななな／＼＼＼＼！」

なんで……そんなこと平氣で言えるんですかツ?!

「まず、てめえらは俺たちのどこで働け」

「「はい??」」

「てめえらをただの変態と思っていたが……かなり力のある変態じやねえか。だから、それをこの江戸の平和のために使え」

「私たちは、もとより、この力を世界のために使っているツ!!」「なるほど……大体わかつたぜえ。お前らの後ろにはなにかすげえもんがついてるのかもな?」

「「ツ!!」」

「これを見ろ」

そうして沖田さんは近くにあるリモコンでテレビをつけた。

ていうか、なんでテレビがあるのツ!?

『それでは、現場に中継を合わせます。結野アナ。結野アナ』

『はい、こちら現場の結野です。本日、かぶき町のど真ん中に信号機の色をした謎のハイグレ姿の女性三人組があの謎の水色の穴から現れ、わいせつ物陳列罪で真選組によつて逮捕されました。真選組があの穴について、現在調べており、何かわかり次第、お伝えする模様です』
『はい、ありがとうございました』

そうしてテレビのニュースが違う内容になる

「なんということだ……もうニュースになつているのか……!?」
「ていうか、あれアタシら帰れんのか……!?」

「まあ今見た通り、もうお前たちは立派な犯罪者だ。それに、あの穴はもう将軍の監視下に入つた。この情報はまだ伝えられてねえがな」
「……どうしてそんなこと知つてるんですか?」

「裏情報だ」

「「（す、すゞ）い気になる……」「」

「まあそんなわけで、お前らが出てきたであろうあの穴にはもう近づけねえってことだ」

「ど、どうしよう……」

そんな…あれじやあもう帰ることすら難しくなっちゃつた……

「おめえらだつてなにか事情があるんだろうよお。だから、俺ら真選組がお前らを匿つてやる」

「そ、総悟さん…!!」

なんだろう……すごく最低な人だと思つてたのに、なんだか眩しく見えてきた…！

「まあ、俺一人じや決定できないから、土方さんや近藤さん。やっぱ片栗虎のおっさんに相談しねえとな……」

片栗粉……？なんでそこで片栗粉が出てくるんだろう…？

「…そういうえば、匿つてくれるのはありがたいが、さつき山崎とやらに頼んだものはなんなのだ？」

「ああ、あれか？あれはな――

あのカメラを持たせてコンビニのコピー機に直行させただけだ

「「……え？」

え、それ、もしかして……

「お前らの【ピ————】が映ってるやつが、今頃どうなつて
いるのかねえ…？」

その時、沖田さんはすごい悪い顔をしていた。
やつぱり、この人最低だ…!!

「雪音ツ!!立花ツ!!今すぐにそれを回収するぞツ!!」
「はいツ!!」

「おつとこの敷地からは出さねえぜ」

そうして沖田さんは無線機らしきものに手をかけた。

「真選組の全隊員に告ぐ!!変態信号機三人組が脱走を試みているツ!!
全員たちに配置について、一人も逃すなツ!!捕獲しろツ!!」

その瞬間、刀を持つた人達が私たちを取り囲んだ。
もうすでに…!!

「くつ……!!彼らには悪いが、ここは強硬突破させてもらうぞツ!!」

「おうよッ!!あの写真をばらまかせるわけにはいかねえんだよッ!!」「皆さん!!すみませんが無理やりにでも通してもらいますッ!!」

二人はシンフォギアを纏つてそれぞれの武器を向ける。
そして、シンフォギア装者VS真選組の闘いが始まった。

「さてと…山崎の方はうまくやつてるかね…?」

争いが続いている中、沖田はあるものに手をかけた。
それはカメラだつた。そう、このカメラは先ほど響たちの裸を取つた写真だ。

「本当は、こうした方が面白いんだろうけど……俺だつて警察だ。それに、こんなことやらかしたら土方を殺したところで、近藤さんの隣に立てなくなるに決まつてんだろうよお」

そうして、総悟はカメラの中からメモリを取り出した。

「山崎には【旦那】宛てに手紙を持たせた。【旦那】ならあの【穴】のことなんとかしてくれるだろおよお。さてと、報酬は土方の通帳からとらなきやあなあ……。あいつの番号は把握済みだ。さて、これからどんどん面白くなるぜえ……！」

沖田は不適な笑みを浮かべた後、刀を抜剣し、メモリを細切れにした。

そのころ、シンフォギア世界では……

「こ」これは、三人が平行世界に行つたしばらく後の話である。

「さて……三人は大丈夫だろうか……？」

「今回も、無事を祈るしかありませんよ」

「そうだな……」

「弦十郎さん」

「どうしたんだ？ エルフナイン君」

「僕たちは僕たちにしかできないことをやろうと思います。まず、ギヤラルホルンのアラーム音についてです」

エルフナインがそれを言うと、全員が顔をしかめる

「そうだな……今まで、あんなことはなかつた……」

「やはり今回の平行世界はいつもとは違うということでしょうか

……」

考えれば考えるほど謎が出る。

そんなときだつた。

「ツ!? 司令!!」

「どうしたツ!?」

「操作が……操作が効きませんツ!!」

「なんだとおツ??」

オペレーターの二人にいろいろと操作するが、どうやら受け付けないようだ。

「もしかして、ハツキング……ツ!?」

「そんなこと、今までなかつたぞツ!!」

「と、とにかく、ボクもやつてみますッ!!」

二人を助けるためにモニターの席にエルフナインがついたその瞬間だった。

突如、画面が変わった。

『どーですか、龍さん』

『こちらは準備オーケーだぜ狐さん』

そこには、いろいろ謎の機材を持つた龍と狐が映し出されていて。身長は成人男性ほど、そして手も足もある。

この謎の映像に皆は困惑するしかなかつた。

ちなみにだが、字幕はあります。

『ほら、スタッフの皆も、さつさと持ち場に着くよ』

『そーだぜ。これが俺らの仕事なんだからよ』

『『『『はいッ!!』』』』

画面には映つてはいないが、どうやら人?がたくさんいることには間違いない。

「な、なんだ、これは……?」

「龍と、狐……?」

『はい、それじゃあ、3、2、1、カットッ!』

龍がそう言うと、映し出されたのは江戸の町、そして人だかり。

『人だかりがありますね』

『とりあえず進んでみましょう』

そうして龍と狐、そしているであろうスタッフたちがその人だかりの中に入つていく。

そしてそこには……

「響君ツ！翼ツ!! クリストス君ツ!?

そう、シンフォギアを纏つた三人が映し出されていたのだ。

「な、なんで響さんたちが…」

「今響君たちは平行世界に…まさかツ!?

「はいツ!! たぶん…今映し出されているのは、平行世界でのこと

…ツ!!」

「ですが、今までそんなことありませんでしたよツ!?

「だが、この映像を見る限り、そうとしか思えん…」

しばらくすると人だかりの中から茶髪のイケメンが出てくる。
そして、その男は響たちに手錠をかけた。

『わいせつ物陳列罪で逮捕な』

「「「「.……」」」

あまりの出来事に、全員が硬直した。

「え……?」

「ひ、響さんたち……逮捕されちゃいました……」

「いやいや!! そんな風に見てる場合ツ!?

「でも……私たちじゃ何もできないし……」

そんなときだつた。

『おや、貴様ら何をしているのだ?』
『ん?』

カメラが後ろを振り替えつたそのとき、画面に映つたのはロン毛で血塗れの男。

「ひやあああああああ!!!」

あまりにもむごく、それを見てエルフナインが悲鳴を上げる。

『そこの、龍と狐、そしてカメラを持つたお前らだ。お前たちは一体何をしているのだ?』

『ああ、【桂】さんじやないですか』

『ほほお、貴様ら、俺のことを知つているのか』

『ええ、ええ。悪い意味でね』

『まあそういうな』

『ところで桂さん。ところで一体何を? その血は一体どうしたんですか?』

『今はバイトの最中だ。それとこの血は……聞きたいか?』
『ええとでも』

『実は……『サファリパークを、原チャリで走つてきました』

『桂さん。いえ……ヅラ。あんたやはりバカでしょう』

『ヅラじゃない桂だッ!! ライオンやトラ、チーターに追いかけられるこの瞬間がなによりたまらんではないかッ!!』

『あんたもうただのドMですよだたの』

『ドMではない桂だッ!! それに、命を賭けた方がより武士らしいと言えようツ!』

『そんなくだらないことで命かけないで』

「な、なんだこのやり取りは……？」

「こんなことより、翼さんたちの方を映してもらいたいのですが
……」

『さてさて、俺はこれからさつきの真選組のパートナーを追いかける。
そして沖田総悟を討ち取る！』

『急な決定ですね。あ、さつきの女の子たちは爆^やらないでくださいね』
『わかっている。俺だつてそこまで鬼畜ではない。殺^やろうとはしない
さ。』

「ちょッ!! 字幕がヤバインですがっ!!」

『それは助かります』

『あ、でも誤つて沖田総悟^やと殺してしま^やうかもしれん』

『えーそれは困りますよー』

『まあ仕方ないだろう。街中でのような恰好をする変態など、生き
ていてもしようがないからな』

『桂さん。それは酷いですよ。あの子たちは…………風俗店の看板娘さ
んですから』

「「「おいッ!!!」」

あまりのウソにエルフナインを除く四人がツツコんでしまう。

「あの、風俗店というのは……」

「エルフナインちゃんは知らなくていいのツ!!」

「は、はいつ!!」

『なるほど……最初はプ○キューとかその辺りの方を考えていたのだ
が……それはあの女子^{おなご}たちに失礼だな……。よし、ここはあえて、知
らないフリをしておくか……』

『お願いしますよ桂さん。それじゃあ俺たちはこれから打ち合わせが

あるので』

『そうか。それじゃあ俺とエリザベスはあの車を追うので、失礼するツ!!』

その瞬間、口からドリルが生えた謎の白い人形的なものが出てきて、どこからか出した原チャリに乗り超スピードで遠くに行つてしまつた。

『いやあ。早いですなあ狐さん』

『そうですね龍さん』

『お二人とも。そろそろ第一部は終わりにしましよう』

『そうだね。それじゃあ、また次回ツ!!』

映像が途切れたと思つたその次の瞬間、コマーシャルが流れる。

『次回ツ!!』

『真選組の屯所についていたシンフォギア装者三人ツ!!』

『そこに待ち受けていたのは、D.Sの沖田総悟ツ!!マヨネーズの土方十四郎ツ!!変態の近藤勲ツ!!そしてアンパンの……名前なんだつけ……?ま、いつか……とにかくアンパンが待ち受けていたツ!!』

『そこでもさまざまトラブルが装者を襲うツ!!』

『次回、【装者、なぜか全裸になるツ!!】次回もお楽しみにツ!!』

そして、画面がいつもの通りに戻つた。

そして、皆が思つたことはただ一つ。

『楽しみにできるかツ!!』

である。

「すぐにあの映像の出どころを調べろおツ!!」

「はいッ!!」

二人はすぐさまにあの映像が送られた場所を調べる。

「な、なぜ全裸なのだ……?」

「一体、平行世界で響さんたちはなにを……?」

「とにかく、今はなんとかしないと……」「司令つ!!」

すると、職員が司令室に大急ぎで入ってきた。

「少し待つてくれッ!!今はそれどころじゃないんだツ!!」

「それはこつちもですツ!!侵入者ですツ!!」

「なんだとおツ!!」

今ただでさえ情報の整理ができていないのにさらに混乱する出来事が起きた。

「侵入者は今どこにいるのだツ!」

「それが……ギヤラルホルンがある部屋ですツ!!」

「なんだとおツ!?まさか、侵入者の狙いはギヤラルホルンかツ!?」

「それは分かりませんツ!!ですが、その侵入者、血まみれです!」

「血塗れっ!?一体どういうことだツ!?」

「それは俺にもわかりませんツ!!ただその侵入者、さつきつからプロキュアだとセー〇ームーンとかガ〇ダムとか訳の分からぬことばかり言つて……」

—ピクツ—

それを聞いて、皆が手を止めた。

今職員が言つた言葉の一つだけ、聞き覚えがあつたからだ。

「プ○キュア…………？本当にそう言つていたのか？」

「ええ……そうですが……」

「なあ、もしかして、その男って、ロン毛で和服を着ている男じやない
……よな……？」

「えつ、なんで分かつたんですかッ!?」

それを聞いた瞬間、弦十郎と緒川はすぐに行動を開始した。
見えない超スピードでギヤラルホルンの部屋まで移動したのだ。
そして、そこで目に映つたのは……

そう!!

職員にツッコまれて いる目の前にいるこの男こそ……

桂 小太郎

であるツ!!!

…………なんでいんの?

三人の遭遇 + α の災難

場所は再び変わり、銀魂の世界。

あの戦いの結果はと言うと……

「はあ～……いつまでここにいればいいんだろ……」

「そう言うな立花……仕方ないだろう」

「はあ……こんな鉄格子壊せたら楽なんだけどなあ～」

結果から言えば、装者たちの負けであつた。

直接的な力は響たちが上なのだが、相手は刀を持っているとしても生身の人間だ。

それ故に手加減するしかなく、逆にそこを突かれたのが敗北の理由となつた。

それで今響たちはシンフォギアを纏つた状態で牢屋の中にいる。

「元はと言えば、全部あのクソ野郎のせいだッ!!」

クリスの言うクソ野郎とは、もちろん沖田のことである

「あの男……今度会つたら斬り刻むッ!!」

クリスの言葉に同調し、翼も大声を上げる

「あの男……取り調べのときなんと言つたと思うッ!?」

『並行世界?』

『そうだ。私たちはこの世界の異変を解決するために違う世界から来たのだ』

『はいよ、ええつと……重度の厨二病つと……』

『おいッ!!』

「などと！私を中二病患者として扱つたんだぞッ！」

「先輩……それはあいつじゃなくともそんな反応すると思うぞ……」

「たぶん、精神科問題にされてもおかしくないですよ……」

「何故だッ？他の並行世界ではあつさりと信じてもらえたではないかッ!?」

「それは並行世界の司令がオツサンだからだよ。そうじやない世界でもある程度の信頼を培つてる。それに並行世界には第一にノイズがいたしな。だけどこの世界にはノイズが現れてないし、それにこの世界じやアタシたちは犯罪者だ」

「むつ……」

クリスの言葉に何も言えなくなつた翼は黙り込む。

「それにしても、服装がシンフォギアしか着れないのが難点ですね……」

「そうだな。あれから何度も武装を解除してみたが、結果はすべて同じだ」

あの後、お風呂（女性なので許されている）などでシンフォギアを解除すると、必ず全裸になつていた。

それで、三人はある結論をつけた。

「おそらく、この世界はなんらかの事情で私たちはシンフォギアしか身に纏えないということなのだから……」

「なんでそうなるのかねえ……？」

「でも、着てるだけマシです」

響の言葉に二人は頷く。

すると、そこに傷だらけの山崎が食事を持ってやってきた。

「3人とも、食事を持つてきたよ」

「ありがとうございます!!」

「あの中であなたはマトモそうだからな。マトモな人間がいれば、幾分か心が落ち着く」

「そう言つてくれると俺も嬉しいよ」

「ところで、怪我の方は大丈夫ですか?」

「ああ。ホント沖田隊長には困つたものだよ」

あの戦いの最中、三人の最大の敗北理由は山崎の帰還である。

元々三人は沖田から自分の裸の写真を取り返すのが目的だ。

山崎が帰つてきたとき、すでに【沖田】と【土方】に翼とクリスは捕まつており、響も絶対絶命の大ピンチだつたが、山崎が帰つてきて、響もそれに気を取られて捕まつた。

そのあと、写真ではなく手紙を持たされていたという山崎の供述により、沖田が嘘をついていたことが判明した。

三人が牢屋に連れていかれるときに沖田が三人に向かつてものすごく悪い顔をして、三人が『イラツ』と来たのは言うまでもない。

「にしても、なんだよあいつッ?!ミサイル真つ二つにするとかありえねえだろッ?!」

クリスは沖田に対して強烈な殺意を持っていたためミサイルを放つたのだが、沖田によつてそのミサイルをことごとく真つ二つにされている。

「まあ沖田隊長の剣の腕に関してはとても真似できるものではないよ」

「あの男もそつだが、あの変態男もなかなかの太刀捌きだつた……」

「変態男つて、誰のこと言つてるの?」

「あの土方と言つう男です。あの男から私たちを、その……視姦をしていたと……」

「視姦？あの規律を重んじる副長がそんなことするわけないけど……」

「ですが、あの沖田と言う男が……待て、あの男の言うことが信じられなくなつていてる……」

「まあ、沖田隊長は屈指のドSですかね」

「ドS……。そういえば、土方がサディスティック星の王子、と言つていたが……」

「まあそんな星あるわけじゃないけど、実際そのレベルなんだよなあ……」

「話を戻すが、やはり土方はとてつもない剣の腕だ。私でも捉えるのが精いいっぱいだつた」

「まあそうでしょうね。ですけど、やはりこの真選組の中で一番剣の腕が立つと言つたら、やはり局長だろうね」

「はあッ!?あの変態がツ!?

「私も流石にあれは……」

三人とも、やはりすぐには信じられていない。

あのフルチン男がこの中で一番強いなど信じられるわけがない。

「あの人は普段はああだけど、隊士皆が局長を尊敬しているんだ。あ

の人がいなけりや、今の俺たちはいないからね」

「本当にそなんですか……?」

「まあ、君たちからしたらそなうだろうね。ちなみに、沖田隊長が副長の命を狙つてている理由があるんだ」

「あれ、理由があるんですかツ!?

「明らかに面白半分……いや、もう完全に面白がつてやつてるだろツ

!?

「ところがどつこい。違うんだな。沖田隊長も、副長も皆局長を尊敬している。沖田隊長は、どうしても局長の隣にいたいんだ。だから、そのためには副長が邪魔なんだよ」

「……あの男にも、人情があつたのだな……」

「……尊敬する人の隣にいたい気持ちは何となくわかりますけど……でも、命を奪つていい理由にはならないと思います」

「ははは、そんなまともな回答を聞いたのは久しぶりかな。でも、ここはそんな綺麗事で通じる世界じやないんだ。過激派組織【攘夷志士】もいるし、そいつらが江戸の平穏を脅かすのから、そいつらを斬つて止めるのが俺たちの仕事だからね」

「その人たちと、話し合えないんですか？私たちは同じ言葉が話せる人間だから、きっと話し合えば分かり合えるはずです」

「……話し合いで解決できるほど、ここは優しくないんだ。それに……君たちの話、俺は信じてるよ。君たちは嘘をつけるような人間じゃないことも、俺は分かる」

「山崎さん……」

「だからこそ、そんな綺麗な心を持つている君たちには、ここは過酷な世界だ。君たちの世界がどれほど平穏なのかわからないけど、そんな綺麗事は通じない。それを肝に銘じておいてくれ。さて、俺はそろそろ行くよ」

山崎は牢屋から出る。

「さてと………」

「「？」」「？」

「そこのてめえらッ!!さつきからコソコソコソ全部聞こえてんだよッ!!いいだろ別に地味キヤラがカツコいいこと言つてもツ!!お前らは俺を雑に扱うのがそんなに楽しいのかあああああああ!!!!」

山崎はそう叫びながら、曲がり角に走りながら消えて行つた。

「……なんだつたんだ？」

「さあ……声、聞こえたか？」

「多分、山崎さんは耳がいいんですよ」

「まあ、逆にそうじゃなかつたらただの変人だだぞ？」
「とりあえず、飯食おうぜ……」

（数日後）

「ほら、出ろ」

隊士の一人が檻の扉を開けた。

「なにがあるのか？」

「局長たちがお前たちを混ぜて話し合いをするらしい。さつさと来い」

三人は檻を出てある一室に案内された。

そこには【近藤】【土方】【沖田】、そしてアフロの人。合計四人が胡坐をかけて座っていた。

「…………」

三人は沖田を親の仇のように睨み、近藤をゴミを見る目で見ていた。

「あれえ？ なんで俺けなされる目で見られてるの？」

「当たり前ですぜ近藤さん。思春期真っただ中の女に男魂を見せりやあそりや興奮もしまさあ」

「興奮などするわけがなかろうがあ!!!」

「安心してくださいお嬢さんたちッ！ 俺はお妙さんの裸じやなきや、俺のバベルの塔は決して立ちませんッ!!」

「安心できるかあッ!!」

なぜかドヤツつとしながら断言する近藤。

それにツツコむクリス。

「それで、なんで私たちは呼ばれたんですか？」

「ああ。とりあえずそれを話すから座れや」

土方に言われるまま座る三人。

「さて、まずお前たちの処分についてだ」

「結論から言えば、俺の提案は可決された」

「本当ですかッ!?」

沖田の言葉に喰いつく響。

「落ち着け落ち着け。焦つても何も始まらないぞ」

「すみません……」

「さて、話を戻すが、まず君たちの『自分たちはことは違う世界から来た』と言う供述だが、やはり最初は誰も信じてなかつたな。急にそ

んなこと言われて、信じろと言う方が無理があるからな」

「それに関しては承知しております。ですが事実ですので、そう供述しましたまでです」

「（数日前はそんなこと思つてなかつたクセに……）」「

「まあ、とりあえず俺たちはこの内容を上に提出した。それが以外なことに可決されたんだ。普通ならこんなオヤジの目に通るとは思えないんだが……」

「近藤さん。今は天人あまんとがいる時代ですぜ。それに、この変態どもが出てきたあの穴は最新機器を使つてもなんのか不明だしなにより、あの人のことですか。キヤバクラや娘のことで忙しいに決まつてまさあ」

「まあそうだな。あの穴だけで説明する材料にはなつてる」「それじやあ……いつでも帰れるつてですかッ!?」

「残念だが、それは無理だ」

「な、なんですかッ!?」

近藤の返答に疑問を抱く響。

仕方ないだろう。故郷にすぐに帰れないと言われるのだから。

「すでにこの話は幕府の耳に入つていて。あまり大きな声で言えないが、幕府の連中はまず自分たちの安全を第一に考えるからな」

「どこの世界でも政治家があまり信用できないのは同じか」

「それに関しては同意だ。話を戻すが、自分たちの身の安全を守るために、その問題が終わるまで君たちを元の世界に返すつもりはないだろうなあ」

「そんな…ッ!! それじゃあ、しばらく未来に会えないの…!!」

「その未来つてのが誰だか知らねえが、まあしばらくの間仲のいいやつに会えないのは事実だな」

「そ、そうですか…」

部屋全体が暗い雰囲気になる。

「まあまあ。とりあえず話を戻そう。それで、俺たち真選組はオヤジから君たちの保護を命じられた。短くなるかもしないし、長くなるかもしねえが、よろしく頼む」

「はいッ！よろしくお願ひしますッ！」

「それじゃあ、まずは自己紹介だ。すでに知っているかもしねえが、

俺の名前は【近藤勲】この真選組の局長をしている」

「俺の名前は【土方十四郎】。鬼の副長と言う二つ名を持つている」

「俺はすでにやつたからいいが……ちなみに、このアフロの人は真選組3番隊隊長【斎藤終】つて言うんだ。終兄さん。挨拶してくださいせえ」

沖田がアフロの人——終に話しかける。

「…………」

「終兄さん？」

「Ｚ～～～Ｚ～～～」

「ああ、寝てやがるな……」

「えつ、寝てるんですかッ！」

「ていうか、寝てるとき乙って言つてるヤツ初めて見た……」

「それに関しては同意見だ。私も初めてみたぞ……」

「まあ、いいだろう。終も内偵の仕事で忙しいのだろう

「ていうか、終の声聞いたのいつぶりだ？」

「確かに……桂が真選組内に潜入してた時以来ですね（原作アニメ294、295参照）」

「確かに、あのときは滅茶苦茶喋つてたな……。もういつもの無口キヤラに戻つてつけど……」

「無口キヤラ？その……終さんつてそんなに無口なんですか？」

「そうだぜ。今言つた時を覗くと、声を聴いたのは二年前だからな……」

「どれだけなのだ……？」

「さて、それじゃあ明日からは普通に仕事がある。話し合つた結果。君たちにはそれぞれ一人ずつの仕事を手伝つてほしいんんだ。世間には、眞実とは違う内容をニュースで報じているから少し制限が入つてしまふが、基本的な生活にはなんの問題もない」

「この度は、私たちのためにここまでしていただきありがとうございます」

「いやいや、人を守りたいという君たちの考えは、十分理解できるからな」

ちなみにだが近藤と翼が話している中、二人はこう思った。

『あれがなければ普通にカツコいんだけどな……』

と。

近藤は實際、あの変態的行動がなければ弦十郎と似たようなものだ。

それゆえにそう思える。

「それでは、君たちには上からの命令で一人に俺たちから一人、監視が入る。まあ、君たちはここじゃあまり活動しにくからな。俺たちが一緒にいれば、真選組の部下と言う大義名分が作られる」

そして近藤は最初にまず響を見る。

「さて、まず響君だつたかな？」

「は、はいッ！」

「君は終が担当することになる」

「分かりましたッ!! よろしくお願ひします終さんッ！」

「Z～～Z～～」

「おい茶髪。終兄さんはまだ寝てるから静かにしてろい」「す、すみません……」

「さて、次に翼君。君はトンが担当する」

「トシ、とは？」

「土方さんのことです。近藤さんは土方さんをトシって呼んでんですか。だよな土方」

「うるせえよッ!!まあ総悟が言つたとおりだ。青髪、お前は俺が担当する。足引つ張るようなことはするなよ」

「青髪ではない。私には翼と言う名があるのだ」

「あつそ。あと誤解すんなよ。俺はまだお前らを認めたわけじやねえからなッ!変なことしたら即刻斬り捨てるッ!悪・即・斬だッ!!」

「まあまあ落ち着けトシ」

「おい青髪。お前なかなかに苦労すんぞ。毎日犬の餌食わされるぜ」「犬の餌……?」

「ちげえよッ!!土方スペシャルをバカにすんじやねえ!!」

「お前ら一旦静かにしろッ!さて、最後になつてしまつたが、クリス君。君の監視は総悟が担当する」

そのとき、クリスの顔がこの世の終わりみたいな顔をした。

「クリスちゃん。この世の終わりみたいな顔してるよッ!」

「な、なんでこいつなんだよッ!?せめて別なのにしてくれッ!!例えば山崎とかッ!!」

「山崎は観察が仕事だからそれは無理だ。それに、総悟が自ら君の監視を買って出たからなあ」

「はあッ!?」

「まあ、酷になるかもしれないが決定事項だ。すまないが、これで我慢してくれ。それでは、解散ッ!!」

そうして最初に近藤が部屋から出していく。

そして終わつたのを待つていたかのように終も起きて立ち上がる。

「あ、待つてください終さんツ！それじや、またね翼さん、クリスちやん！」

終が出ていくと同時に響も出していく

「さて、やるとなつたからにはまず、てめえの剣の腕を見てやる」「いいだろ。あなたの剣の腕には興味があつた。その決闘、ぜひ受けよう。では、また会おう雪音。その……頑張つてくれ」

そう言いながら部屋を出ていく二人。
そして部屋には総悟とクリスが残された。

「さて、これから楽しい楽しい日々が始まるなあ……」「う、うわああああああああああああああああ！！！」

そのあまりの絶望への落差により、クリスはしばらく牢屋に閉じこもつたそうな。

うとある場所

「もうすぐで……もうすぐで着く……。平行世界。待つてて三人とも。すぐに行くから。さて、到着場所は町のど真ん中。着いたらすぐに空に逃げないと」

ここはとある場所。そこにピンク色の長い髪を揺らしながら進んでいる女性がいた。

そして、しばらくすると彼女の目の前が昼の江戸の風景になつた。

「よし、すぐに飛 「邪魔ネツ!!」 グハアツ!!」

着いた瞬間、何かに頭を蹴られ、その勢いで方向感覚を失い、キリモミ回転をした。

その次に、

「自分のバイクで走つてるー！」

宙を浮いていた自分の体にバイクが激突し、遠くに飛ばされる。

「ちょ、銀さんツ！誰か撥ねましたよツ!?」

「知らねえよツ!!さつさと行くぞツ!!じゃないと間に合わねえ！」

そのままバイクは走り去つていき、彼女は路地裏へと叩き落された。

「…………な、なに？なんなのこの世界…？シンフォギア纏つてなかつたら死んでたわよ普通に…」

そのとき、頭になにやら生暖かい液体がかかつた。

「…何かしら、これ…？」

上を見ると、そこには……

「ワンッ」

デカい、犬がいた。

「い、犬?にしていはデカすぎ…つて、ちょやめ——」

——バクツ——

女性は犬によつて頭からバツクリ行かれた。

実際には死んでないが、犬の顎の力がすごすぎるために抜けられない。

「ちょ、ワンちゃんお願ひだから出してツ！」

犬は女性の静止を聞かぬまま、女性の上半身を口に入れたまま、自分の住処に帰るのであつた。

二人と猫

（真選組屯所）

（滯在許可が下りた二日目の夜）

（ここは真選組の屯所。）

（そしてある部屋に、三人の歌姫が泊まつていた）

「さて……本日の報告会を始める」

「はい……」

「…………」

（シンフォギアを纏つた状態の響、翼、クリスが報告会を始めていた。
ちなみに、三人ともすごく暗い雰囲気だつた。）

「さて、まずは立花……」

「はい……それでは私から説明させていただきます……」

（…………）

「よろしくお願ひします、終さん！」

「…………」

（（無口だから、体でしか表現できないんだつけ……） 終さん、私はな
にをしてればいいですか？）

「…………」

（終は無言で響に一冊の本を差し出した。）

「これ……なんですか……？」

「…………」

終は再び作業に戻つてしまつた。

「とりあえず見てみよう…」

響はその本を見てみた。
すると、そこには……

「な、なにこれ……？」

そこには、人の名前にバツが入つており、その下にZに一本線が
入つたZがたくさん書かれていた。

「どうしてこんなにバツとZが……あれ？」

ページをどんどん開いていくと、ある一ページに一つだけ、ポツン
と自分の名前が書かれていた。

「なんで私の名前が……？」

ちなみに、【立花響】と書かれているその下に
Z

と書かれていた。

唯一違うのは一本線が入っていない。

「終さん。このZってなんですか？」

「……」

「終さーん……」

「……」

「他の人に聞こうかな…。終さん。出ていいですか？」

「……」

「それじゃあ、行つてしまーす……」

「……はあ～～～。無口の人とつて、喋りにくいなあ～～」

響は誰かに話を聞くために廊下を歩いていた。
するとそこへ……

「あれ、響ちゃんじゃないか」
「あ、山崎さん！」

そこにアンパンこと山崎が現れた。

「アンパンことってなんだよッ!!」

「山崎さん？」

「あ、ごめん。それで、何の用かな？終さんは？」

「そのことで話がしたいんです。実はこの本なんですけど……」
「その本かい？どれどれ……」

山崎は本のページを開いていくことに、険しい顔になつていく。

「山崎さん？」
「響ちゃん。これどこで見つけたの？」
「終さんからもらつたんですね」
「……これはね。今までの真選組の裏切り者の名前ばっかりだ」
「ええ!？」

裏切り者の名が書かれていた。

それだけでも驚きなのに、響はある結論に至つた。
バツ印の意味。それは…

「もしかして、そのバツ印つて…」

「ああ。今まで真選組に背信行為を働いた隊士たちは、すべて終さんによつて肅清されている」

「肅清つて…殺してゐるつてことですか…？」

「そうさ。終さんの三番隊は、裏切り者を入れて肅清していることがら、【沈黙の部隊】として恐れられているんだ。一人しかいないけど」「一人しかいない時点で隊と呼べるかどうかすら怪しいんですけど、じゃあこれ見てくださいツ！」

響は自分の名前が書かれているページを山崎に見せた。

「響ちゃんの名前が……ツ！……多分、この乙が完成したら……」「しゅ、肅清されちゃうんですか！？で、でも、私何も悪いことしていません！」

「大丈夫だ！君たちはまだ不確定要素が多い人物だから。終さんだってまだ疑つてゐる段階だ！だからこの乙が完成しないように頑張ればいいだけだよ！」

「は、はい、そうですね！が、頑張ります！」

この後、響は終の部屋に戻つた。

「ただいま戻りました……」

「…………」

そのとき、終は響の方を振り向き……

「ひいいいいい！」

不敵な笑みを浮かべた。

それを見て思わず響は後ろ下がつてしまつた

「あ、あわわ……（これ…命がいくつあっても足りないよお〜〜…未
来〜〜〜!）」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「と、言うことがありまして……」

「立花……それ、完全に殺害予告をされてないか…?」

「……」

「そうですよね……終さんとつながりたいんですけど……どうも
……」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「そうか……。だが、私の方がもつと悲惨だぞ……」

「さて、食え」

「……なんだこれは…」

「土方スペシャルに決まつてんだろうが」

「いや、これはもはや食べ物ではない……ただのマヨネーズだ」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

朝、食事の時間に翼に出された食事は、マヨネーズだつた。

正確には、食べ物の上にマヨネーズがありえないほどかかっている
こと。

「いいから黙つて食え！土方スペシャルの味をしつかりと感じてもら
うからな！」

土方はこのマヨネーズを淡々と食べる。

それを翼はありえないと言つた表情で見る。

「（あの男が言つた犬の餌とはこのことか……）こんなのは、人間の食べ

物ではない……

「ああん!? オメエも土方スペシャルをバカにすんのか!?」

「当たり前だ! こんな得体のしれないマヨネーズを食べることなどできるか!」

「うめえんだぞマヨネーズは! いいから食えよ!」

「こんなのは栄養バランスが偏っているにもほどがある! 私は女性だ! もつとバランスが取れたものが食べたいのだ!」

「ちい! なんでこの味がわからねえのかね……」

「分かりたくもないぞ……」

「わーたつよ! ジャあこれも俺が食う!!」

ちなみに、自分の分はすでに食べ終わっている。
土方はまた食べだした。マヨネーズを。

「うつ…」

翼はもう見ていられなく、普通に食事をした。

（30分後）

「さて、それじゃあ行くぜ」

「よかろう! 今日こそ貴様に一太刀を入れてやる!」

「やれるものならやつてみなあ!」

翼と土方は木刀を持つてそれに太刀を入れる。

元々、シンフォギアを纏っている翼の方が普通の人間である土方に對して圧倒的有利なはずなのだが、なぜか勝てない。剣道防具を纏っている土方がシンフォギアを纏っている翼に対しても圧倒的有利に戦っているのだ。

翼が太刀を入れようとするとそこからカウンターを喰らわせられる。

逆にスピードを上げて後ろから攻撃しようとしても、防がれる。もういつそのこと突進しながらやろうとするが、また逆に入れられる。

「はあ、はあ、はあ……」

「まだまだだな。もつと腕を上げろ」

「肉体的な差はあれども、機能的にはこちらが圧倒的に勝っているはずなのに……」

「機能なんて所詮まやかしの力だ。もつと己を鍛えろ」

「そうだな……」

「さて、疲れただろう。これ飲め」

そうして土方は無理やり翼の口にあるものを突っ込んだ。
最初は飲み物だろうと何の抵抗なしに飲もうとするが……

「ブツ！ ゲホオ！」

すっぱく、また少し甘いドロツとしたものを飲まされたことに驚き、それを吐いてしまった。

「おい吐くな汚ねえ！」

「な、なに飲ませた!?」

「なにして、マヨネーズに決まつてんだろうが！」

土方の手には空っぽのマヨネーズの容器があつた。

「何故マヨネーズだと聞いてる！ それにそれはなんだ!? 丸まる一本飲ませたのか!?」

「そうに決まつてんだろ！ マヨネーズはどんなときにも適応するオールマイティアイテムだ！」

「私はそれに当てはまらないぞ！」

そして、予想してたかのように

「おーいおめえら！土方が青髪に欲望の白い液体をぶっかけてるぜえ
！！

ソツチ方向に話を持つてかれた。

土方はすぐに道場から出て行つた。

ま 待て！私もい——

翼は立とうとするが、マヨネーズが油となつて尻から倒れる。そのとき、運命のいたずらか隊士たちが入つてくる。

副長が青髪に「ピ——」したって本当か!?
ちがああああああうううううううううううううう!!

隊士たちからもまさかの自主規制が発生。

だが、隊士たちの顔が翼を見た途端一変する。

『あ（察し）』

それを見て隊士たちは散つていった。

「なんだよ、ただのマヨネーズかよ」

「またか、副長のマヨネーズ事件。もうこれで何度目だ?」「さあ? いちいち数えちゃいねえよ」

「ていうか、沖田隊長も迷惑だなあ」

「まあ、今回のは誤解されても仕方ないんじやないか?」

「いや、沖田隊長なら間違いなくわざとやるな」

……だな」

そして、それを見た翼は…

「これだけ早く収まるとは……土方、普段マヨネーズでどれだけ大事を起こしているんだ……？」

{ } { } { } { } { } { } { } { } { } { } { } { } { } { }

「と、言うことがあつた」

「そ、そうですか…。でも、誤解が解けてよかつたですね」

「どうぞ？」

100

「雪音？どうしたのだ？」

「そういえはクリスちゃん、さっきから一言も喋ってないよね？」

「雪音？」

翼が疑問に思いクリスに近づく。

すると、その瞬間……！

「フニャア!!
「ゲフウ！」

クリスは空中回転をしたかと思うと、周り蹴りを翼に喰らわせた。

「翼さん！」

響はすぐさま翼に駆け寄る。

「大丈夫ですか!?」

「ああ…問題ない。だが、問題は雪音の方だ」

二人は一斉にクリスを見る。
そして、クリスはとと言うと……

「ニヤア～～～」

「「…………え？」」

クリスは突然猫のような鳴き声をした。

「クリスちゃん？どうしたの？」

「どうした雪音？お前らしくないぞ？自ら猫の真似をするなど……」

「ニヤン？」

そのとき、二人に電流が走つた。

「（か、完全に猫と化している……!!）」

そう、クリスは猫と化していた。

「ど、どうしたのだ雪音!?」

「そうだよクリスちゃん！なんで猫!?」

「ニヤン、ニヤン、ニヤア～～」

「駄目だ、言葉が通じない……」

「どうしてこんなことに…」

「そんなの、答えは一つだろう！今すぐにいくぞ！」

「は、はい！」

翼と響はクリスを担いで部屋を飛び出して、ある部屋へと駆けつけた。

そして、そこには土方、沖田、近藤の三人がいた。

「翼くんに響くんじゃないか。どうしたんだ一体？」

「そんなに急いでどうしたんだ？」

「どうしたんでも、飯がまズくなるだろ？」

「私たちが来ただけでか！？そんなことはどうでもいい！貴様、雪音になにをした！」

「クリスくんがどうかしたのか？」

「これを見ろッ！」

「ニヤアン」

「!!!??」

そして、近藤と土方にも電流が走った。

「おい総悟、お前こいつに何した!? 完全に猫になつてんじやねえか!」
「いやあ、思った以上に覚醒しちまつたようで。こいつ、あのときの女
(原作アニメ27、28話) よりもこつちの方の素質がありますぜ」
「覚醒!?あの時の女つてところがちょっと気になるけど、総悟!…:
具体的になにした?しなみに俺のお妙さんの愛は常に覚醒しつぱな
しだぜ」

「あんたの恋話は今はどうでもいいんだよ!それで、どうなんだ?
詳しく述べてもよかつたんでも覚えてねえ。ほら、こつち来いよ
ゲロリス」

「ニヤン!」

クリス基、ゲロリスは沖田に近づき、沖田はゲロリスの顎を撫でる。
そして、四人は……

「「「(ゝ、これは…完全に調教されているうううううううう!)完全に服従
してよ!」」」

「そ、そんな…クリスちゃん…まだ監視が入つてから一日しか経つて
ないのに…」

「それよりてめえこの一日でこいつに何した総悟!?

「ていうか、ゲロリスってなんだ!?

「こいつの元の名前のクリスに、ゲロとゲリと口リと足してつけた名
前だ」

「不名誉すぎるだろ!」

「こ、これちゃんと元に戻るんですね!?

「さあ? 試してねえからわからねえな」

「ニヤン!」

「今すぐ雪音をもとに戻せ!」

翼は抜刀をするが、沖田はそれに平然と答える。

「いやあ、覚醒しちまつたもんはしようがねえだろ」

「仕方なくないだろ！もう人格が完全に変わってしまっているじゃな
いか！」

「おい、言葉遣いは直していいぞ」

「え、いいんですか、ご主人様？」

「「「（ゞ）主人様！？」「」」

「はい！私、ゲロリスはご主人様のペットです！」

「く、クリスちゃん？冗談だよね？」

「もう、響ちゃん。私はご主人様一筋だから、私が仕えている（ゞ）主人様
を悪く言わないで」

「響ちゃん！？クリスちゃんは私に対してそんなこと言わないよお～～
！」

もう……手遅れだつた。

完全に人格が変わつてしまつたクリス——ゲロリス。

「ど、どうしてこんなことに…！」

「さて、とりあえず今日は寝ましょ～や

「そうですね。ご主人様！ほら、響ちゃんも先輩も、早く行きましょ～
よ！朝まで恋バナです！」

「目を覚ませ雪音！お前はそんな人間じゃないだろ！お前はもつと俗
にいうツンデレと言う人種だつたはずだ！」

「ていうが、力強い！シンフォギア纏つてるのになんでも！」

ゲロリスによつて完全に引っ張られていつた二人。
そして見えなくなると……

「さて、寝ましょ～か」

「いやその前にいろいろと話せ」

「俺はもう寝たいんですが。もしかして土方さん一人で怖くて寝れないと嬉しいかい？それじゃあ俺が寝かせてやりますよ。永遠に」

沖田は机の下からバズーカを取り出した！

「は？」

「死んでくだせえ」

ドゴ————ンッ!!!!

「(ピク、ピク……)」

「さて、これでようやく眠れるなあ。ああ、そのせいで俺の部屋は滅茶苦茶になつたがな」

「修理費は土方さんから取つといてください。俺は寝ます」

「ああ、お休み……」

そうして、沖田は何事もなかつたかのように、自分の部屋へと戻つて行つた。

白銀の装者と万事屋銀ちゃん

【万事屋銀ちゃん】

その場所はあまり儲かつていない。
と、いうより、仕事があまりないと、そこの主人が『クズ』であるのが主な原因である。

そんな万事屋のメンバーを紹介しよう。

「なに？」——ホジホジ

今現在鼻くそをほじつている鼻くそ製造機が、この万事屋銀ちゃんを営んでいる

・【坂田銀時】

「神楽ちゃん。そこで寝てないでぞいてよ。掃除ができないじゃないか」

「何言つてるね。全部新八が悪いネ」

「ボクなにかしたあ!?」

そしてこのツツコミのうるさい、眼鏡が本体の童貞。

【志村新八】

「余計な情報言うなあ！」

おつと、早速ツツコまれたぞ。

「うるさいネ、新八」

「そうだぞ新八。事実じゃねえか」「てめえら一旦黙れえ！」

このツッコミのうるさい男は置いておいて、語尾にネとかアルをつける中国風の服装を身に着けている少女、

・【神楽】

「おいナレーター。自己紹介も済んだし、邪魔だからさつさと立ち去るネ」

勘弁してくださいよ神楽さん。

僕のことは無視してくださいって言つたでしょう。あなたたちはいつも通りに過ごしてくれればいいんですから。

「そうだぞ、神楽。久しぶりの報酬がいい依頼だ。しかもその内容が俺たちの日常を映像に撮るだけでいいなんて楽な仕事、他にねえかもしけねえんだからよ」

「でもナレーターさん。その映像何に使うんですか？僕らのプライバシーが侵害されちゃつたら、どうするつもりなんですか？」

「元々私たちは創られた存在ネ。プライバシーもクソもねえんだよ、分かつたかメガネ」

「なんでそこでメガネえ？普通に新八でいいよね？っていうかさらっとメタ発言してんじやねえよ！」

それでは、私はステルス状態になつてるので、どうかお気になさらずく

「いや、それだと逆に気になるんだけど…」

「考えてても仕方ねえだろ。とりあえず俺たちはいつも通りに過ごしこきやいいんだ。さて、そろそろ例の本題に入ろうじやねえか」

銀時のその言葉で二人は席に移動する。

「これはあいつからの手紙だ」

「これ…沖田さんからですよね。沖田さんが直々に依頼してくるなんて、珍しいこともあるんですね」

「なんで私たちがあのクソガキの依頼なんて受けなきやいけないアルカ」

「だが、かなり報酬がいいぜ。報酬額はあのV字ハゲの預金から好きだけ取つていいつてよ」

「沖田さん、何気に犯罪レベルのことしてるんじや…」

「あいつがこんなことしてんのはいつも通りだろうよ。今更気にしててもしようがねえ」

「で、内容は何あるか？」

「ええつとなになに…」

銀時は手紙の内容を述べる。

『『万事屋の旦那。久しぶりでさあ。今俺たちは知つての通り、『ハイグレ星人』の処理で忙しい日々を送つております。いきなりではあります、旦那たちにはあのハイグレ星人が出てきたあの水色の穴のことを少しでもいいから調べてほしいんでさあ。俺たちはある事情で表に出て調べることも、裏から調べることも難しい状況なんでさあ。だから、外部の人間の協力が必要なんでさあ。報酬として土方のカードと暗証番号を教えます。どうか、お願ひしますぜ、旦那』……だつてさ』

「ハイグレ星人つて、今ニュースで話題のアレですか？」

「確かに中二的思考に囚われた哀れなヤツらで、ハイグレしか着ることができないらしいアル。見た目は完全な人間の女つて話ネ。しかも属性として獸どもを刺激させる、変態、ドM、堅物、ネコ属性その他モロモロがあるらしいね」

「神楽ちゃんそれどこ情報?!属性の話初めて聞いたんだけど!?」「どつかのおつちゃんが言つてたね」

これは響たちの身分を隠すためのフェイクニュース。

このニュースのせいで響たちのイメージがヤバいことになつていいのだが、今本人たちはそれを知らない。

ちなみに、このニュースのネタを考えたのはどこぞのドS野郎らしい。

「そのハイグレ姿を間近で見てみたいが、この話は置いておいてと。さて、とりあえずあの穴に行つてみたわけだが、いたのは何かわからぬやツ一人だつたな」

「今あんたさらつと自分の欲望言いませんでしたか？ていうか、あの時ノリで突つ込みましたけど、大丈夫なんですか！？それに、あの時確実に引きましたよね、人！」

「過ぎちまつたもんはしようがねえよ。それに、この世界のご都合主義でなんとかなるつて」

「だからメタ発言すんじやねえよ！」

万事屋はいつもこんな感じ。

そんなとき、玄関から大きな犬の影が現れる。

「あ、定春が帰ってきたね。今開けるから待つてるアル」

神楽は玄関に向かつて行き、扉を開ける。

「お帰り、定は——」

「お、どうした神楽？」

「銀ちゃん銀ちゃん、来てみるネ」

「定春がどうしたんだ？」

「一体何が——」

そして、それをみて二人も言葉を失つた。
何故ならそこには…

「さ、定春が女の人の人??咥えて帰つてきたああああああああああツツツツ!!!!」

ここで、いつもの新八のツツコミが炸裂した。

そう、定春はハイグレ姿の女性の上半身を咥えて帰つてきたのだ。しかもかなりバツクリ行かれている痛みのせいか股が無理やり開かれている状態。

それに、時々痙攣している。

「おいおい、さすがにこれはねえだろ」

「とりあえず定春。そんな汚物咥えてないで吐き出すよろし」

「まあ待て、神楽」

「どうしたネ、銀ちゃん」

「これは逆にチャンスじゃないか?新八」

「なんですか、銀さ『ねえ!そこに誰かいるの!?お願いだからここから出して!もう、生臭い!』あの、これ出した方がいいんじや…」

生臭さで今まで意識が朦朧としてきた中、誰かがいることに気付いて大声で叫ぶ。

大声で叫んでも、定春の口の中のせいがあまり聞こえていない。そしてそれは彼女の方も同じで誰かがしゃべっているとしかわかつていな。

「まあ待てよ。新八、お前この女で【ピ――】したらいいじやねえか」

「『はあ!!』

「もうよお、お前このままだと死ぬまで童貞のままだぜ?これはきっと神様がお前にチャンスを与えたに違ひねえ。それにこの恰好。股開いて、これ明らかにそういうの狙つてきてるよね?完全に男を誘惑するポーズだよね?」

「いやでも、顔もわからない女性と、そんなことできるわけないじゃないか！」

「じゃあ顔分かつてたら【ピ――】するつてことアルか？おめえ最低だな」

「なんでボクが悪い風になつてんの!?この話切り出したの銀さんだよね!?」

『いやあ――!!出して、お願ひだから出してええええ!!』

「えつ、出してつて何を?【ピ――】をか?あ、遠回しに言えば欲望の白い液体ね?お姉さん結構大胆だねえ。と、本人も言つてるし新八、いつちよやるか?」

「やらねえよ!ほら、定春!吐き出して!」

「ペツ」

そして、女性はようやく臭いと言う地獄から解放された。

「ハア、ハア、ハア…」

「これ、端から見たらすごい光景だな…」

「――ッ!!その声は、まさかあ……ウエルウウウウウウウウウウ!!!」

そのとき、女性は片腕を大砲に変えてビームを発射した。

「あぶね!」

銀時はすぐに体を逸らしてそのビームを避ける。
そのビームは空中で爆発する。

「うええええ!!今になに!?」

「ウエル!あの犬は貴様が作つたのかあ!」

「いや知らねえし!ていうか誰だよウエル!」

「惚けるなあ!その声はまさしくウエル……あれ?喋り方が違……」

彼女はようやく視界が安定したようだ。

そして、叫んだ人物と違うことをようやく理解する。

「いやちげえし…」

「よく考えてみればそうね…あなたからウエルと同じクズ感が出てるから、間違えちゃったみたい。それに、あなたはウエルとは違う意味でクズだと今理解したしね」

銀時と彼女の言うウエルは中の人と同じなため、どうやら間違えて殺そうとしてしまったそうだ。

……殺そうとしてる時点で危険か。

「おいてめえ！初対面の男にクズとはどういうことだ！」

「無防備な女性を襲おうとするやつらの、どこがクズじやないと？」

「やつら!?なんかちやつかりボクも入ってるんだけど!?」

「そうね。新八は童貞で、銀ちゃんがクズね」

「神楽ちゃんはこの人のどこに共感してるの!?ていうか今回童貞強調しちゃうだろ！」

「そんなことどうでもいいから、とりあえず中で話さねえ？ここだといろいろまずいしよ」

「…そうね、粘液まみれの体を洗いたいんだけど、いいかしら？」

「お風呂なら別に使つても構いませんよ」

「そう…ありがたく使わせてもらうわ。だけど…」

「大丈夫ネ。この二人は私が見張つておくから安心するアル」「ありがとう」

「しばらくして」

「お風呂かしてくれて、ありがとう」

「ああ。使用料はしつかりもら「あんたちよつと黙つてろ」」

「いえいえ、僕らのペットがあなたに悪いことしてしまったんですし、

「これでお互いにさまつてことで」

「こつちも間違いで攻撃してしまつたからお互い様よ。あ、自己紹介がまだだつたわね。私の名前は【マリア・カデンツアヴナ・イヴ】」「名前からして外人さんか？俺の名前は【坂田銀時】。好きに呼んでくれて構わねえ」

「僕の名前は【新村新八】。よろしくお願ひします」

「私の名前は【神楽】ネ。よろしくな、変態」

「変態じやないから！」

四人の自己紹介が終わつた後、銀時はある疑問をマリアに問う。

「どうりでよ、まずあんたなんでその恰好、ハイグレのままなんだ？他に服ねえのかよ？」

「あいにく、これしか着れないのよ（まさかあの内容が本当だつたなんて……お風呂場で確認できたのが幸いね）」

「え、そのハイグレしか着れねえのか？……つてことわよ、お前もしかしてハイグレ星人か？」

「……ハイグレ星人？」

「はい。ニュースだと、新種の天人で、特徴がハイグレしか着ることができないという欠点を持つつていて、コスプレ姿のようです。今のところ信号機色の三人トリオが見つかつていいそうです」

「その話詳しく」

マリアはそれが絶対自分たちの仲間だと分かつたようだ。

銀時たちはその話を詳しく話した。そしてマリアはこの世界の装者の扱いを聞いて、膝から崩れ落ちる。

「は、はは……。私たち、この世界じや変態扱いなのね……」

「いや、その恰好のどこが変態じやないんだよ」

「どうやら、ハイグレ星人はハイグレしか着れないというのは本当らしいですね」

「その言い方やめて！それに、私たちハイグレ以外に着れるから！」
「じゃあ今すぐそれ脱いで普通の服に着替えるよ」

「何故かこの世界だとこれしか着ることができないの！これ解除したら私本当の変態よお！」

「その恰好の時点で変態ですが…。とにかく、あなたの話を聞かせてくれませんか？」

「……分かったわ。その代わり、あなたたちの話も聞かせて」

そして、マリアと銀時たちはお互いの世界の情報を共有した。

「話聞いてると、中二的思考に囚われている哀れなヤツ等と言うのは本当らしいアル」

「いや、真実だから！本当に平行世界から来たから！」

「ていうか、あなたの話が真実だとすれば、なんでテレビでそんなウソのニュースが…」

「そんなの決まつてんだろオ。答えは一つだ」

「銀さんはどう考えているんですか？ボクなりの答えはもう出してるんですけど…」

「分かつてるなら行つてみるアル。早くしろよ」

「(この男、普段は最低なヤツでも、やるときはやると見たわ。こゝでも政府：いえ、幕府の連中がその真実を隠しているんでしょう)」

マリアは一人だけ少し違うことを考えていた。

だが、これも事実である。

銀時はやるときはやる男である。

だが、今は…

「たぶん、変態性癖の持ち主なんじやねえか？」

「はあ!?」

「なるほどネ。わざわざハイグレ姿を隠さずに街中に出るだけはあるネ」

「違あああああああああああう／だろおおおおおおおおおお!!!!!!」

新八とマリアが同時にツツコむ。

「どう考えたらそうなるんだあ！」

「そうよ！普通に幕府の連中が隠蔽してゐるつて事実が出てくるじゃない！」

「いやさ、じやあなんでそんな変態設定を作つたんだよ。もつと別なのがあるだろ？例えば【ピ――】とか

「てめえの願望モロ出てんじやねえか！」

「ていうかそれもつと酷いじやない！」

「それにしてもお前ら出会つてからツツコみが合いすぎネ」

「やつぱりお前らアツチの意味でつながりあう運命にあるんじやねえか？」

「アツチつてどつちだあ!?」

「決まつてんだろお。さつきも言つたじやねえか。【ピ――】だよ

「なんであなたはそんな猥褻な言語を平氣で言えるの!?」

「こんなの日常茶飯事なんだよ。こんなんで驚いてんじやねえよ」

「そうネ。これごときで疲れてたらここじややつていけないアル」

「ここは本当にどんな世界なの!?」

ハア、ハア…と息を整えるマリア。

「ていうか、あなたは疲れないの？」

「新八はツツコミ役だからな」

「ツツコミ役…？」

「新八にとつてツツコむことは仕事みたいなものネ」

「いや、結構疲れますけど!?」

「まあこれは仕方ねえな。とりあえず、マリモ」

「マリアよ！」

「マリア、おめえはそのノイズつつーやつを倒しにきたんだな？」

「そうよ。なにか情報はないかしら？」

「そんなこと聞いたことがありませんよ。人を灰にする怪物なんて

⋮

「そう、そうよね⋮」

マリアは肩を落とす。

そして、マリアは何かを思い出したかのように銀時たちに問い合わせようとする。

「実は、あなたたちに聞きたいことが——」

ピンポーン

そのとき、ちょうどインターほんが鳴った。

「なんだなんだあ？」

銀時は玄関に向かおうとする。

そのとき、見えてしまった。

特徴的な、アフロの影を……

「あのアフロって……！」

新八はそのアフロを見て驚く。

「間違いねえ。あんなアフロをつけてんのはヤツだけだ」

銀時は玄関の扉を開ける。

「お久しぶりですね、乙さん」

そこにいたのは、真選組の【齊藤終】だつた。

原作アニメの294話では仮名で乙と手紙で名乗っている。

「一体何の用ですか？うちにはなんも怪しいものはありませんよ」「…………」

終は銀時に一枚の手紙を渡した。

そこには、札束の入った封筒も混ざっていた。

「仕事の依頼ですか？」

「…………」コクツ

終は静かにうなずく。

「分かりました。依頼、承りましょう」

「…………」ペコリツ

終は頭を下げて、その場を立ち去つて行つた。

銀時がいつもの部屋に戻ると、マリアが話しかけた。

「あの人は？」

「真選組の内偵を任せている、3番隊隊長、【齊藤終】さんです」

「真選組：あの子たちがいるところね」

「ああ、ハイグレ星人つて確かあいつらのところにいたつけ」

「その呼び方やめて。あの子たちにはあの子たちの名前があるの」

「はいはい。さて、依頼料ももらつたし、前と同じ要領だ。さてさて、なんて書いてあるか……」

そうして銀時は、終からの手紙を開いた。

マリア、万事屋にお邪魔することになつた乙

「ええつと……『万事屋の皆様、お久しうりです。また急な依頼を出してしまつて申し訳ございません。封筒の中にはその謝礼料も混ざつております。これは私が勝手にしたことなので、返してもらう必要もありません』

「あの人、感じ悪い感じがしたけど…ものすごくいい人じゃない」

「そうなんですよ、あの人ものすごいシャイなんですがけど、いい人なんです」

「そうアル。ただのアフロ野郎ね」

「神楽ちゃん、今それ必要なことじやないから」

はじめは謝罪の言葉が記されていた。

それを聞いてマリアは関心した。最初マリアは無口で感じが悪い印象を持っていたが、この文を聞いてとても終に関心を持つた。

「続き読むぞ。『まず、依頼の内容を記します。実は私、最近今噂のハイグレ星人の一人、【立花響】という女性の監視を任せられているのです』

「立花響！」

マリアは自分の仲間の名前が出たことに驚く。

「もしかして、仲間ですか？」

「そう。私の仲間よ」

「僕は今まで仕事三昧で、ましてや女の子との触れ合いなどしたことありません。僕はなにをすればいいのでしょうか？僕なりに彼女いろいろと接してみましたが、うまくいきませんでした』

「その接し方つて……まさか……」

「たぶんそうね」

「ああ、そうだな……」

新八と神楽は何かを察した。次の文を頭の中で人通り呼んだ銀時は二人の考えが当たつていることを言う。

「『僕はまず、彼女にZ帳を見せました』

「Z帳…?」

「それは略で、是非友達になりたい人帳と言う意味なんです」「なんで分かりにくい略し方…」

「『Z帳を見ただけでは彼女がそれがどんなものなのかわからないの

は十分承知しています。ですが、僕はこのキャラを通している関係上、喋ることができます』

「以外とキャラ気にしてたの!?」

「そうなんですよ。終さんは冷静そうに見えて、実はこんな人なんです」

「だから仕方なく彼女には人に聞いてもらうことにしました。きっと他の皆も僕が友達が欲しいのを分かってくれているはず……。僕は、彼女と友達になりたいんです』

「……これ、絶対口クな結果になつてしませんよね!?」

「そうだな……。あんな内容が他のヤツ等に分かるわけがねえ。それに他のやつらだつてきつとああ思つてるはずだ」

「思つてるつて……なにを?」

「終さんの三番隊は、裏切り者を肃清するためにあるようなものなんです」

「——ツ?!」

「終さんは、今まで自分の隊に裏切り者を入れて、それを肃清してきました」

「それ……人を殺してることよね…」

「その通りです。……話を変えますが、僕たちは今までそう思つてきました。ですが、本当は違いました」

「?」

「実はな、こいつただ自分の隊に友達になりたい人を入れてただけな

「なんだよ

「はあッ!?」

さつきのシリアルスメいた雰囲気から一転、またギャグ風になつた。

「乙帳を見たそいつらは、こいつに自分が裏切り者だつてバレたと思
い、逃げ出した。それで殺すしかなかつた…。実は全くの偶然なんだ
よ」

「ほんと、あの人可哀そうですけど内偵向いてますよね」

「そうアルなあ」

「なに、それ…」

「さて、話を戻すが、乙帳の内容は今までの裏切り者の名前とそこに
バツテンが書かれていて、その下には一本線がついた乙が書かれてい
る」

「乙が書いてある理由がわからないけど、それで？」

「おそらくだが、こいつが言つてる女の名前と、一本線が入つていない
乙がそこに書かれてるに違ひねえ。これが何を意味すると思う？」

「まさか…！」

マリアが考えた通り、絶対勘違いされる。響はいつか自分が殺され
るのでないかと言う危険を感じているだろう。

実際はそんな心配する必要は全くないが…：

「そう。続きを読むぜ？『彼女が帰つてきたとき、彼女は怯えていまし
た。理由は分かりませんが、きつとなにがあつたのでしょうか。そこで
僕はお帰りという意味も込めて彼女に笑顔で対応しました』——ツて
おいしいいいいい!!!」

「まさか女の子にあの顔見せたのかあ!?」

「そりやあ怖がるに決まつてんだろオ！」

「え、どういうこと？」

「実はあいつ、滅茶苦茶笑顔が怖いネ。子供が見たら泣くレベルアル」

「そこまで!?」

神楽の言う通り、終の笑顔は滅茶苦茶怖い。
子供どころかホラー耐性のない大人まで泣いてしまいそうなレベル。

「あいつに自分の笑顔の危険性伝えんの忘れてたあ！何々……『その後、彼女は悲鳴を上げながら泣いてしまいました。一体僕のなにがいけなかつたのでしょうか？どうかアドバイスをください……』……どうするよこれ？前なんかと比べればメチャクチヤ難易度高えぞおい！」

「前回見たいに銀さんがフォローしてくださいよ」

「前回とは勝手が違うんだよ。俺女経験皆無だぞ！」

「それを言つたら僕もですよ！」

「じゃあ…神楽！……は、無理か」

「おいどういうことアルか。表出ろや」

「いやさ、ヒロインならぬゲロインのお前に女関係のことは無理に決まつてんだよ」

「（ゲロイン…？）」

「さて、話を戻すが、これどうする？」

「銀さんがなんとかしてくれさいよ。依頼受けたの銀さんじやないですか」

「……はあ……。そうだ、マリア。お前手伝えよ」

「はあ!?」

急に話を振られたマリア。

「だつてこの中で唯一の女だし、女のことが分かつてるじやん」

「おい、私が入つてねえぞ。私だつて女ネ」

「わ、分かつたわよ……。立花響は、きっと終と言う人とそれでも仲良くしようと思つているはず：彼女はそういう人だから。仲間のためと言つうのなら、協力するわ」

「よしー！それじゃあ決まりだなー。早速あいつに送る文章考えるぞ！」

（終の部屋）

『Zさん。今回は前と同じような感じですが、実は違います。あなたが前回仲良くなろうとしたのは男性ですが、今回は女性です。それだけ手順が違つてくるのです。まず、あなたは彼女があなたのことを見らぬよう、彼女のことを知りません。なのでまずは彼女のことを知ることから始めましょう』

「…………」

終は響の方を見る。

「ヒイー！」

「…………」

終は響に対しておいでおいでをする。

「な、なんですか…？」

響はこつちにこい、この意図は分かっているのだが、怖くて近寄りたがい。

だが、終はそれを続ける。やがて、その無言の圧力に負けて仕方なく終の近くに来た。

「…………」

「なんですか…？」

終は響に一冊の本を手渡す。

「(ヒイ～～～！またなにか書いてあるんじゃ…もしかして、殺す！とか…！?)」

響は恐る恐るページを開く。

「(えつ…あなたのこと教えてください…?)」

ノートにはそう書かれていたのだ。
それを見て響は一時的に安堵した。

「(なんだあ…終さんも、なんだかんだで私のことを思ってくれて…つ
て、ヒイイイイイイ!!!)」

響は終を見ると、急に遠ざかった。
その理由、それは…

「…………ニイイイイ……」

終が、笑っていたからだ。だが、いつもの満面の笑みではなく、口
角が少し上がっているだけ。

歯はむき出しで、目は全開。これがまた満面の笑みとは違った恐怖
が存在した。

『まず、急に自分のことを教えてくれと頼んでも、女性は不信にしか思
いません。ですので、まず乙さんが自分は無害でなんの心配もする必
要はない、と彼女に認識させることから始めましょう』

『女性に自分は無害だ、なんの心配もする必要はない。と認識させる
にはまず、信用、信頼が必要です。ですが乙さんは声が出せず、コミュニケ
ーションができないので、言葉以外の方法で表現するしかありま

せん。それで効果的なのが笑顔です』

『ですが、男性が急に満面の笑みをしたところで、女性には逆に不快感を与えます。なので、口角が少し上げる程度にしましょう。やわらかい笑みだと、女性に安心感を与えることができます』

終は出来るだけやわらかい笑みを浮かべようとした。
だが、逆にそれが響に恐怖を与えた。

「いやああああああああ!!」

響は、その笑みに耐えられず逃げてしまつた。

「…………」

そして、それを見る影が四つ。

「……（少しの笑顔でも怖すぎだろおおおおお!!）」

「（どうすんですか銀さん！満面の笑みでも怖いのに、さらに怖くなつてますよ！）」

「（ていうか、なんで満面の笑み以上に怖いネ）」

「（逃げ出すのもよくわかるわ…ていうか満面の笑みだとあれ以下の!?どんだけ!?）」

「（俺が知るか！あんなの予想外だ！）」

そう、銀時、新八、神楽、マリアの四人だ。

「（ていうか、あれが噂のハイグレ星人か……。すぐ工口いな）」
「（そこ！そんな目であの子を見ないで！それに、無事でよかつたわ。あとは翼とクリスだけだけど…どこにいるのかしら？）」
「（そういえばあと二人いるんですよね？監視があるってことは、きっと誰かと一緒にいるんですよ！）」

「（そ、うだとい、いアルな。もしかしたら【ピ――】されてるかもし
れないと、）」

「（女、の子が心の中だと、して、もそ、んなこと思、わないと、！……て、い、う
か、なんで私、たち心の中での会話が成、立して、るの！？）」

そう、先ほどから心の中の会話が成立しているのだ。

「（知らねえよ！とにかく、すぐに万事屋に帰るぞ！）」

「（そ、うです、ね！見つかつたらヤバイです、し！）」

「（不法侵入アルから、ね）」

「（皆、捕まつて！）」

マリアに三人は捕まる。

そして見えないスピードで飛ぶ。

「おお！す、ご、いアル！」

「す、ご、い！」

「ど、こ、うで、よ、なん、で、俺だけ、足、い、い、！？」

ちなみに、銀時だけマリアの足に捕まつっていた。

「あなたは何やるか分かつたもんじゃ、ないわ！」

「それを、言、うなら、新八もアル」

「僕は、やら、ないから、ねえ！？」

（万事屋）

「（「はあ、～」）」

万事屋に帰った四人。神楽を覗いた三人は椅子に座つてため息をついていた。

「あれは予想外だつたぜ…」

「ですね。まさか少しの笑みでもあれとは…」

「怖かつたわ…。でも、私としては立花響が無事なのを確認できたのはよかつたわ」

「俺たち的にはよくねえよ…。どうする?」

「とりあえず、次の手紙が来るまで待ちましょう」

「そうね。そうしましょう」

「ていうか。なんでおめえ当たり前のようにここに居座ろうとしてるアルか」

「大丈夫よ、酷漬しになるようなことはしないわ。あなたたちの仕事手伝うから、ここにしばらくの間居座らせてもらえないかしら?」

「無理だ無理。俺たちだつて財産難なんだぞ?」

「今回のでかなり入つてるじゃない」

「それはそれ。これはこれだ」

「申し訳ありませんが、僕たちにはもう一人養う余裕がないんです。悪いんですけど、出て行つてもらえませんか?」

「そう……」めんなさい。我がまま言つて。それじゃあ私は出て行
「あのー」ツ!?誰!?

すみません。急に声をかけてしまつて。

「あなた…いつからいたの!?」

あの、お願ひですから剣を向けないでください。

「安心してください。この人はある仕事の依頼者です」
「依頼者?」

「そうアル。私たちの日常を撮るだけっていう楽な仕事ネ」

「そ、そうなの…(ていうか、この人さつきまでいなかつたのに…どこから現れたのかしら?)」

「で、わざわざステルス機能を解除してまで何の用だ、ナレーターさん」

「（ステルス機能？納得だわ。それにナレーター？）」

いや実はですね、この仕事、人数が多い方が僕たちとしても助かるので人数が多くればその分依頼料を増して「マリアさん。どうぞしばらくの間住んでください」

「お願いします、マリアさん」

「おい、特別にしばらくの間住んでいいってほしいネ」

「（こ）の変わり様…すごい現金な人たち！」そ、それじゃあ、お言葉に甘えて住まわせてもらおうかしら…」

「あざーっす!!」

こうして、マリアは銀時たちの家に住まわせてもらうことになります。

そのころ、シンフォギア世界では……2

前回のあらすじ。

何故かシンフォギアの世界に来ていた桂小太郎。

「司令……間違いありません。あの映像に映っていた人ですね……」

「そうだな……」

「む、貴様、一体何者だ。常人ではない氣配を持っているな」

桂は一人に対していくつの間にか持っていた刀を向ける。
それと同時に職員が桂に対して銃を向ける。

「銃を下ろせ」

「ですが、司令！」

「大丈夫だ。問題ない」

弦十郎にそう言われて、銃を下ろす職員たち。

「周りのやつらからの反応からすれば、貴様がこここの親玉らしいな。
答えろ！……ここのはどこだ!?」

「その前に、その刀を下ろしてはくれないだろうか？」

「悪いが、得体の知れないヤツ等相手に、警戒しないなど無理がある」「まあ、確かにそうだが……。すまない。とりあえずその現在進行形で頭から流れている血をどうにかしてくれないか？」

ちなみに、ライオンに噛まれた桂の頭からの血はまだ止まっていない。

「怪我の心配をしてくれているのか？これは戦傷だ」

「いや……猛獸に噛まれたんですよね？」

「つ？貴様、何故俺がサファリパークのライオンに噛まれたことを

知っている!?」

桂のその言葉で職員たちがこける。

「司令!…こいつただのバカですよ!」

「とりあえず…慎次。すまないが彼を無力化してくれ」
「わかりました」

とりあえず弦十郎は桂を治療するため、慎次に指示を出した。
それと同時に慎次は桂を気絶させようと後ろに移動する。
だが、

「甘い!」
「ツ!?

なんと、桂は後ろに回った慎次に刀を振り下ろしたのだ。
それに驚き、一步下がる慎次。

「驚きました…。まさかこのスピードについてくるとは…」
「あいにく、忍者にはお墨付きをもらっているのでな」

そこで慎次はあの映像が頭によぎつた。

響たちが転移した世界は明らかに江戸の町のような外観。
江戸らしくない風景もたびたびあつたが、時代が江戸ならば忍者が
いてもおかしくはないと。

「本場の時代の忍者からお墨付きをもらっているほどとは…納得です
よ。お名前を聞いても?」

「いいだろう!俺の名は、攘夷党党首!桂小太 r [バタツ]」
「えつ?」

桂は突然倒れた。

それに驚きを隠せない一同。

桂は白目を向いていた。

「もしかして…」

「ああ…限界…だろうな…」

一番かつこいいところで倒れてしまつた桂に同情の視線が刺さる。その後、桂は治療室に運ばれるのであつた。

「しぶらくして」

「司令、ただいま任務から戻りました」

その間、ピンク色の猫耳の髪をした女性【マリア】が帰ってきた。

「マリア君！帰つてきてすぐすまないが、緊急事態だ！」

「なにがあつたんですか!?」

「ああ、実は…」

弦十郎は今までのことをマリアのにすべて話した。

「そ、そんなことが…司令。念のため確認しておきます。休まれては

?」

「すまないが…事実だ」

実際、こんなことになるもの仕方ない。

「翼たちが平行世界で警察に捕まつて、平行世界の住人がこっちの世

界に来て、そして全裸ツ?!どこをどうしたらそうなるの!?

マリアが特に反応を示したのは次回予告だった。
実際、全裸になるのはありえない。

「それは俺たちにもわからない。現在、エルフナインくんたちがあの映像が送られてくる場所を特定しているが、手掛かりなしだ」

「そう…私も平行世界に急行したいけど…」

「それは無理がある。なにせ今回ゲートが開いている場所は街中だ。それはあまりにも目立ちすぎる」

「それに、何故翼たちが全裸になるの?全く意味がわからないわ…」

「それは俺たちにもわからん。あとは、桂くんが起きてから平行世界の事情を聞くしかないだろう…」

そのとき、通信機から慎次の声が聞こえた。

『司令、あの映像が再び流れました』

「ツ!わかった、今すぐそっちに行く!」

「急ぎましよう!」

「司令室」

二人が着くと、前回同様龍と狐の姿があつた。

『さてさて、第二部始まり始まりつと』

『はいカメラさん。こつちこつち』

その映像を見てマリアは困惑の表情を浮かべた

「なに、これ…?」

「俺がさつき言つた映像だ。まだわからないか!?」「すみません、全く分かつておりません!」

『さて、とりあえず今日は真選組の内部に入つていこうと思うんですが…土方さん、どうしちゃつたんですかね?』

映像には、上半身が壁に埋まり、隊士たちがそれを精いっぱい引きずりだそうとしている姿が映し出された。

テロップ

【真選組副長 土方十四郎】

「なぜ!?!」

マリアがそれを見てツッコむ。
実際、理解不能の状況だ。

『すみませーん。これ一体どういう状況ですか?』

『なんだあんたら!? 今はあんたらの相手してると場合じやないか! 沖田さんがまたやつたよ! ああ壁を修理する俺らのことも考えてくださいよあの人!』

『あ、土方さんの心配はしてないんですね』

『当たり前だ! こんなの日常茶飯事だからな!』

「日常茶飯事!? これが!?!」

『さて、とりあえず中に入りましょー』

カメラが真選組の内部に入る。

『普通ですねー』

『本当ですよ。沖田さんとか拷問器具置いてませんかね？』

「さらつととんでもないこと口走ったよ!?」

「藤堯くんうるさい！」

『おい、そこで何してんの』

『あ、沖田さんじやないですか？』

テロップ

【真選組一番隊隊長 沖田総悟】

『かわや廁トイレに行こうと思つてたんだが…不法侵入者か？だつたら逮捕『これどうぞ』ツ！…見逃してやらあ』

沖田の手に渡つたのは、謎のこけし

実際、全員『なぜこけし？』と思つている。

すると、そこへ…

「あれは…【ジャスタウェイ】!?」

「ツ！あなたは！」
「起きたのか。よかつた」

包帯で体を包んでいる桂の姿だつた。
ていうか、もうミイラと化していた。

「あなた…あのこけし知つてるの？」

「何を言うか！ジャスタウェイはそれ以上でもそれ以下でもない！ましてやそれ以外の何物でもない！わかったかこのバカども！」

「誰がバカよ！」

マリアは桂を殴る。

その影響で桂は地面転がる。

「マリアさん！相手はけが人です！」

「あつ！ごめんなさい。大丈夫？」

「こちらこそすまない。まさかジャスタウエイ見てしまって、興奮してしまったようだ」

「ジャスタウエイって何なの？」

「さつきも言つただろう！ジャスタウエイはそれ以上でもそ r 「それはいいから」……ジャスタウエイの効果はな、聞いて驚け！まずは爆発する！」

「爆発!？」

最初での謎のこけしが爆発物だと聞いてマリアは驚く。

それは弦十郎達も同じだ。

「だが、ジャスタウエイの使い道はそれだけではない！これが重要なのだ！風鈴や目覚まし時計、さらに料理の出汁などに使えるのだ！」
「そんなのどうでもいいじゃない!?ていうか出汁!?なんで爆発物から出汁ができるのよ!?」

「ジャスタウエイだからだ！」

「理由になつてないわよ！」

二人の漫才が繰り広げられている中、映像は進んでいつている。

『まさか、ジャスタウエイが手に入るなんてなあ』

『ところで、ジャスタウエイは何に使うんですか？やつぱり爆弾とし
てですか？』

『まあまでは出汁を取つてからだな』

「えつ、マジで出汁取れんの!?」

「爆発物から出る出汁はあまりおいしくないと 思いますが…」

『それじゃあ、俺たちはこれからまだ用事があるので。 沖田さん、土方さん殺すの頑張つてくださいね』

「物騒！」

『おう、頑張らあ』

そうして、画面に沖田の姿がなくなると、違う場面に移動する。
内容は真選組の中身の案内のようなもの。

しばらくの間これと言ったことは起こらなかつたのだが……

『あれ? なんで天人がここに?』

そこに現れたのは、黒髪の青年だ。

『あ、えーと……』

『山崎…』

テロップ

【なんだつけ?】

『おいテロップ! なんだよ、なんだつけって!? 退だよ! しりぞくと書いてさがるだよ! 山崎退!』

そう彼、山崎退は見えないはずのテロップにツッコミを入れてい
た。

それに困惑する一同。

テロップ

【ああ、アンパンか】

『アンパンかつてなんだよ！山崎退つてちゃんと書けよ！』

テロップ

【じゃあバトミントン】

『じゃあってなんだよじやあつて！しかもバトミントンは初期のキャラ設定だろ！もう俺は完全なアンパンキャラになってるんですけどうー！バトミントンの面影なんてもうないよ！』

テロップ

【ちつ、モブキャラのクセにうるせーな】

『ついにテロップに悪口書きやがったなこの野郎！あとモブキャラ言うなし！』

「……れ、なんで会話成立してんですかね？」

藤堺がそういう。

実際、今までこれは編集されているものだと考えるだろう。
だからテロップにツッコむなど無理がある。

最初からそういう算段ならありえるが、そうする理由がわからな
い。

「当たり前だ。今の世の中、本来見えないものにまで気を付けないと
やっていけないぞ」

「いや、普通見えないものにツッコめないから！」

「んー及第点だな。もつと物事に的確にツッコめ。それでは俺の

志村新八
盟友の仲間に遅れを取るぞ

「別にあなたの友達のこと目指してないから！」

「さてさて、まだ続いてるぞ」

「話を聞きなさい！」

『はあー、はあー、はあー、俺、もう行くから…』

『ツツコミお疲れー』

『誰のせいだと「[「きやああああああああああ!!!」「] ツ!?!』

そのとき、女性の悲鳴が聞こえ、滅茶苦茶な歌が聞こえた。

『この歌は！』

「翼たちの歌！」

「でも、ここまで乱暴な歌、初めて聞きました…。一体なにが…!?」

『うわああああああああああああああああ!!!』

次に男性の悲鳴が聞こえた

『この声は！局長オオオオオオ!!!』

カメラが声が聞こえた方に移動する。
『局長ッ!!どうしたんですかって……沖田隊長ッ!?それに……痴女
?』

『『痴女じやない!!』』

カメラには、さつきの男、沖田総悟とシンフォギア装者三人の姿があつた。

『おお、【山崎】。どうしたんでえ』

『どうしたものこうしたもないですよ。急に大きな音が聞こえたと思つたら、こんなことになつてたんですから』

『ああ。それならさつき変態をこの変態が退治したぜ』

『『変態じやない／です／つての!!』』

『あ……またあのゴリラか』

『ちなみに、ゴリラとはこここの局長さんのことです』

『たぶん、さつきの悲鳴は：：予測がつきますねえ。とりあえず飛ばされたところまで行つてみましよう』

カメラは移動する。

ちよくちよく部屋の壁に穴が開いている。

「あいつら……帰つてきたら叱つてやらねばな…」

弦十郎は久しぶりに怒つていた。

それは本来守るべき人に攻撃をしたからだ。

しかもその威力は周りの残状を見れば即座に理解できる。

「司令、落ち着いてください。響さんたちは理由もなしに人に攻撃する人じやありません」

「だが慎次。人に攻撃するなど…」

「ていうか、なんで翼たちは悲鳴を上げていたのかしら？」

「攻撃したのつて局長らしいじやないですか。もしかして響ちゃんたち、ヤバインじや…。それにゴリラつてどういうこと？」

「桂さん…だつたわよね？局長さんについて何か知らないの？」

友里さんが桂に聞く。

「敵だ。永遠のな」

桂は即答する。

桂は攘夷党党首。こここの局長は警察。真逆の立場の者が敵といつてもなんら変でもない。

「即答なのね？」

「ああ。それはゲーム、モンハン（モンキーハンター）でも一緒だつた。ヤツのアバター名は俺のアバター名と似ていたのだ」

「へ、へえ～ちなみに、どんな名前だつたんですか？」

『あ～長。どこまで行つたんですかね？あ、見つけた――』

「俺の名前は【フルーツポンチ侍G】と言う名前だつた。対してヤツの名前は――

『「フルーツチンポ侍G!!」』

『『きや……きやああああああああああああああああああああああああ!!!!』』

「いやああああああああああああああああ!!!!」

「…………」

わいせつ物が入っているアバター名に驚く二人。
まさかのアバター名に固まる藤堯

「あの、チ○ポってもしかして 「見ても言つてもダメです／だ！」

それに困惑するエルフナイン。

彼女は純粋な気持ちで聞いている。それを止める緒川と弦十郎。
二人はエルフナインの目と口を閉じた。

だが、ここで一つの疑問が生じる。

ただのわいせつ物の名前を出しただけで『見ても』とは言わないはずだ。

塞ぐのは口だけでいいはずだ。それだけでは目を塞ぐ理由にはならない。

その理由は、画面にあった。

『うわあ～……』

龍が声を上げる。

そこには、【近藤勇】の姿があつた。

だが、姿が問題だつた。

『マジでギャグつて感じですねえ。まさか、こんなポーズになつているとは……』

近藤は、力ニ股になつて上半身が埋まつていた。

その際、前向きの方がカメラに向いていた。もちろんそこにちゃんと編集が入つているのだが、またその編集も問題だつた。

「なんと！まさかテロップをモザイク代わりに使うとは…なかなかやるな！」

「何言つてんのよ！…とんでもない場所にテロップあるじゃない!? しかも縦向きだし！」

マリアが言う通り、今までテロップは横向きだつた。

だが、近藤のテロップの向きだけ縦だつた。

しかもテロップの場所がチ○コを隠すモザイク代わり。

これだけで今どういう状況なのかが理解できるだろう。

ちなみにテロップには

【真選組局長 フルーツチンポ侍G……じゃなく、ゴリラ、じやなかつた近藤勇だよ】

と、書かれていた。

テロップの形式は今限定で色がついている長方形に文字が彫つてあるような形。

色は黒で、文字の色は白だ。

しかも、余計な文字が入つていてるために長さがエグく、それが原因でさらに卑猥感を増している。

これが流れたために司令室は大パニック。

周りにいた他のオペレーターたちも悲鳴を上げ、阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。

「ちょっと待つて!?

そこに、藤堯が声を上げた。
どうやら元に戻ったようだ。

「さつき、女性たちの声でほとんど相殺されてたけど、同時に響ちゃんたちの声も聞こえなかつた…?」

『『『『あ』』』

画面を再び見ると、画面の映像が変わっていた。

『全く龍さんは……人使い、いや、狐使いが荒いんだから…』

映つてているのは狐だ。

どうやら龍は狐をさきほどのところまで行かせたのだろう。

そして、そこに映つたのは…

全裸の三人だつた。

それが映つた瞬間、

「男どもは見るなあ!!!」

G Xの6話の言葉と同じ言葉を叫び、弦十郎たちは目を閉じたり、違う方向を向いた。

だが、それをしないヤツが一人。

「おい、手が動かないんだが？」

そう、桂小太郎だ。

今桂は包帯巻き状態で実質両手が動かない。

どうやら、いらぬところまでも巻かれていたようだ。

「目え閉じればいいでしょ！」

「それは無理だ！最近目が乾燥して、目薬を使用しないと目がヤバいんだぞ！」

「じゃあ後ろ向きなさい！」

「脚を動かすだけでも一苦労なのだと？」

「じゃあどうやってここに来たのよ！」

「そんなの決まつておろう！それはだな——

『実はな、俺はさつきあの銀髪の【自主規制なし】を激写したんだ。見たくはないかあ？』

まさかの展開だつた。

自主規制を入れなければならないところにピー音が入れられてな
かつた。

これに硬直してしまう一同

「く、クリス君……」

このあまりの衝撃展開に、保護者である弦十郎は後ろを向いて壁に手をついていた。

司令、落ち着いてください…

さらに、そこに追い打ちが掛かる。

「あの、【自主規制なし】ってなんで——」

「誰か！今すぐエルフナイン君を司令室から出してくれ！」

— · · · · —

数人の職員たちがエルフナインの体を掴んで司令室から出した。これは、三ヶ月未満だと思つた。(苦笑)

これは正しい決断だと皆が思つた。(桂除く)

「これは…仕方ない…」

「司令の判断は正しいわ」

「なんなのよこれ…教育に悪すぎるでしょ…」

「貴様ら、あれ」ときに心を乱すな。たかが【ピ——】や【ピ——】

】と言つただけであろう」

「それ自体が問題なのよ！ わかりなさいこのロン毛野郎！」

「ロン毛野郎ではない桂だ！それに、見ろ」

桂が画面に目を移す。

『辱めた? 何言つてんでえ。また序盤だぜえ。まだ【ピ――】や【ピ――】もしてねえだらうよお』

「警察であるヤツが言っているのだ。俺は俺の世界では世間的に有名な犯罪者なのだ。警察であるヤツが言っているのであるのなら大丈夫だ」

「全然大丈夫じゃないわよ！」というか、今、聞き捨てならないこと聞いたんだけど!!」

二人のボケとツツコミが繰り広げられている最中に、響たちは毛布にくるまつていた。

これで男性たちは目を逸らさず済む。

その次に、沖田からここで働きを言われ、沖田がテレビをつける。

『それでは、現場に中継を合わせます。結野アナ。結野アナ』

『はい、こちら現場の結野です。本日、かぶき町のど真ん中に信号機の色をした謎のハイグレ姿の女性三人組があの謎の水色の穴から現れ、わいせつ物陳列罪で真選組によつて逮捕されました。真選組があの穴について、現在調べており、何かわかり次第、お伝えする模様です』

「ケツのアナ…？」

「結野クリステル、有名アナウンサーだ。ていうか、あの穴、飛ばされた時に入つてしまつたヤツではないか。そうか：俺はあの穴に入つ

てここに来てしまったのか

「そうだったの!? ていうか、単純に言つてるけど、あなたがいること自体おかしいんだからね!?」

話は進み、翼はある質問を沖田にする。

『…そういうえば、匿つてくれるのはありがたいが、さつき山崎とやらに頼んだものはなんなのだ?』

『ああ、あれか? あれはな……あのカメラを持たせてコンビニのコピーマシン直行させただけだ!』

『…………え?』

『…………はあ?』

『お前らの【ピ――――――】が映つてるやつが、今頃どうなつているのかねえ…?』

「一体この間に何があつたの!?」

「さつき、響ちゃんたちを撮つたカメラを山崎つて人がコンビニのコピーマシン持つて行つたそうだ…」

「え、。それって、もしかして…」

そして、始まる修羅場（物理）

「こうしちゃいられないわ! 司令、私もこの世界に行きます!」

「駄目だ! ゲートを出た途端一目に触れてしまうぞ!」

「出た途端に路地裏辺りに隠れれば大丈夫です!」

マリアは弦十郎の静止を聞かずにギャラルホルンがある場所へと向かつてしまつた。

「全く! クソ、どうすれば…」

弦十郎は目の前で自分たちが守らなければならない状態の響たちをフォローすることができないことに悔やむ。

「司令、悔やんでも仕方ありません。ここは、マリアさんに任せましょう」

「そう、だな……。さて、そういえば桂く……どこだ？ 桂君？」

弦十郎が辺りを見渡すが、桂はいなくなっていた。

「……ッ！まさか！」

弦十郎は気づいてしまった。
桂がいつ逃げ出したのかを！

「ふつ、あの女子おなごには感謝しなければな。おかげで無事脱出できた。

ありとうな、【エリザベス】

“どうもどうも”

彼の隣には白い着ぐるみのようなペット？エリザベスがいた。

実はエリザベス。

最初からいたのだ。

あのときエリザベスは事の異変に気付き、桂に報告してからエリザベスは床の下に隠れていたのだ。

そして、桂の移動方法を説明しよう。

桂は怪我の重大さを思われ、意思から包帯グルグル巻きにされた。実際はテンパリすぎてこうなつただけだが。

そのせいで桂は身動きすら取れなかつた。

そこで、ある方法を使ってその移動を可能にした。

「本当に感謝するぞエリザベス。まさか草履の裏に磁石を仕込んでいたとは…」

そう、磁石だ。

潜水艦は基本的に鉄でできている。だから磁力が伝わる。

桂の草履に仕込んだ磁石はN極を。

対して床下に隠れていたエリザベスはS極の磁石を持っていた。

これだけでもうわかるだろう。

そして桂がいつ逃げ出したのか、それはマリアが司令室を出るとほぼ同時だ。

注意がマリアに、他の人間に向いているところを狙つたのだ。

「さて、俺たちは元の世界に帰るためにこの世界の情報を集めなくてはならない。いくぞ、エリザベス！」

桂が包帯を外した後、二人は陸を駆けて行つた。

ちなみにだが、これを見て誰もが『いやS. O. N. Gの人たちに

聞けばいいじやん』と思うだろう。

残念だが、今の桂はそこまで頭は回らなかつた（血液不足が原因で）。

司令室

「監視カメラの映像は!?」

「今探している最中です！」

桂が逃げ出したことで司令室は今混乱していた。

エルフナインはちゃんと戻ってきており、逆に緒川が桂を探しに行つた。

いくら緒川とは言え、緒川同等の速さを持つ者を見つけるのは難しいだろう。

そのときだつた。

『次回予告だよお！』

突如画面が次回予告に変わる。

「重要な時に…！」

「でも弦十郎さん。これ、LIVEって書いてありますよ?」

エルフナインがそう指摘する。

実際、前回とは違いLIVEと言う文字があつた。

『もうすぐで……もうすぐで着く……。平行世界。待つてて三人とも。すぐに行くから。さて、到着場所は町のど真ん中。着いたらすぐに空に逃げないと』

『この声は、マリアさん!?

「それじやあ、今流れているのは、今のマリアさんの現状…!?

そして景色が江戸の町になる。

『よし、すぐに飛『邪魔ネツ!!』グハアツ!!』

着いた瞬間、何かに頭を蹴られ、その勢いで方向感覚を失い、キリモミ回転をした。

その次に、

『自分のバイクで走つてるー!』

宙を浮いていた自分の体にバイクが激突し、遠くに飛ばされる。

『ちょ、銀さんツ！誰か撥ねましたよツ!?』
『知らねえよツ!!さつさと行くぞツ!!じゃないと間に合わねえ！』

そのままバイクは走り去つていき、彼女は路地裏へと叩き落された。

『……な、なに？なんなのこの世界…？シンフォギア纏つてなかつたら死んでたわよ普通に…』

そのとき、頭になにやら生暖かい液体がかかつた。

『…何かしら、これ…？』

上を見ると、そこには……

『ワンッ』

デカい、犬がいた。

『い、犬？にしていはデカすぎ…つて、ちよやめ——』

——バクツ——

女性は犬によつて頭からバツクリ行かれた。
実際には死んでないが、犬の顎の力がすごすぎるために抜けられないと。

『ちよ、ワンちゃんお願ひだから出してツ!!』

司令室に、沈黙が訪れる。

『……次回予告だよお！』

「今なんだつたの!？」

「ていうか次回予告より今のを見たいんだけど！」

画面が違くなる。

LIVEの文字は書かれていない。

『次回！暴れたことにより牢屋暮らしを余儀なくされるシンフォギア
装者三人！』

『そこに、誤解の解けた山崎モブキヤラのいい言葉にシンフォギア装者たちは感
動する！』

『そして最後に三人はこの真選組でどうなるのか!?』

『次回、『4人目の装者現り、交通事故にあう！』次回もお楽しみに！』

「……次回予告、さつきのLIVE映像まんまじやん！やり直す必要
あつた!?」

司令室に、藤堺のツツコミが木霊した。

桂、一騒動を起こす。

【小日向未来】は困惑していた。

いつものように、友達三人と下校した後お好み焼き屋に行こうとしていたときのことだ。

「ビックキー今日も仕事だつたつけ？」

「そうなの。無事だといいんだけどなあ（確かに今度も平行世界と繋がつたんだつけ？）

「ほんと、アニメ見たいな生き様してるよねえ」

「でも、いつも無事ですので大丈夫かと」

今日は響は任務なので学校は休みになつていて。四人で歩みを進めた時、そいつは現れた。

「ふらわーにそろそろ着——」

「あのーすみません。そこの女子四人組よ」

「えっ、私たちです……か……」

未来だけじやない。三人もそれを見て固まつた。

そこには、ロン毛の和服を着た男と、謎の白い着ぐるみを着た何かがいたからだ。

この謎の二人組？に注目が周りから集まつている。

「実はついさっきここに来たばかりで土地感に疎いんだ。どうか、こらへんのことを教えてはくれないだろうか？」

「お願ひします」

「え、えー……」

何故よりによつて自分たちなのだろうか？
その考えを一旦捨てて四人で話し合う。

「なに、あの人急に…？」

「ていうかあの着ぐるみなに？」

「とりあえず、どうします？」

「私に任せて」

未来は率先してその男性にこういった。

「そういうのは私たちのような学生じゃなくて警察に聞いたほうが…」

「すまないが、警察とはなにかと因縁があつてな。その選択は嫌なのだ

未来はすぐに三人のところに戻った。

「どうしよう!? 一番最善の方法がつぶれちゃったよ!」

「警察との因縁つて…なにがあつたのかな? やっぱりアニメ展開!?」

「今は真面目に話し合おうよ! とりあえずはぐらかそう!」

「それが一番いいかもせんわ」

得体の知れない謎の人たち? と関わりたくないと四人は試行錯誤する。

「あの…すみません。私たち今から用事がありまして…」

「そうか。それは失礼したな。では他の人に聞くとしよう。行くぞエリザベス」

“ わかりやした、桂さん(チツ、はぐらかしやがつて。あとで覚えてろよ) ”

「「「(着ぐるみの人)に完全にバレてるー!!)」「」

着ぐるみの人? はプラカードで会話しているために心の中のこと

が完全に分かっている。

そして、完全に見えなくなると四人はため息をついた。

「はあくくく。なにあの人達…」

「ていうか、完全にあの白いのにはバレたよね」

「しかも後で覚えてろよって書いてあつたし……」

「報復されないですかね？」

「いや、さすがにそこまでは——【プルルル】あれ?」

そのとき、未来のカバンの中にある通信機が鳴った。

「なんだろ?」

未来は通信機を取り、周りに人がいるために小音にして耳に当てる。

『未来くんか?』

「そうですけど……どうしたんですか?」

『実はな、ある人物を探しているんだ』

『はあ……』

『その人物の特徴は、ロン毛で和服を着ているんだ。名前は桂小太郎。』

「…………」

『その人物は平行世界の人間で、下手したらこの世界になんらかの影響を与えてしまうかもしれない。…………未来くん?』

『…………弦十郎さん。那人、さつき見ました』

『何ッ! それでどうした!?』

『この場所のことを聞いて回つていて…』

『そうか。ならばその近くにまだいるんだな。ありがとう、未来くん。』

『それでは』

通信機の通信が切れる。

「…………」

「ヒナ、一体なんて……」

「さつきの人、探してたんだって……」

「えつ、さつきの人!?」

「ごめん! すぐにその人探してくるから! 皆は先にふらわーに行つて!」

未来はすぐにさつきの男性を探すことに決めた。まだ遠くへは行つていない。そう信じて。
だが、その時、

「ぐおおああああああ!!!」

「「「ツ!?」」

さつきの男性の悲鳴が聞こえた。

「な、なにが!?」

未来たちはすぐにその場所に向かつた。
そして、目に映つたのは……

「え、エリザベス……もうそろそ ゲフウ!」

——カキ——ンつ!

そこは、桂をバットの代わりにしてボールを打つているエリザベスの姿だった。

ちなみに、桂は背筋がまっすぐになるようにいろんな器具で体を拘束されていた。

「「「なんでっ!?」」」

これにはさすがに全員がツッコんだ。

集合住宅の公園で野球が繰り広げられていた。ボールを打つているのはまだ5歳くらいの子供たちであり、バット代わりになっている桂はエリザベスによつて振られている。

正確に言えば、ボールを投げているのは悪ガキの体現のような子供である。

他の子どもたちはそれを唖然とした目で見ているだけ。

子供の保護者たちはいない。だから止めるものが今現在誰もいないのだ。

周りの大人も傍観しているだけだ。

「なんで着ぐるみの人間バット使つてるの!?まるで意味がわからないんだけど!?」

あまりの光景にいつもボケ役であろう弓美がツッコんだ。

そこで未来は近くの人に話を聞いた。

「あの、これ一体どういう状況なんですか?」

「俺に聞かれても……。さつきの声聞いてきたからさ」

未来は諦めずに聞き込みを続けた。

そして、最初から見ていた女性を発見した。

「実はね……

これは女性の回想である。

『(なにあの二人組……?)』

女性は集合住宅のベンチで小説を読んでいた。ふと目に入つた謎の二人組。

『(目合わせないようにしとゝ)』

女性はそう心に決めて再び本に目を移す。そのときだつた。

『あ、危ない!!』

子供がそう叫ぶ。

女性が咄嗟に見ると、ボールがさつきの二人組の方に速球で向かつていた。

『うわ危な!』

男性はすぐに避けたが、変わりに着ぐるみの人には当たつてしまつた。

顔面に当たつたことで着ぐるみの人は地面に転がる。

『エリザベス——ツ!!!!』

男性はすぐにエリザベスと呼ばれた着ぐるみの人へ駆け寄つた。

『(えつ、あれ大丈夫なの!?)』

女性もエリザベスのことが心配になった。

あれほど早い球を顔面に受けたのだ。無事なわけがない。

『大丈夫かエリザベス!? 安心しろ! すぐに立派な墓を作つてやるからな!!』

『ハア!?』

これには女性も絶句。

心配どころかすでに死人として扱っていた。

『(怪我をするとしてもあれだけじや死なないっての……。あの人頭イカれてるの?)』

そのときだつた。

エリザベスの姿が消えた。

『(えつ?)』

これに女性は戸惑うが、すぐに驚きの表情に変わる。

『なあ!?』

なんと、エリザベスは男性を拘束器具で背筋がピンとなるように拘束していたのだ。

『い、いつの間に……』

そして、エリザベスはプラカードを掲げた。

“野球、混ぜて”

『えつ!?』

急な提案に子供たちも困惑する。
だが、そのうちの一人が

『おい、さつさと続きやるぞ! やらないのなら、こっちからやってやる
!』

子供がエリザベスと子供に向かってボールを投げた。

『うわあ!
『危ない!!』

これにはさすがの女性も声を上げてしまった。
だが、その時。

『ウオラアア!』

どこからか恐怖を感じさせる男の囁太い声が響いたと同時に、男を
足から持つてボールを打ち返した。

『ぐおおああああああ!!!』

そしてそのボールは、男性の顔面に当たったのであった。

「——つてなことがあつたのよ。たぶんあの着ぐるみの人——エ
リザベスつて呼ばれたたけど。ていうか着ぐるみにエリザベスつて
似合わなくない?……話がずれたわね。たぶんエリザベスつて人は
安否より死んだつて決めつけられたことに怒つてるんじゃないの?」

四人と女性はあの光景を再び見る。ちなみに女性が話している間に
にも桂の悲鳴は絶えなかつた。

「よつしや、行くぜ！」

子供が再びボールを投げ、エリザベスがそれを桂バットで打ち返そ
うとする。

だが、場所が柔らかかったためにあまり威力が出なかつた。

『ア、ア、ア、ア、ア、ア、!!!』

威力とは裏腹にさつきまで聞こえなかつた悲鳴が響いた。
それを見ていた男性たちは青ざめた。
なにせ、当たつた場所は股間だつたから。

“股間が威力がでねえな”

このプラカードでの発言でたぶんわざとではないかと言う可能性
が浮上してきた。

「エ、エリザベス……悪かつた！怒つているのだろう!?俺が数日前に
勝手にお前のプリンを食べてしまつたことを！」

“ちげえよ！”
「グハア！」

エリザベスはまた向かつてきたボールを桂で打つ。

桂の中では完全にさつきのことは頭から消されているようだ。

「こら、たかし！」

「母ちゃん!？」

そのとき、ボールを投げていた子供の母親が騒ぎを聞きつけて駆けつけてきた。
だが、

「グヘエ！」
「ブホオ！」

エリザベスが走ったと思えば子供のことを掴んだ母親の頭にバットの桂を振るつて頭どうしをぶつけた。

それを見て啞然とする人々。

これにより母親は気絶した。

「エ、エリザベス……これ以上は、もうむ」オロロロロロロロロ……

桂は吐いた。

「汚！」
「うげえ……臭い……」

思わず鼻を抑えてしまう皆。

だが、そこに救世主が現れた。

ファン、ファン、ファン、ファン

「警察だ！そこの着ぐるみのヤツ！おとなしくその男性を解放しろ

！」

警察が警棒を持つてエリザベスを取り囲む。
そこで、エリザベスはある物を取り出した。

「へ、ヘアスプレー？」

未来は無意識に口に出してしまった。

“アイ○バ、桂、アイ○バ、ヘアスプレー、Oh!”

エリザベスはどこぞのあの人々の踊りそのままを踊り、そして二つを合体させた。

そして、出来上がったものは…：

“ブレ○ドブレード!!”

『『『『なんで!』』』

男性とヘアスプレーが合体し、仮○ライダーブレ○ドがFFRして変形するブレイ○ブレードとなつたのだ。

もう、桂の面影はない。

桂とヘアスプレーの合体によつて剣になつた光景に周りの人たちは困惑。

※無意味ですがモザイクがかけられています。

そして、剣に青い雷が纏われる。

“喰らえヤア——————！”

「総員、伏せろオオオオオオオオ!!!!」

あの後、なんやかんやあつて、エリザベスは――

「ほら、キリキリ歩け」

「……」

暴行罪、公務執行妨害罪により逮捕されました。

あの後なにがあつたのかつて？どうやつてエリザベスが捕まつたのかつて？

知るかボケ。

いろいろとヤバくなるので捕まるところまで進みました。

「変な事件だつたね……」

「そうだね……」

「大変だつたけど、アニメっぽくてよかつたわ」

「弓美さんはいつもそれですね」

「あ、あの人も無事だし…」

未来は桂に目を向ける。

警察は桂の拘束具を外すのに苦戦していた。

「おい、さつさと外せ！金〇がかゆくてしようがないのだ！」

「今やつてますから！我慢してください！」

「ていうかこの拘束具、今まで見たことも聞いたこともないぞ？外し方があわからぬい…」

「この役立たずどもめえ！」

皆は見なかつたことにした。

それは最初に桂が金〇と言つた時から決めた。

「それじや、ふらわーに行こつか」

「そうだね。そうしよう！」

「あとはS・O・N・Gの人たちがなんとかしてくれるから」

「一件落着ですわね！」

四人はその場から離れようとしたそのとき、再び事件は起こつた。

「キヤアアアアア!!!」

「バイクが暴走してるので！逃げろお！」

黒いバイクに乗つた黒服と黒いヘルメットをかぶつているライダーがすごい速さでこちらに向かってきていた。

バイクはそのまま四人を通り過ぎ、一人を標的にした

「あつ！」

バイクに吹っ飛ばされた桂はそのまま空へと消えていった。

「ま、まるでアニメ見たいな吹つ飛び方…」

第一声がそれですか!?

そして、警察も空に吹っ飛んでいつた桂に夢中で、バイクを取り逃がしてしまった。

「昨日のあの人、結局どこに行っちゃつたんだろうね？」

次の日の朝。

四人は教室で昨日のこと話をしていた。

四人だけではない。

昨日のことはすでにニュースとなつて教室の生徒全員がこの話をしていた。

「S. O. N. G でも見つかならなかつたらしいし……どこに行つたんだろうね？」

「拘束されたままだからその場から動くことは不可能に近いから、今もどこかでシクシク泣いていたりして……」

「可哀そうですね。どこに行つたのでしょうか？」

そのとき、クラスの一人が叫ぶ。

「一校時目体育だから、更衣室に行くよー！」

その言葉を聞いて皆が荷物を持つて更衣室へと移動する。

そのとき、更衣室から何か音が聞こえた。

「音が聞こえる？」

「どうしたんですか？」

「皆待つてて。更衣室から音が聞こえるのよ。もしかして、泥棒!?」

生徒の言葉に全員がザワザワとなる。

リディアンの更衣室は鍵がかけられており、鍵は最初に入るクラスの委員長が開ける仕組みになつてている。

「先生呼んでくるわ！」

クラス委員長は一度職員室に行つて、先生を呼んできた。

「皆さん下がつていてください。今開けますので……！」

先生は棒を持つて更衣室の扉を思いつきり開いた!!
そして、中にいたのは…

「…………」

『『『『…………え?』』』』

そこにいたのは、拘束具で拘束されながらうつむけになつて倒れて
いる、桂の姿があつた。

桂のこの姿はすでにニュースで流れているため、全員が『あ、ニュー
スの人だ』と気づいた。

そして、桂は扉が開くのを待つていたかのように、こう言つた。

「き、昨日の夕方、鍵をかけられてからずっと、スタンバつてました
…………」

桂は、力尽きて倒れた。

真選組の一日

これは、真選組の一日である。

「お、おはようござります…」

「…………」コクツ

響が挨拶をすると、終は首を縦に振る。

「…………」クイクイ

終がおいでおいでをして、歩く。

響は怖がりながらも終についていく。

ワイワイガヤガヤ……

着いた先は食堂。

そこにはすでにたくさんの隊士たちがいた。

そして、響と同じような恰好をした者も一人。

「…………」

「つ、翼さん…？大丈夫ですか…？」

彼女、【風鳴翼】は青ざめていた。

それは彼女の目の前にあるものを見れば一目瞭然。

「…………」

「おい、さつさと食えよ！」

彼女の隣にいる男。【土方十四郎】

そして、その机にあるものは…

「だからなんども言つてはいる！私にこんなものは食べられない！」
「土方スペシャルにケチつけんじゃねえよ！」

彼女の目の前にあるのはマヨネーズ丼と言えるべき存在。土方スペシャル

「これ、元々なんだつたんですか？」

「元々はただの和食セットだつた…。だが！土方は私のご飯と鮭とみそ汁をすべて混ぜた丼句その上にマヨネーズをかけたんだ！」

「え、ツ…」

それは絶句ものだつた。

まさかすべてを混ぜてその上にマヨネーズ。まさに鬼畜の所業。

「いいか？確かに白米と鮭とみそ汁。これだけじや微妙な味になるだけだ。だがな！そこにマヨネーズを注入するすることによつて味が中和し！さらにおいしくなるんだ！」

「そんなことあり得るワケないだろう！」

「あ、はは…」

もう響はなにも言えなかつた。

そんな中、終はすでにとんかつ定食を持つてきていた。
しかも二人分。

「あ、持つてきてくれたんですね！ありがとうございます！」

「勝手に決めたのか？」

「いえいえ！私今日はとんかつ定食を食べたい気分だつたので！あります！」

「…………」

終は土方の席から一つ離れたところに座る。

「……翼さん」

「な、なんだ、立花？」

響はゆっくりと翼の方を見る。

そして、言う。

「余計なこと言わないでください。でないと私が危険な目に合いそうなので」

「ツ！あ、ああ…分かった」

響は虚ろな目で翼にそう告げたあと、響は終の隣に座る。
その目を見て翼は恐怖を感じたのであつた。

「（立花：お前も大変なんだな。常に監視役から命を狙われている恐怖…。私は体験したことはない。それほどの恐怖を立花は感じているのだろう）」

「まつたく、どうして土方スペシャルの良さがわからねえのか…」「分かりたくもない！」

「チツ。……にしても総悟、遅えな。いつもはこの時間帯に来てるんだが…」

そのとき、

ビチャビチャビチャビチャビ…

土方の頭から緑色の液体がかかつた。

「あつづう!!」

その勢いで土方はのたうち回る。

「いやあ、すいやせん土方さん
「ツ!」

その声を聴いてすぐに翼は後ろを振り向いた。
そこには、総悟がいた。

「総悟てめえ!」

「お茶をこぼしてしゃいやした。ほんとすいやせん。これ使つてくだ
せえ」

総悟は一枚のタオルを土方に渡した。

「おい。このタオルなんか湿つてるぞ?」

「使つた後なんで、当たり前でさあ」

「ちゃんと洗つたんだろうな?」

「もちろん、水で洗いやしたぜ」

土方はタオルで全身を拭く。

その時、都合よくある話が聞こえた。

「そういうやさ、さつき廁に行つたんだけど」

「お前さ、その話食事が終わつてから切り出すつもりだつただろ」

「まあそうなんだけど。そのときに手抜きタオルが一枚なくなつてた
んだよ」

「洗いに出したんじやねえのか?」

「いやそれがさ、それと同時に便器の水がなくなつててよ」

「……それと今の話がなんの関係があるんだ?」

「分かるだろ? なくなつて一枚のタオルと、流してもないのにない便
器の水。きっと誰かがやつたんだ」

「そんなのどうでもいいだろ。ほら、さつさと準備するぜ」

食堂で話すには下品な話だが、一同はそこで止まっていた。

「おい、もしかして、それって…」

土方が総悟の方を見るが、総悟はすでにいなかつた。
それで、全員はすべて察した。

「「「うわあああああああ!!!」」

大きな声を上げたことで視線が集中する。

「どうするこれ!?どうするこれ!?」

「どうでもいいからとにかく捨ててくれ!そして近づくな!」

「私、ちょっとトイレに…」

「わ、私も行つてくるとしよう!」

「こらあ!てめえらだけ逃げんな!」

「離せ土方!汚顔を近づけるな!」

「誰が汚顔だこらあ!」

「実際そうだろう!早く洗いにでもいけ!」

「そうですよ!そもそも汚いのは土方さんだけですから土方さんが逃げてもなんの意味もありませんよ!」

「てめえついに言つたな!よおし、おめえの顔もこのタオルで拭いてやる!」

「えつ?!ちよ、やめてください!!!あ

!!!!」

ちなみにもう少し静かにできんのか？」

「お前ら、食事くらいもう少し静かにできんのか？」
「すみません…」

近藤に怒られていた。

(総悟の場合)

あの後、響と翼は解放され、廊下を歩いていた。

「はあ～疲れた…」

「そうだな……。立花はこれからどうするんだ？」

「私はいつもどおり終さんのところにいます。部屋から出るのは終さんの許可が必要ですけど、部屋の中だったら基本的になにしても大丈夫、なんんですけど……」

「余計なことをすれば、命が危うい、か：」

「はい、最初の方は漫画とか読んでても全く怒られなかつたんですけど、突然あの恐ろしい笑顔でこっちを振り向いたとき、『あ、これはダメだ』って悟りました」

「私は交流が少ないから分からぬが、そんなに恐ろしいのか？ 齊藤の笑顔は」

「怖いですよそりやあ！ だつて不定的にあの笑顔ですよ！？ もう、耐えるので精いっぱいです…」

「そうか…。私はあのマヨネーズ地獄からいつ抜け出せるのかと今も思つてゐる…」

「…………」

「どちらがマシか、全くわからないな…」

「そうですね…」

二人はそういうが、二人は心の中で、齊藤と土方はまだマシだと思つてゐる。

何故なら…：

「お、おめえらじやねえか」

「沖田!!」

「沖田さん!!」

そう、目の前の男、沖田総悟に比べれば…

「沖田貴様！ よくもあんなものを持ってきてくれたな！」

「いやあ、元々土方さんの使つている専用の剣道着の中に入れようと思つてたんだが、あんな場面だつたからな。ちょうどよかつたから利用させてもらつたぜ」

「それはそれで問題だ！それにその割には自分から事を引き起こしていたではないか！」

「そうですよ！お茶をざばあー！つて！」

「……星座占いで、牡牛座の人は体に熱湯をかけると、今月運が0.1%あがるって言つてたからな」

「なんだその占いは!?しかも0.1%!?意味がないじゃないか！」

「よく考えてみろ。今日は一日だ。これを10日続ければ1%運が上

がるんだぜ」

「どつちにしろ意味ないじやないですかそれ!?」

「まあ、どうでもいいだろ。それじゃあ俺はこれから用事があるんな」

沖田は袋を持つてゐる手を肩にのつけた後、そこを立ち去ろうとするが、

「あの……それ、なにが入つてるんですか？」

響がその袋の中身に興味を持った。

「これが？これはあいつの飯だ」

「……雪音のか」

「そうだが？」

「雪音は無事なんだろうな？変なことはしてないだろうな？」

「当たり前でえ。俺だつて警察だからな」

「そうか…」

翼はもう、諦めていた。

あれから何度も元に戻そうと試みたが、すでにクリス——ゲロリス

の心は調教済み。

もう主従関係を定着させられていた。

「翼さん、元気出してください！」

「すまない、立花…。だが、仲間のあんな姿を見てしまったら…！」

「あー、俺はそろそろ行くぜ」

沖田が振り返つたその時、袋の中身が一つ落ちる。

そして、それを見た二人は

!!!???

絶句した。

あまりの衝撃に思考が固まってしまっていた。

「おい…」

「なんでえ？あ、落ちちまつた」

「なんだ、これは？」

「なにって、あいつの飯だ」

「こんなものを…食べさせる気か!?」

翼が怒鳴る。

彼女がここまで怒るのには理由がある。

それは…：

「これは…どこからどうみてもキャットフードじゃないか!!」

そう、沖田が落としたもの、それはキャットフードだ。
しかも缶詰タイプの。

「そうだが？」

「そうだが？ じゃないですよ！ まさか、クリスちゃんに食べさせる気じゃ…！」

「食へさせんじやねえよ」

卷之三

沖田は続ける。

「もう、食ってるよ」

その時の沖田の顔は、悪だつた。

その言葉を聞いた一人は書せめた

「クリスちやあああああああああん!!!」

二人は大急ぎで沖田の部屋に向かつた。

自分の仲間が人の食べ物じゃないものを食べさせられているという事実に驚愕し、仲間のためを思つた行動だった。

走り、走り、走つて。

沖田の部屋についた。

一人が扉を開けると、そこには…：

「んにゃ？」

案の定、ペット用皿で、しかもフォークやスプーンを使わずに食べていた。

元々クリスは食べ方が汚かつたが、今のゲロ里斯はもつと酷い。もはやただの猫だ。

「雪音え！ それは食べてはだめだあ！」

翼はゲロ里斯から食器を奪おうとするが、

「私の食事を奪わないでください！」

ゲロ里斯は翼に蹴りを喰らわせた。

「ぐはあ！」

「翼さん！？」

「アムアムアム…」

「クリスちゃん…」

壁に激突する翼。それを最初からなかつたように食事を始めるゲロ里斯。

「くつ、雪音を救う方法はないのか…!?」

「クリスちゃん、これは猫用のご飯だよ。私たちは人間だから食べないほうが…」

響は響らしく話し合いで解決しようと乗り出す。

「えつ、響ちゃん。名に言つてるんですか？ これは——

そのとき、ゲロリスが衝撃の言葉を放つ。

——私は猫です。猫の食事を吃るのは当たり前じやないです
か

「——ツ!!」

二人にとつて衝撃の言葉。

まさか、自分が猫だと思い込むようになつていたとは思いもしな
かつた。

「目を覚ませ雪音え！そもそも、人語を喋る猫などいないぞ！」

「私は特別だとご主人さまは言つてました。ご主人様の言葉に間違
などありません」

「沖田ああああああああ！」

「ご主人様には感謝しているのです。私を目覚めさせてくれて……
「雪音え！お前は一体沖田になにをされたのだああああああああ
!!!!??」

もう、手遅れだと勘づいていたが、まさかここまでとは思いもして

いなかつた。

そのとき…

「つ、 翼さん……」

響が、あることに気付いたのだ。

「なんだ、立花…」

「これ、見てください…」

響が持っていたのはすでに開けられているさつきのキャットフードの缶だった。

「それが、どうかしたのか？」

「これ、缶の後ろ…」

翼が缶の後ろに目を向けると…

そこには、こう書かれていたのだ。

「なんだこの味は!?」

「きび……!? これ本当に食べれるんですか!?」

思わず二人はゲロリスのほうを見る。

ゲロリスはこれをおいしそうに食べている。

「なになに…『お通コラボレーション缶』……。誰だお通!?」「そんなことよりこれ本当に大丈夫なんですか!? 絶対おいしくないでしょ!」

「私が知るか! そんなことより、沖田を探すぞ!」

「はい! 直談判しなくちゃいけませんよね!」

二人は走つて沖田を追いかけるのであつた。

そして、ゲロリスはとと言うと…

「あーおいしかつたです…。にしても…」

ゲロリスは空き缶を取る。

「（）主人…。なんで猫の私にこんなものを…」

ゲロリスは缶を見る。

小さい文字で書かれており、集中しないと見えないその文字は、こ

う書かれていた。

『キヤットフードに似せた感触！普段猫に食べさせている感触を味わえる！人間用』

その文字の大きさは味が書いてある文字の大きさと反比例して小さい。

初見の人は文字に集中が言つてこれを見逃す。

「ご主人様がこれを私に食べさせたのは…なにか意味があるはずです。それを考えないと…。……喉が渴いたな。水飲みましょう」

ゲロリスはペット用皿に入っている水を、舌を使つて飲むのであつた。

パトロール／散歩 再開の時

かぶき町。

ここに、パトカーに乗った一組の男女がいた。

「そつちはどうだ？」

「異常はない」

「そうか」

その二人組は【土方十四郎】と【風鳴翼】。

翼はシンフォギアを纏っている状態なので、青いローブとフードを身に着けている。

元々シンフォギアは目立つので、こちらの方がまだマシだ。服自体はダメだったが、間接的にならOKだつたらしい。

「パトロールとは…貴様らもまともなことをやるのだな」

「あつたりめえだ！このくらい普通だろ！」

「今まで普通じゃなかつたのだが？」

「ありやあいつらがおかしいだけだ」

「貴様も十分おかしいぞ…」

「なんか言つたか？」

「いや何も？」

パトカーをいつたん止めて、車内でその場所をグルグルと見て回る。

「そういえば…立花と雪音はどうしているのだろうか…」

「響つて奴の方は終がいるから大丈夫だろ。問題は総悟の方なんだよな…」

「もしかしたら…いや、絶対にかされているかも…」

「まあ気にしててもしようがねえ。あいつのあの行動は今に始まつた

「…」とじやないからな

「そう、だな…」

そうして、パトカーを動かしその場を去っていき、パトロールの続きをするのであつた。

（終&響）

二人は、街中を歩いていた。

響も翼同様、黄色いローブとフードをかぶっていた。

「…………」

「し、終さーん…………。ど、に向かっているんですか…？」

「…………」

終からの返答はない。

響はそれにより、さらに恐怖が生まれる。

「（ど、どこに連れてかれるんだろう…？土方さんはパトロールつて言つてたけど、もしかして！？私を路地裏で抹殺…！？）

と、普段考えることもないことを、響は考えてしまつていた。

恐怖は、普段の人を崩壊させるほどなのだ。

そして、終は足を止めた。

「？」

響が終が足を止めた方向を見ると、そこには…

【ゴートウーヘル】

……と書かれたコンビニだつた。

「…………」（ 。 ハ。 ）

翻訳すると『地獄に行け』である。

これを見ただけで嫌な予感がした響であつた。

「し、終さん…?」のコンビニ、本当に入るんですか…?」

終は何も言わずに入つていく。

響は、びくびくしながら入つていく。

見た目は普通のコンビニだ。

だが、恐怖が感情を支配している響には…

「（見た目普通のコンビニだけど…もしかしたら、この地下は拷問部屋とかになつてるんじや…!）」

と、怖い妄想を考えるようになつていた。

終は二人分の弁当を持つと、レジに向かつた。

「弁当、温めますか？」

店員に聞かれるが、終は喋らない。

「あのーお客様?
し、終さーん…?」

響も終を呼びかけるが、無反応。

こうしているうちにどんどんと人が並んでいく。

「……?これって…」

そこで、響はあることに気付く。

「ニ～…ニ～…」

「あ、これ、眠ってる…」

響のその言葉に、客や店員、皆が啞然としていた。

このあと、二人は無事弁当を変えました。

そして、温めかの質問は、『温めてください』と、響の言葉でなんと
かなりました。

「ハア……。疲れた…」

「……?」

響は、公園のベンチでお弁当を食べながら、そう呟くのであった。

ちなみに、

【ゴートウヘル】

「またか…誰だよ、こんないたずらする奴は、いい加減、経費を削減してでもここへんに監視カメラつけるべきかな…?」

このコンビニの店長は、周りを探すと、凸状態の文字の残りを見つける。

「ほんと、盗まれてないのが幸いだよ…」

小さい脚立を持つて、そこを登り、凸状態の文字を取り付け、場所を置き換えた。

【ヘーイ ドゥーコール】

「よし、これで大丈夫だな。……にしても、いつ見ても変だなあこの名前…」

この店長の言う通り、このコンビニのネーミングを考えた者はネーミングセンス最悪だろう。

所変わつて土方と翼。

「終と響は、そちらへんの公園で飯食つてるつてよ。今響から入つた」「わかった。では私たちもそろそろ昼^ご飯にしないか?」

「まあ待て。確かに腹が減つてるが、今日の予定じやここで総悟と落ち合う予定だ。総悟が来るまで待て」

「雪音…無事だといいのだが…」

「さあな。まああいつも女の扱いくらい慣れてるだろ。前にキヤバクラ（アーメ241話）で天才的なことしてたしな」

「キヤバクラ…。公務員だろ？キヤバクラなんてしてていいのか？」

「大丈夫だよ。どうせ次の回にはすべてなかつたことにされてるからよ」

「次の回…？」

「おつと。俺としたことが俺らしくない発言をしちまつた。さて、そろそろ目的の場所に行くぞ」

二人はパトカーを降りて、目的地まで向かって行つた。

「さて、あとはあいつが来るだけだ」

「そうだな」

「…いつものことだが、遅いな、あいつ。ちょっと連絡入れてみるか

⋮

土方は懐から無線機を取り出すと、沖田につないだ。

『土方さん？どうしやしたか？』

『総悟。お前今どこにいる？』

『…ちよいと買い物をしていて…すいやせん』

「おい、雪音は無事なんだろうな？」

翼は一人の会話に割り込んで、クリス——ゲロリスの心配をする。

『大丈夫だ。目立つようにはしねえよ』

『…それは逆に目立たないようになにかしているということか？』

『……まあそんなことはどうでもいい。土方さん。俺も今からそちらに向かいます』

「そうか。待つてゐるからな『あ・旦那』」

無線機越しから、『旦那』と言う声が聞こえた。

「あ、ツ?! そこにあいつがいるのか!？」

『土方さん。ちよいと切りやすぜ』

「おいちよ!――：切れちまつた』

「旦那、とは誰のことだ?』

「ああ…。万事屋の野郎だ。あいつが一緒にいると、大抵口クなこと
が起きやしねえ。俺にとつちや疫病神みたいなもんだ』

「…例えば?』

「そうだな…。例を挙げると、あいつは総悟と同じドS。あいつと一緒にいじつてきやがるんだ。まるで最初から打ち合わせでもしてい
たのかと思うほどシンクロしててな』

「つまり…沖田が二人いる、という解釈でいいか?』

「まあ…めんどくせえからそれでいい。とりあえず、どうする?』

「待つてゐしかなかろう』

「だよな…』

そうして、二人は黙々と弁当を食べ続けるのであつた。

銀時たちは、街中に出でていた。

「……」

「どうよ。かぶき町は？」

「いい、町ね‥。時代と背景があつてないけど」

「そんなのいつものことだよ」

「そうですよ。気にしててもしようがありません」

「これが当たり前アルよ」

「‥‥（時代を超えた、平行世界への移動‥。でも、普及しているのは現代の物‥。ほんと、ワケがわからないわ）」

時代が江戸、背景が現代の矛盾に、マリアは違和感しか感じられなかつた。

この世界の人間からしてはこれが普通なのだが、この違和感を感じられるのはマリアたちだけであろう。

マリアたちは今、かぶき町にいる。

マリアはこの世界を見るということで来たのだが、この恰好じや目立ちすぎる。

なので、白いローブとフードをかぶっている。

「私たちの世界じゃありえないことが、こんなにも‥」

「まあお前の世界がどんなんだか知らないが、ここならまだ道路交通法も制定されてないし、事故起こし放題だぜ」

「いや起こしちゃダメよ。ていうかなんであなた現代知識を持つてるの？」

「気にしちゃあいけねえぜ。‥‥‥そんなことより、ちゃんと大丈夫なんだろうな？昨日見たいにならないだろうな？」

（昨日）

「ああ、疲れたあ……」

「そうですね。でも、無事依頼達成できてよかつたじゃないですか」

「銃をバンバン撃たれたときには焦つたアルなあ」

「ほんと、肉盾マリアがいてくれて助かつたぜ」

「……今、私の名前のところで悪意を感じたんだけど？」

「気のせいだろ。……ところでよ。お前の頭の上のそれ……なんだ？」

「あ、それ僕も気になつてました」

「私もネ」

「頭……？」

マリアは自分の頭の上を見る。

そして、そこには信じられないものがあつた。

00:01:39

「なにこれ!?」

なんと、マリアの頭の上にはカウントがあつたのだ。
しかも、後一分。

「これいつからあつたの!?」

「いや…あと24時間って時から」

「そのときからありましたね」

「なんで言つてくれなかつたの!?」

「いや、どうせいつかは気づくだろうと思つてたんだけどよ。あまりにも気づかなすぎたから、さすがに可哀そうと思って教えて教えたんだが…」

「それ、一体何アルか?」

こうしている間にも、時間はもう00:00:48になつていた。

「これ…爆発とかするんじゃねえか?」

「爆発!」

「今日は爆発オチアルか」

「爆発オチ!?いやダメでしょ! ていうかオチ言うなし!」

「おい…あと二十秒だぜ?」

00:00:19.....00:00:18.....00:00:17:

『『』.....』』

ゆつくりと、時間が経過していく。
そして、残り三秒。

「来た!!」

ついに、時間がきた。

そのとき、マリアの体から煙が放たれる。

「キヤア!!」

「ウワア！」

「ドワアアア！」

「何アルか!? 何アルか!?!」

急なことに混乱する一同。

マリアの体から急に煙が放たれたことにより、ゲホゲホ！と聞こえる。

「お前の体どうなつてんだよ!?」

「なんで煙が出るんですか!? それにこれ、催涙効果もありますよ!?」

「ヴヴエ!! 目に、目に入つたアルウウウウウウ!!」

「ゲホツ！ ゲホツ！ 知らないわよ！ こんなの、なかつたはずよ!?」

今の状態を言葉で表すのなら、死屍累々。

最早地獄絵図と化している万事屋。

のたうち回り、泡を吹き、悲鳴を上げる。

そんな地獄の状態が一分ほど続いた。

そして、部屋を支配していた催涙ガスがようやく消える。

「はあー、はあー…。窓開けて、ようやくかよ…」

銀時がそう呟く。

ガスの量がなかなか多かつたため、外に出るのに時間がかかった。

「大丈夫ですか？三人とも？」

「私は大丈夫ネ」

俺もだ。
マリアは?

三人はマリアの方向を見る
そして、固まる。

「はあ……。なんなのよあれ……」

一マリア

「どうしたの？銀さん？」

「お前……そんなのが得意だつたんだな」

卷之三

マリアは急なことで思考が停止した。
だが、すぐにその意味を理解するになる。

マリアは自分の体に違和感を覚えた。

恐る恐る
自分の体を見ると

全裸、だつた。

マリアはすぐさま両手で秘部を隠してソファーの後ろでうずくまる。

その間約0・5秒。

早くても遅すぎたため、銀時たちにはばっかり見えていた。

その証拠に、銀時を鼻血を垂らし、神楽は侮辱の目で見ており、新八に至つては鼻血を出して気絶している。

「～～～～ッ//／＼／＼！！」

マリアは最早涙目だつた。

当たり前だろう。なにせ合つて間もない男性に自分の秘部を見られてしまつたのだから。

そこで、銀時はある行動に出た。
出でしまつた。

「ちよつと、トイレ行つてくるわ」
「待ちなさい！」

マリアはすぐさま止めた。

「な、なんだよ…。俺はお前の裸を見ないように、あえて違う場所に行こうとしてるんだぜ？止める理由なんてないだろ」

「この…」

「ああ？」

「この状況で……トイレに行く理由なんて…たつた一つしかないで
しょう…！」

「……」

そう、たつた一つしかない。

マリアは性経験は全くないが、知識くらいはある。

故に、銀時がなんのためにトイレに行くのか理解できた。

「要するに、銀ちゃんはオ○○ーしに行くということあるか？」

誰も言わなかつたことを、神楽が言つた。

言つてしまつた。

まあ、実際はそうである。

マリアは自分の裸でヌかれたくない。ていうか無理だ。

そこで、銀時が吹つ切れた。

「ああその通りだよ!!なんだよ!!オ○ツたらダメだつてのか!?ええ
!?

「駄目に決まつてるでしょ！第一、私のことも少しさは考えてよ！」

「はつ！だつたら俺のことも考えやがれ！第一？ここに泊めてやつて
るのはどこの誰かなあ!?【ピ――】をしようとしねえんだ！そ
れくらいいいだろ！」

「あなたよくこんな状況でそんな最低なことが言えるわね！」

「あんなあ！お前の世界ではダメだと思うがな、この世界じゃ例えば
街中で【ピ――】とか【ピ――】とか、拳句の果てに
【ピ――】と言つても許される世界なんだ

よ!!!」

「いやダメでしょ!?どんな世界なのよ!?理解に苦しむわ!!」

「…………」

一方神楽は、ソファーアー越しに送られている醜い争いを白い目で見て
いた。

もう見ていらなくなつた神楽は、新八を起こした。

「おーい新八、起きろー」

「……はつ！父上！僕も今そつちに……つて、あれ？」

「どこに行つてたネ。たかが裸で死ぬなよ」

「神楽ちゃん！あれ……なにこの状況？」

新八は銀時の背中が見える場所で起こされていた。
だが、声は大きいので内容ははつきりと聞こえる。

「なんでこんなことに……ん？」

「どうしたアルか？新八？」

「いやあの…マリアさんの頭の上…、なにか書いてるんだけど…」

そこには――こう書かれていた。

『初回限定特典！72時間LINKER効果持続！終わりにプレゼントとして催涙ガスをプレゼント♪』

「…………」「

そして…

「なんでだああああああああああああああ
!!!!??？」

新八の、ツツコミターム。

「ツ??」

新八のツツコミに一人も争いを止める。

「なんだよこれ!? 初回限定特典!? LINKE Rってなに!? ていうかプレゼントで催涙ガスプレゼントってどんな嫌がらせだよ!? しかも最後に音符ついてるし! それにW! これ明らかに僕たちのこと嘲笑つてるでしょ!」

「ど、どうしたの? 急に…?」

「おい、マリア。お前の上…」

「上? ……って、なにこれ!」

二人もようやく上の文字に気が付いたようだ。

「初回限定特典LINKE R持続つて……それにプレゼント。これもうアンラッキーよ!」

「たち悪いプレゼントだなあ…」

「ところで、そのLINKE Rつてのはなんなんですか?」

「ああ。これはね、私がこの鎧を纏うために必要な薬なの。元々この鎧は適合率が高くないと纏えないとから、薬で補つているのよ」

「つまり、パチモンつてことか」

「いやな言い方だけど。認めざる負えないわね」

「パチツモン、パチツモン、パチツモン」

「ねえ、殴つていいかしら?」

マリアがパチモン装者と認めると、銀時が煽り始めた。

「銀さん。やめてあげてください。とりあえず、なにか身を隠すものをつけた方がいいですよ」

「つつてもなあ…。特にいいものなんてないしなあ…」

……あのー

「あ、ナレーターさん。どうしたんですか？」

よかつたら、これ使つてください

「これは…服、なのかな？」

本来装者たちはこの世界じや服を着れない仕様になつてますが、こういうフード付きローブとかなら大丈夫ですよ。

「ねえ？その言い方だと、あなた。あの龍や狐と何か関係があるのね？」

あ、しまつた

「今聞こえたわよ！しまつたつて！関係があつたのね！」

僕たちナレーターは、ただあなたたちを観察できればいいのです。

「銀さん！新八さん！神楽ちゃん！悪いけど、私の代わりにそいつを捕まえてくれないかしら？」

「は？やだよ」

「……もう一度、言ってくれないかしら？」

「だから、やだよって」

「な、なんで!?」

「いやだつてよ。俺ら、この依頼でかなりもらつてるだぜ？毎日口座確認しているけど、かなり入つててさ。そんな依頼者様を捕まえるなんて…俺にはできねえなあ」

「くつ！じゃあ二人は!?」

「無理ですね。こんないい依頼、他にないですから」「そうアル。絶対無理ネ」

「くッ、三人とも、心を掴まれてる…！」

と、いうわけで、私はこれからもステルス状態で皆さんを観察しています。それではそれでは

「あつ、待ちなさいー……どこにいるの…!」

私は近くにいますが、ステルス機能が起動している以上、見つけることは不可能ですよ。

ましてや、触ることもね。

「いいから、とりあえずこれつけろよ」

「そうアル。裸じやパツとしないネ」

「あ、ありがとう…」

マリアは私があげたローブを身に纏つた。

「とりあえず…。大丈夫ね」

「でも、中は裸なんだろ？ マジモンも変態だぜ？ その状態で外で風なんて吹いてみる。お前の【ピ——】が露出して一瞬で豚箱行きだぜ？」

「そのときは私たちとは無関係にさせてもらうからな？」

「すみませんが、我慢してください」

このとき、マリアは『このクズ野郎ども…!』と、心のどこかで思つただろう。

だが、心の防衛本能がそうは思わせない。もつと柔らかに銀時たちを侮辱したはずだ。

「(とりあえず、今はあのナレーターたちは保留ね) ま、まあいいとして…。これからどうすれば【ガララララッ!!】…? 誰か来たわよ?」

「この強引な開け方は!!」

「バ、ババア!!」

そこから現れたのは、三人の女性。

黒い浴衣を着たおばあさん。
【お登勢】
ブサメンに猫耳がついた女。
【キヤサリン】

本来の三人ならこうなのだが、今回の三人は、いつもとは違つた。

「ていうか、なんで武装してんだよ!?」「あたつりめえだ!! てめえら真昼間からうるせえんだよ! 一回お灸を据えてやらなきやなあ!!」

「オカゲデコッチモ大変ナンダヨ!!」

「銀時様。お二人の怒りゲージはともにMaxです」

「ありがとうね!?でもいるないよそんな情報!!」

「つーウケで覚悟しやがれええ!!」

お登勢は箒を銀時に振るおうとする。

「お待ちください。お登勢様」

「あつ!? どうしたんだいたま!? 止めるつてのなら容赦しないよ!!」

「こちらの女性を見てください」

たまはマリアに手を向ける。

「あつ? そういうえば…あんた誰だい?」

「イツモノメンバージャネエナ」

「あ。わ、私の名前はマリア。マリア・カデンツアヴナ・イヴと言いま
す」

「名前からして、外人か天人か。ずいぶんと日本語がうまいんだね」

「い、いえ…」

「それで。こいつがどうかしたのかい?」

「見てください」

たまはマリアを銀時とお登勢の中間に移動し、お登勢の方に向け
た。

そして、たまは驚きの行動に出たのだ。

「これを

「ツ??」

「ツ!!」

「ツ//!!」

「!!??」

なんと、マリアのローブを下から上に持ち上げたのだ。

マリアの下はもちろん裸。つまり、二人にマリアの裸をたまは見せたのだ。

たまはマリアの背中から上げたので、銀時たちからは見えにくかつたが、それでもすごくヤバイ。

「いやああああああああああああああああああああ!!!!!!」

マリア、本日二度目の絶叫。
ローブをすぐさま奪つてうずくまる。

「……」

「と、このように、この女性——マリア様は、このローブ以外何一つ身に着けていません。説明をお願いしたいのですが、よろしいでしょうか?
?銀時様」

「いやいやいや!!たまさん!!なんでローブ上げたんですか!?」

そこに新八のツッコミが入る。

「マリア様が服を着ていらないという確証を得るためです。サー・モグラ
ファイで確認したところ、マリア様の体温が銀時様やお登勢様より低
かつたので、もしかしたらローブ以外着ていないのではと言う仮説を
立てたのです」

「それでも実行に移すのはどうかと思いますけど!!?」

そして…

「銀時いいいいいいいいいいいい!!」

お登勢も、キレた。

「てめえ!! ついに犯罪に手を染めやがったな!!」

「ちげえ！ 誤解だよ!!」

「イツカハ犯罪ニ手ヲ染メルト思ツテイマシタガ、マサカコンナニモ早クコンナ時ガ来ルトハ思ツテマセンデシタヨ!!」

「ちょ!! キヤサリンさん!? 本当に誤解ですか!!」

「そうね!! マリアは自分から裸になつただけネ!!」

「それはそれで駄目だろうが!! そんな変態置いとくんじやねえ!!」「ちょ!! 私は自分から脱いだわけでもないしそもそも変態じやありますせん!!」

「皆さん、落ち着いてください」

「「「「「元はと言えばお前／あんた／たまさんが原因でしょ／だろ！」」」」

「あの後、たしかどうなつたんだつけ？」

「あのあと、なんとか事情説明して、落ち着いたじやないですか」

「でも、なんで今マリアはその鎧纏えてるアルか？ 昨日は結局裸で寝たのに」

「思い出させないで…。朝起きたら枕元にLINKERがあつたのよ。打つたら頭の上のタイマーが復活して、12時間つて出たわ」

「それじゃあ、12時間後にまた全裸になるってことじやないです!?」

「そもそも、そのリンクアートの、誰が置いたね？」

「たぶん、あのナレーターでしょうね」

ギクツ。

バレた。まあいいか

「とりあえず、今日はここでなにをするんだつけ？」

「買い出しだよ。イチゴ牛乳も切れてきてるしな」

「えーと、あとは…」

そのとき、一同はあることに気がついた。

「なあ…なんで人の目線がアツチ向いてんだ？」

銀時が指指した方向にいる人々は、全員ある方向を向いていた。

「なにがあるのかしら？」

「行つてみるアル！」

四人は走つて、それを見た。

それは：

「あ…旦那」

沖田と…

そして、その下。

「あ、マリアア…久しぶりイ」

四つん這いになり、首を首輪と鎖でつながれて、沖田にまたがれているクリス——ゲロリスの姿だった。

しかも、恰好はロープを纏わないシンフォギア状態。

そして、それを見たマリアは…：

「クリスウウウウウウウウウウウウウウ
!!!!!!!」

仲間のありえない姿を見て、心の底から叫んだのであつた。

桂、またもややらかす。

「…………む……？」

桂は、目を覚ました。

「ここは……？」

「あ、起きたわね」

状況が理解できていない桂に、白衣の女性が話しかける。

「あなたは……？」

「私はこのリディアン音楽院の保険室の先生よ」

「リディアン……？」

「……記憶が混乱しているのかしら？ もしくはただリディアンを知らないだけ？」

「すまないが、リディアンなどと言う場所は聞いたことがない……。ところで、俺の体を拘束していたはずの拘束具はどうしたのだ？ それに、何故服が変わっているのだ？」

「順を追つて説明するわね」

まず、桂はあの後保健室に運び込まれた後、拘束具を外そうとしたが、どうしても外れなかつた。だから、仕方なく鉄の部分をペンチなどを活用し、桂がこれ以上怪我をしないよう慎重に事を進めたという。

「それと、あなたの服が変わっているのは一応怪我人だからね。ところどころ怪我してたのよ？ その証拠絆創膏とかが張つてあるでしょ？」

「確かに、その通りだ……？」

「さて、私からは以上よ。あとは……」

そのとき、黒服の男たちが保健室に入つてくる。
それを見て、即座に戦闘態勢に入る桂。

「ツ！？貴様ら、何者だ！？」

「落ち着いてください。私たちはあなたに危害を加えるつもりはありません。ご存じないでしようが、前日のあなたの行動は世間にニュースに公表されました。ですので、その時のこと詳しく述べたいのです」

「ご協力、ありがとうございました」

「いえいえ」

保健室の先生と、一人の黒服の男がそう言葉を交えると、先生は部屋から出て行つた。

「それでは、行きましょう。一応怪我人ですので、ゆっくりと、な」「わかりました」

二人の黒服が桂を起こした。

「（くツ：今は万全の状態ではない…。隙を見て逃げ出すしかないか…）」

今まで何度も脱獄を繰り返してきた桂。

この程度、余裕で脱走できるだろうと考えていた。

外に出ると、そこには数台の黒い車が止まつっていた。

そして、桂が校舎の方に目を向けると、たくさんの生徒がこちらを見ているのが見えた。

「……」

「どうしたんだ？」

「本当にこの人数での車数だけで来たのか？」

どうでもいいことに桂は疑問を持った。
そのことに黒服は少しだけ戸惑う。

「ああ…別に問題はないぞ？一人くらい追加でも」

「だが、それだとお主らが大変だろう？どうだろう？俺も一応運転で
きるし車を持つている」

「はあ！」

黒服は間抜けな声をだした。

なにせ、車を持っている、と桂は言つたのだ。周りを見渡すが自分たち以外の車はどこにもない。

「どこにもないだろ」

「いいやある。ちょっと待つてろ」

桂は二人の男の手から離れ、違う場所へと向かつて行つた。
そして、桂はある動作をした。

その動作とは「車に乗る動作」だ。

それをした後、桂はなにかに乗つているように宙に浮いていた。

『『『『?????』』』

!!!!!!

そのありえない状態に黒服どころか遠巻きに見ていた生徒たちも
絶句していた。

「えつ?!いや、え、はあ!!?」

これにはさすがに男たちも驚きを隠せない。

「どうした。乗らんのか黒服たちよ」

「いや乗るつて何に!!」

「決まっておろう。俺の守護霊【カローラじゃないカツーラだ】にだ

「守護霊!!?」

守護霊と聞いて絶句する男たち。
現に、桂は浮いている。

そのとき——不思議なことが起こつた。

【桂小太郎の守護霊】

「なにこれ!!?」

謎の解析画面が現れた。

【以前、交通事故に遭つた際彼の魂は真つ二つに割れ、一方はカローラへ入り、もう片方は地獄へ向かうがカローラで体まで送つてもらい事なきを得た】（丸コピ）

「事なき得てないだろこれ?!ていうか丸コピってなにから丸コピしたんだよ!?

「さて、それでは行くとしよう。それでは！」

桂のカローラは走り出した。

一同がポカン、としていると、一人がようやく現実に戻る。

「逃げられたぞ!!!」

「あっ、しまった!!」

「すぐに追え!!」

黒服たちはすぐに車に乗り込む。

桂のカローラはもうそろそろ正門から出ようとしている。

そのとき――とてつもないことがおこつた

ブロロロロロ!!!

「ぐはああああああああああああああああああ!!!!!!」

ちょうど、そのとき横からトラックが通り過ぎ、桂のカローラと吹っ飛ばした。

「――ええええええええええええ!!!!!!??」

そのころS・O・N・Gでは、先ほどの映像をすべて見ていた一同は固まつたままだつた。

「…………しゆ、守護靈…」

「そんなものが実在して いたとは…驚きなのデス…」

この二人は【月読調】と【暁切歌】。二人は響たち同様のシンフォギア装者。

今日はこのこともあり学校はお休みだ。

「なんてことだ…。こんな、想定外だ…」
「想定できることではないと思ひますが…」

その通り。

誰がこの世界で車カローラの守護靈に乗つて交通事故に遭う人間などいるだろうか？
いるわけがない。

「彼の搜索は？」

「リディアンの生徒たちが見た先ほどのことの機密事項にして、書類を書いてもらつていると同時にやつています」
「そうか…」

「あの…」

そのとき、未来が弦十郎に問いかけた。

「あの人、大丈夫ですかね？」

「分からん…。大体、どこに吹っ飛ばされたのかすら不明な状態だ。一体、あの世界はなんなんだ…？」

ジャスタウエイ。FFR。守護霊。この世界じや絶対にありえないことを桂たちは何度もしてかしていた。

「メデイアが桂くんのことについてが探つてているという情報もあるし、これ以上彼をこの世界に干渉させたらなんらかの影響が出始めるだろう」

「トラブルしか呼ばない人…トラブルメーカー？」

「本当に迷惑なのデス!!」

「…………」

「未来君？桂くんのことが心配なのか？」

「はい……。事故に遭つたこともありますが、やつぱり響たちがどうしているのか…？」

「…………」

ちなみに、弦十郎はまだあの映像のことを未来に伝えていない。

彼女は民間協力者だが、そもそも親友の全裸姿が映し出されていたとなればどんな風になるか想像がつかない。

そのとき……。

「司令!!」

一人の職員が勢いよく司令室に入ってきた。

「どうした!?」

「桂小太郎を見つけました!!」

「なんだと!!」

その急な報告にざわつく司令室。

弦十郎は周りを落ち着かせ、その職員に話を聞く。

「それで、どこで見つかったんだ?」

「……言わなきや、ダメですか?」

「どうした? なにがあるのか?」

「……桂が見つかった場所は……」

あまりの衝撃的な内容に、再び硬直する一同。
そして、弦十郎が動く。

「待て。……頭が混乱しているが……。つまり、桂くんはここで見つかったということなのか？」

「…………はい」

沈黙が訪れる。

まさか、自分から逃げ出した場所にまた戻つて来るのは思っていなかつただろう。

「どこにいる？」
「食堂です」

何故そんなところにいるのだろうか？

そんな疑問を一回振り払い、弦十郎たちは食堂へ向かうのであつた。

場所は変わり、食堂の扉の前。
弦十郎は自動ドアの扉を開けた。

そこには…

「むッ!? 貴様ら、何故ここに!!?」

そこには、エプロンをつけてなにかを鍋で煮込んでいる桂の姿があつた。

桂は弦十郎たちの登場に心底驚いている様子だつた。

「すまないが、それはこちらのセリフだ…。ここは俺たちの本部。昨日君がいたところだぞ」????

「な、なんだとおおおおおおおおお!!!!」

!!!!

桂の驚きっぷりに、全員が思つた。

「あ、これ気づいてなかつたな」と。

「自分が逃げた場所を忘れて、しかも自分から戻つて来るとか…バカにもほどがあるデスよ」

「黙れ金髪の女子おなご！俺の勘が言つているぞ!! 貴様だつてバカだらう！」

「なつ!?お前みたいな明らかにバカとそのバカの推測だけでアタシをバカ扱いするなデス!!」

「はッ!! 小さいときパパから教わらなかつたのか!? バカと言つた方がバカだと!」

「それはお前も同じデス!! お前こそ、親に教わらなかつたのデスか!?」

「……それで、貴様らは一体なにしにここへ?」

「話を聞けデス!!」

途中から完全に話を変えた桂。その表情に焦りは見られない。切歌は調が落ち着かせた。

「それはこちらのセリフだ…。それに、何を作つてているのだ?」

「豚汁だ。出汁が聞いてうまいぞ? せつかくだから食べていくか?」

「その食材、どうせ全部うちの食材じや…」

藤堺の言葉を無視して桂はお椀に豚汁をよそる。
さきほどまでの動搖がまるで嘘のように落ち着いている。

「ほら、食え」

人数分——8人分の豚汁を机に置いた桂。

「これ…一つ多くないか?」

「俺も食うからな」

「…そうか」

弦十郎はこうでもしないと話が進まないと想い、席に座った。それを見て次々に席に座つていく一同。

「いただきます」

いただきますをして、豚汁に手を付ける。

「デデエス!?なんデスかこの豚汁は!?とてつもなくおいしいのデス!
!」

「確かに…なんだろう、これ?」

「本当だ…元氣ができるよ」

「なにかしら?この味…?」

「今までこんな味、食べたことがない」

「これ、和食にも合いますよ」

桂が作つた豚汁は絶賛されている。

皆が豚汁に浸つてゐるが、弦十郎は桂に話がある。だから一口飲んだあと、桂に問いかける。

「桂君。君に聞きたいことがある」

「なんだ?俺に言えることないいぞ?」

「君は何故ここから逃亡したのだ？」

「……それを聞く前に、一つ確約してほしいことがある」

「なんだ？」

「俺がこここの食材を勝手に使つたことはチヤラにしてくれ」

「あ、ああ…そのくらいは別にいい」

予想の斜め上の確約に戸惑う弦十郎だったが、これくらいなら別になんの問題もない。

「すまないな。俺がここから逃げ出した理由は、この場所のことを知るためだ。訳も分からぬ場所に飛ばされたらまず、情報収集が大事だからな」

「それ以前にまずわからない場所に飛ばされたら困惑すると思うのですが…」

「それは三流のすることだ」

「桂君…。情報を収集したいのなら、俺たちが交換でしていたのだが…」

「よくよく考えてみろ。訳の分からぬ組織の場所にいたのだぞ？ そいつらが信用できるかすら怪しい状況で、逃げるという選択肢が消えると思つていてるのか？」

「そうだったな…。君にとつては俺たちは不確定な存在だった」

弦十郎は桂に軽く頭を下げる。

「その通りだ。それにその体格、どこぞのゴリラを思い出させる」

「そのゴリラって…」

桂の言う『ゴリラ』は聞き覚えと見覚えがあつた。

「近藤勲だ。どうせ貴様もあいつと同じようにストーカー行為や全裸で料理をしていたりしているんじゃないか？」

「ストーカー行為!？」

「全裸で料理!?」

「……桂さん。司令はそんなことをする人間ではありませんよ。ただ体格などが似て いるだけではないですか」

緒川が不満そうな顔で桂にそう言つた。

弦十郎はS・O・N・Gの面々からの信頼は厚い。
だから、怒つてくれる人がいる。

「そうですよ。弦十郎さんはそんな人じゃありませんよ」

「その勲つて奴がどれだけ最低なヤツかはわかりませんデスが」「司令はそんなこと絶対にしない……」

「…………そ、うか。すまなかつたな。弦十郎殿。このように、人のために怒つてくれる人の上に立つ人間が、悪いヤツなわけがないからな」

桂が弦十郎を呼ぶ言い方が貴様、から【弦十郎殿】に変わつた。
これは、桂が自分たちを信用してくれたのではないだろうか、とい
う一種の希望を弦十郎は持つた。

「……理解してくれて、感謝する」

「それはこちらも同じさ。最初会つた時、俺は刀を弦十郎殿に向けた。
そうしたにも関わらず、紳士的に対応してくれていたではないか」

さつきの緊迫したムードから一転、ほのぼのとした雰囲気になつ
た。

「さて、まず俺のことについて話すとしよう。知つているようだが、俺の名前は【桂小太郎】だ」

「【風鳴弦十郎】だ。よろしく頼む」

二人は硬い握手をする。

「お互いの理解ができてよかつたですね」

「桂くんが元の世界に戻れるよう、俺たちも精いっぱい協力しよう」

「…………」

だが、桂は気まずそうな顔をしていた。

「どうしたんだ？」

「いや……協力してくれるのはありがたいことこの上ないのだが……一つ聞こう。何故弦十郎殿はそんな優しい性格をしておきながらこのような仕事をやり始めたのだ？」

全員の頭の上に？マークが浮かび上がる。
桂の質問の意図がわからない。

「どういうことだ？」

「弦十郎殿は寛大な男だ。もつとマシな職業に就けているはずだろう。だから、弦十郎殿がこの仕事をやっている意味が分からぬ」「すまないが、俺も君が何を言っているのかが、理解できていない。一体俺たちがなんの仕事をやっていると思つているんだ？」

「何つて――

——風俗店だろ?」

「「「…………は?」」

「「「…………」」

「あの龍と狐の天人が言つていたぞ。あの信号機色の三人トリオは風俗店の看板娘だと」

急な意味不明な桂の言葉に、素つ頓狂な声を出す三人。
そして、四人は思い出した。

あの龍と狐が、桂に三人のことなんと言つたのか……

『あの子たちは…………風俗店の看板娘さんですから』

そう。こういつたのだ。

桂の勘違いは——勘違いと言うより、あの二人の策略だつたかも——は続いていた。

この後、桂の知識の訂正、そしてそのことについて未来からすごい勢いで来る質問に、苦労する一同であった。

そのころ、シンフォギア世界では……3 前半

前回、桂と和解したS・O・N・Gの面々は食堂で話し合っていた。

「なるほど…つまり、あの天人たちは嘘をついていたと…」「そういう訳だ」

シンフォギア装者を今まで彼らのせいで風俗店の店員としてしか考えてなかつた桂。

「では、彼女らは一体なんなのだ？」

「む……。これはこの世界では最高機密に当たることだ。だが、今はこれは君らの世界も関係していることになる。特別に、この世界の住人には、もちろん、君の世界の住人にも話さないと約束するならば、話そう」

「司令！いいんですか!?」

「言つただろう。これは桂君の世界も関係しているのだ。少しでも情報をお共有した方がいい」

「…なるほど。では聞かせてもらうか。弦十郎殿」

「分かった」

それから弦十郎は桂にシンフォギアやノイズのことを説明した。

「なるほど…。人を炭に変える怪物、ノイズ。そしてそれに唯一対抗できる存在、それがあの女子が纏つていたものか…。てつくり、プロキュアの恰好がさらにいやらしくなつたものかと思つていた」「決して!!響たちはそんなのじやありませんから!」

さきほどの話を聞いて一度精神的に来て気絶していた未来がようやく復活した。

「調…結局風俗店とは一体なんなのデスか？」

「切ちゃんは知らなくていいよ」

「デエス…」

「金髪の女子。風俗店と言うのはな 「言うな！」 ゲフウ！」

無垢な切歌にそういうことを教えたくない調は教えようととした桂に鉄拳を喰らわせた。

「な、なにをするのだ!?」

「そういうのは教えないでいいから」

「そうか…。だが今のは痛かつたぞ！」

「それはごめん」

「ならば許そう」

「軽いな…」

桂は再び席に座り、話を続ける。

「悪いが、そんな怪物のことは見たことも聞いたこともないな」

「そうか…。だが、まだ出現していない可能性はある」

「なるほど。では弦十郎殿。なにがあつたら俺に言つてくれ。できる限り、力になろう」

「感謝する」

二人の話が終わると――

「あの、少しいいですか？」

緒川が桂に質問をした。

「なんだ?えーと…忍者殿」

「緒川です。実は、さつきあなたが使っていた出汁のことを見たいのですが…」

「ああ！確かに、あれ、すごく気になりますよね」

「確かに…。あんな味、今まで食べたことなかつたわよね」

「とつても美味しかつたのデス！」

「ぜひ教えてほしい…。できるのならそれを使って今度皆にみそ汁を作つてあげたい…」

「じゃあ私は響になにか作つてあげようかな？」

「あの出汁のことか？まあ、別に隠す必要などないからな」

そういう桂は鍋の方へと向かつて行つた。

そして、お玉ですくい上げたのは…

「「「「「え？」」」」

皆、頭が空に――思考が停止した。

とくに弦十郎がそうなつていることに驚きだろう。

なにせ、桂がお玉で取つた物は…

「この、【ジャスタウエイ】だ」

それは、あのとき爆発物として画面に映し出されていたものだつた
から…。

それに一番に反応したのは…

「うわあああああああああ!!!!」

藤堺と友里だ。

二人はすぐさまトイレに向かおうとするが…。

「ちょ!? 藤堺さん!?

「あおいさんも！どうしたんですか!?

切歌と調が二人を止める。いや、止めてしまった。

「切歌ちゃん離してくれ！」

「すぐに食べたものを吐き出さないと！」

「いつたいなにがどうなつてるんデスか!?

「どうしてそんなに焦つてるの?」

「二人は知らないだろうけど！」

「あれは……」

「爆発物だ／よ!!」

「「…え?」」

二人の回答に、三人は再び思考が停止した。
そして、真っ先に動いたのは未来だった。

「ちょっと桂さん!? どういうことですか!? 爆発物つて!?
「ん? その通りだぞ? ジャスタウエイは爆発するが「なんでもものを食べさせたんですか!」

未来は桂の襟を掴む。

「安心しろ女子よ。命の危険はない。それに俺の世界じや、一家に一個、ジャスタウエイと言わわれているぞ?」
「なんで爆発物が一家に一個あるんですか!?」

「いや、実際市販されているぞ？」

「爆発物が市販されてるってどういうことですか!? 大丈夫なんですか
その世界!？」

「あれ? でもあの時、沖田つて言う男の人、結構驚いてましたよね? 市販されているのなら、どうしてあんなに驚いていたんですか?」

「それもそうだな。それにあの男性も、あれを渡したらあの狐と龍たちを見逃していた。市販されているのなら交渉材料としては意味をなさないと思うのだが…」

ちなみに、緒川と弦十郎は平然としていた。

「ちょ! 緒川さん! 弦十郎さん! どうしてあなたたちそんなに平気なんですか! 爆発物の出汁を飲まされたっていうのに!」

「いや: 普通に考えてみれば、爆発物の出汁を飲んだところで体内で爆発するワケでもない。それに桂くんだつて同じものを口に入れていたじゃないか。つまりは本人が安全を保障しているからこそできる芸当だと思つてな」

「だからつて:」

「流石は弦十郎殿だ。ついでに緒川殿も」

「ついで:」

「ちなみに、今の疑問だが、従来のジャスタウエイは、手が下に下がっているのだが、あの映像のジャスタウエイは手が上に上がつていただろう?」

「そういえば: そんな気も:」

「そこまで目は言つてはいなかつたが、一応録画している映像があるので、それさえ見れば:」

「実は、その形違ひのジャスタウエイは、従来のジャスタウエイの出汁より、さらに濃厚で旨味成分であるグルタミン酸がかつおだしや昆布だしの数億倍取れる世界でたつた10個しか販売されていない長希少品だ」

「10個!?」

「なるほど…。道理で」

「グルタミン酸が数億倍つて…どんな美味になるんでしょうね?」

「噂じゃ、ある人物がその出汁でできた蕎麦つゆを飲んだ瞬間、あまりの旨さに服が一瞬にして弾け飛んだらしい」

「どんな味だよ!?」ていうか食べたら服が弾け飛ぶってどういう節理?どここの漫画だよ!」

今まで沈黙していた藤堺がツッコんだ、
ちなみに、あまりの旨さに服が弾け飛んだは【食○のソーマ】である。

「あまりのおいしさに服が弾け飛んだ…。どんな味なのデしようか?
食べてみたいデス」

「切ちゃん…。食べれば全裸になっちゃうんだよ?」

「しかも、その旨さにより服だけではなく、体の不純物が一掃されたら
しい」

「それもう食べ物じゃないだろ!」

「しかもその不純物の中に体毛が含まれていてな…。産毛や腋毛、す
ね毛、しかも髪の毛までもが一掃されてしまつてな」

「それ…一時の幸せと引き換えに永遠の地獄を味わう類たぐいのものじやないのか?」

「ああ…あの時は大変だった。おかげで服を新調しなくてはならなか
かつたぞ」

「いやそれあんたの話だつたんかい!!」

まさかの噂の人物が桂本人だった。

噂と言うより体験談だつた。

それには全員がズツコケた。

「た、体験談だつたとは…」

「じゃあ、なんで髪の毛があるんですか…?」

「いやあ、さすがに毛根までは消滅していなかつたので、なんとか生えてきた次第だ。服の件で幾松殿に迷惑をかけてしまつた」

「幾松？」

「ああ。ラーメン屋の店主でな。そこの蕎麦はうまいのだ」「なんでラーメン屋で蕎麦食つてんだよ!? ていうかそこの店主もよく作つてくれたな蕎麦！」

「かなり面識があるからな」

藤堺と桂のボケとツッコミを一同が見ている中――

「む？ 通信が入つた」

弦十郎の無線機に通信が入つた。

相手は同じに S・O・N・G の職員。

「どうした？」

『司令。例の映像が再び流れ始めました』

その言葉を聞き驚愕する一同。

「それは本当か!?」

『はい！』

「そうと決まれば」

『早速司令室にゴーなのデス！』

皆は急いで走り、司令室へと到着する。

『第三話。四人目の装者現り、交通事故に遭う…………でしたが』

「「「「「？」」」」

『やつぱ延期して、違うヤツやりまーす』

「ええええ??
!!」

まさかの趣旨変更に驚愕する一同。

もしこれが本物のアニメなどだつたら炎上ものだつただろう。

『それでは、どうぞ』

そうして映し出されたのは乱闘中の映像だった。

『そゝを、通せえええええええ!!』

『『『うわあああああああ!!!』』』

響の拳から生まれた風が竜巻となり、隊士たちを一掃していく。

「あれ!?これ前回の続きじゃん!」

「響先輩!?」

「人を攻撃している…!?」

「響!?」

三人は響が人を攻撃している状況に、戸惑いを隠せなかつた。

「どうして響が…!?」

「さつき言つた通りだ。沖田と言う男性が響君たちの一——ツ、素肌を連写しまつくな」

弦十郎は一瞬ためらつたが、もう言つてしまつた以上、隠す必要などない。

ちなみに、これを聞いたとき未来は暴走した、が、なんとか收めら

れた。

「最低…」

「その沖田つてヤツ、許せないのデス！」

「じゃあ、今響たちが他の人を攻撃しているのは…」

「先ほど言つた通り、その写真が入つたメモリーを山崎と言う男が沖田と言う男の命令でコンビニのコピー機に持つて行つてしまつたらしい」

「……」

「だが、直で攻撃しているワケではないぞ」

弦十郎が話している間にも、翼やクリスも映っていた。
三人とも、共通点があるとすれば、最低限、人を傷付けないようにしていた。

先ほどの響の様に攻撃の際の風圧や爆風を用いて戦っている。

「人を守るシンフォギア装者として、人を傷付けるのはご法度だが、理由が理由だからな…。俺にはなにも言えない」「ですよね…」

そして、そのとき…

『おおおお、いい感じになつてきたじやねえか』

『バカ言つてんじやねえよ。俺らのシマで暴れるヤツあ、容赦しねえよ』

そう、沖田と土方だ。

『沖田!!』

クリスが叫ぶ。

『貴様あ！よくもやつてくれたな！』

『え？なんのことだつけ？』

『惚けるな貴様あ！私たちの裸の写真を撮つて挙句の果てにそれを売つて商売しようというゲスがあ!!』

翼の叫びに、隊士たちや土方の目が、沖田に集中する。

『おま…ツ！なにやつてんだ!?』

『いやですね土方さん。俺がそんなことをやると思いますか？』

『いや、やる予感しかしねえよ。ていうかやるだろ』

『いえいえ、流石にそれは犯罪なんでやりやせん。ただやるとしたら土方さんの【ピ――】や【ピ――】を撮つて拡大コピーして女子高の門に貼り付けまさあ』
『てめえこの野郎!!!』

土方は沖田の襟を掴む。

『信じてください土方さん…。俺は、わいせつ物陳列罪で捕まつた変態より、土方さんを社会的に抹殺することしか考えてやせん』

『なにも信用できねえよ!!!』

『私たち変態じやありません!!』

『ていうか捕まえたのはお前だろうがああああああ!!』

クリスは怒りのあまりミサイルを沖田に向かつて発射した

『なッ!?』

『クリスちゃん!?』

「なにッ!？」

流石にこれは弦十郎ですら驚いている。

生身の——刀を持つているが、それだけ——人間にミサイルを
撃つたからだ。

確実に殺意が籠つた一撃だつた。

『はあ…。いきなり撃つてくんじやねえよ！ロリ巨乳!!』

沖田は、迫りくるミサイルを一刀両断した。

ミサイルは真っ二つになり爆発する。

!

まさかの刀でミサイルを真つ二つにしたことにより、驚愕する一
同。

『嘘だろ!? どんなイカサマだよ!?

『イカサマもクソもねえよ。ただ、斬つただけだ』

あまりにも衝撃な展開に、ポカーンとなつてゐる現実。

『いやあ…ミサイル撃つた時はビックリしましたね』

そのとき、過去映像が入る。

※モザイクあり（大事な部分だけ）
沖田のカメラによつてクリスの【ピ——】が激写された場面。

※モザイクあり（大事な部分だけ）

『沖田さんに【ピ——】を激写されたんだから』

あのとき、出されていなかつた映像。

大事なところだけが隠された映像に、固まる司令室。

そして…

「みみみ、見ちゃだめええええええええええええ!!」

未来の大声で、周りの男たちはようやく脳が追いつき、顔を逸らす。

「な、なんでものを…!!//／＼＼＼＼

「こ、これはさすがに…」

「ヤバイの一言なのデス」

映像は戻る。

「もう戻しても大丈夫ですよ」

「すまないな。突然のことで、脳が反応しきれなかつた

「僕もです…」

「俺も…」

「情報処理に長けている藤堺君がそうなるほど、あの映像は突然すぎたつてことね…」

『だつたらこつちだつて!!殺す氣でやつてやらああああああ!!!』

クリスはついにキレ、ガトリングガンを沖田に向けてぶつ放す。

『甘え!!』

だが、沖田はそのすべてを刀で弾き、受けとめ、斬る。

『雪音！私も加勢し『させねえよ！』ツ!!?』

翼に、土方の刀が襲う。

『おめえの相手は俺だ』

『貴様に用はない！変態め!!』

『誰が変態だこの野郎!!』

二人の剣と刀がぶつかり合う。

機能的な差では翼が圧倒的に勝っているのだが…

『なに?!』

『うらあ!!!』

力で、完全に押し負けていた。

「翼が押し負けているな」

「翼さんが!?」

「ああ、圧倒的だ」

『翼さん！私も加勢し『『『させらかあ!!』』』あわわわわ!!』

響は翼を加勢しようとすると、隊士たちがそれを邪魔する。

『喰らええ!!』

『なツ!?』

土方の剣技に圧倒され、体制を崩す翼。

その隙を狙われ、翼の腹に刀の頭が突き刺さり、翼は地面にひれ伏す。

『ぐう・ツ!!』

『重要参考人だ。殺しはしねえよ』

『先輩!!』

『お前えの相手は俺だよ!』

『しまつた!!?』

翼に気を取られたクリスはその隙を突かれ、沖田の接近を許してしまった。

沖田は刀でクリスのガトリングを真つ二つに斬つたあと、足で地面に体を叩きつける。

『ぐはあ!!』

『おつと! すまねえ。手でやるつもりが、足でやっちまつたぜ』

『絶対…わざとだろ…』

『翼さん! ク里斯ちゃん!!』

もう一人が捕まつてしまい、困惑を隠せない響。

『さて』

『残るは』

『お前』

『『『『一人だけだああああああああああああああ!!!!』』』』

隊士たちが、響を一斉に襲う!!

『うぎやああああああああああああああ!!!!』

!!!!!!』

「お前たち！女に大勢で挑むとは、なにをしているんだ!!」

そこへ、威厳ある声が、隊士たちを静まり返らせた。

全員が、その声の聞こえる場所へと顔を向けた。

「よかつた…」

「闘いが止まつた」

「これで一件落着デエス!!」

「いいや、まだそうと決まつたわけではないぞ」

『この声は…』

『近藤さん…?』

そう、その声の主近藤勇の声が聞こえた方向に、誰もがそこを向く。
そして、彼は現れた…。

全裸で

『『『『は??』』』』
「「「「え??」」」

大事なところはモザイクが掛かっているが、響たちにはばつちりと
見えているだろう。

『全く！少しは落ち着かんか！』

そして…

『お前が落ち着けええええええええええええ!!!!!!（服装的に）』

土方が、バズーカ片手に、近藤を攻撃した。

『うぎゃあああああああ!!!』

近藤は地面にひれ伏す。全裸で

『な、なにするんだトシ!?』

『それはこっちのセリフだこらあ!!なんで全裸なんだよ!?』

『だつて！そこの女の子たちに攻撃されて服が燃えきつたんだよ！』

『はあ!?』

『嘘つくなあ！私たちと始めて会つたころすでに全裸だつただろう
!!』

『あの攻撃で俺の服をしまつてる場所が焼けたんだよ!!』

『……それは…悪かったと思うが…せめてなにか巻いてくるくらいしてこい!!』

『それはすまん。ついいつものクセで…』

『いつも!』

土方から離れた翼が、ツツコんでいる。

「変態…」

「死ねばいいのに…」

「最低デエス」

近藤は女性陣からはかなり底辺評価を受けていた。

『だつてだつて！開放的な気分でいたいときあるじやん！なにもかもを捨ててヒヤツハーしたいときあるじやん！』

『どうしても周りの迷惑を考えろ!!』

二人の漫才が始まろうとしたその時…。

終わりの鐘がなる。

『沖田隊長!!言われたこと、きちんとやつてきましたよ!!』

そう、この修羅場を作った間接的な原因、山崎退が…。

その瞬間、三人の目が光る。
先に動いたのは響だ。

『捕まえたあああああああ!!!』
『えツ?!なに?!』

響は山崎を捕まえた。

『あの写真のメモリーはどうしたんですか!?』
『いてててて!!何のこと!!?』

『惚けないでください！私たちのあの写真！コンビニのコピー機で複製してきたんでしょ!?』

『え?!そんなことしてないよ！俺はただ沖田隊長の命令を受けて手紙を届けに…』

『へ？手紙？』

『そうそう!!あの写真の事に関しては俺なにもしてないよ!!』

三人は、沖田の方を見る。

沖田はその視線を見た後…。ニヒツ、と笑った。

それで、三人はようやく理解する。

「騙された」と。

そして…。

『え?』
——ガチャ——

響たちの手に手錠がかけられる。

『ようやく捕まえた。しばらく反省しているんだな』

このあと、響たちは牢屋に連れていかれた。

そして、山崎は…。

『おい、山崎…』

『へ?』

『こちとらお前のせいでかなり苦労したんだぞ? その分のお礼…しつかりしないとな…』

『いやあれば完全に沖田さんが悪「問答無用!」ぎやあああああああああ!!!』

山崎は、他の隊士たちにコテンパンにされましたとさ。

『(((一 旦)コマーシヤル』

龍の声が聞こえ、謎のCMが流れる。

「(((((((.....」

これを見て、全員がこう思つた。

「これまで、全部沖田が悪い」と。

そのころ、シンフォギア世界では……3

後編

前回、装者たちが捕まつたところで終わる。

「さて…今はCM中だ。……感想を聞きたい」

弦十郎は、調と切歌の方を向く。

今の現状で唯一、ギヤラルホルンでの世界に移動できる二人だ。

「すぐにでも、響さんたちを助けに行きたいデス！」

「でも、それができればどれほどいいものか…」

「そうだな…。こちらを手薄にする訳にも行くまい」

装者全員を平行世界に行かせた場合、こちらでアルカ・ノイズが現れると、対抗する手段がなくなってしまう。

「あの、私じゃダメでしょうか？」

未来がそういうが…

「駄目だ。君が神獣鏡のファウストローブを使えるとしても、民間協力者の未来くんには——」

「平行世界だつたら何度だつて言つたことがあります！問題ありますん！それに、響のためならどんなところにだつて！」

「……」

弦十郎は黙る。

なにせ、今回の世界はなにかと危険が多い。それに、女性としての尊厳がいろいろと失いかねない世界。

しかし、本人の意見を無視するワケにもいかない。

「弦十郎さん！」

「…………」

未来は、本気だ。だからこそ、どうすればいいのか弦十郎にはわからない。

だが――

『はあ～……いつまでここにいればいいんだろ～』

突如響いた響の声。

それを聞いて、全員が画面の方を向く。

『そう言うな立花……仕方ないだろう』

『はあ～…こんな鉄格子壊せたら楽なんだけどなあ～』

「始まつたか！」

ナレーション『装者たちは捕まり、ここ数日間、檻に入れられていた』

「ナレーションが入りましたよ～」
「妙に律儀ですね～」

ナレーション『沖田総悟の策略――悪ふざけに完全にハマつた彼女らに掛けられる言葉は、哀れ。それしか言いようがない』

「酷エデス～」

「悪いのはあの男なのに～」

『元はと言えば、全部あのクソ野郎のせいだツ!!』
『あの男……今度会つたら斬り刻むツ!!』

ナレーシヨン『二人は完全にゴ立腹だつた。なにせそうだろう。あそこまでやられたのだから』

『あの男…取り調べのときなんと言つたと思うツ!?』

「ここで、回想に入る。

『で、お前等つて結局なんなの?』

『私たちは……ことは違う世界。平行世界からやつてきた』

『並行世界?』

『そうだ。私たちはこの世界の異変を解決するために違う世界から来たのだ』

『はいよ、ええつと……重度の厨二病つと……』

『おいツ!!』

『いやいや、違う世界つて。今時そんな冗談通用しないから。ほら、さつさと出身の惑星言いなよ。子供でもできることだぞ?』

『いや、私たちの故郷は地球――』

『はいはい。もういいから』

『話を最後まで聞け!』

翼は立ちあがるが、周りの隊士たちに剣を向けられ、おとなしく座る。

『お前に選択権なんてないから。素直には吐いちゃいなよ』

『くツ!外道め…!』

『正道?いやあ照れるねえ。正しい道を進んでいるつて言つてくれるなんて』

『——ツ!』

翼は歯ぎしりをする。

『あ、そうだ。お前、ちょっと例のセット持ってきて』

隊士の1人が部屋を出る。

「翼…」

「先輩…」

「翼さん…」

「あの最低野郎！絶テエ許さねえのデス！」

『なにを…する気だ？』

『見りやわかるよ。お、来た来た』

隊士が持つてきたのは、何かの箱だ。

『なんだ、それは？』

『よし、とりあえず…』

沖田は、その箱からある物を取り出した。

『……？』

翼はそれを見て、困惑の顔を見せた。

実際、見て いる皆も同じ顔をして いた。

「あれつて…？」

「ラジカセ…？」

そう、沖田が取り出したのは、ラジカセだ。

沖田は今の服を脱ぎ捨てると、一瞬にしてラップバーの姿になつた。

『!!?』
「「「「!??」」」

今から、なにが始まるのか、用意に想像できた。

だからこそ、どうしてそれが始まるのか、全く理解できなかつた。

『YO! YO! start!』

そして、なぜかミラーボールが展開される。

そして、それすら周りの隊士たちは無視をしている。

『何故取調室にミラーボールが!? それに何故他のヤツ等は何事もない
ようにしているのだ!!?』

『さあさあ始まるお前のデイスリ! 準備はOK!?』

『いやダメに決まつて——』

『YO! YO! YO! YO! お前の頭は固いなキューーブ!』訳・お前強
情だな

『なッ!?』

『お前の頭は大丈夫!? Hey!』

『見てみよあなたの頭の細部!』

『わかつたお前の頭の全部!』

『お前の頭は、不丈夫大丈夫の反対の意味。オリジナル用語!』

『対して俺らの頭は丈夫!』

『そして小さいお前の胸部!』

『今なら訂正お前のアドリブ思いつきで話すこと!』（訳・今ならお前の
の思い付きの発言訂正させてやるよ）

『ほらほら次はお前のウェーブ波と言う意味。ゲームでもよく使わ
れ、次のモンスターの波が来るぞ、と言う意味でも使われている。！』
『イヤヤア……』

ラップが終わつたあとのその場…静寂に包まれていた。

『…………』

「「「「…………」」」

ナレーション『沖田のデイスリラップが、取調室と司令室を、静寂に包ませた…』

「なんで俺らのこと予知できてんだよ?」

「最初から予想していたんじゃない…?」

『貴様…!』

『あん?』

『貴様あ…どさくさに紛れて私の胸をデイスつたなああああ!!』

「「「「そこ／デスか／かッ!?」」」

翼はものすごい勢いで立つが、隊士たちに止められる。

『ヘツ! 貧乳が! ほかのヤツと3 cmと9 cm違うだけでキレイでいやねえよ』

『何故立花たちのバストサイズを知っているんだ!?』

『まさか…測られた!?』

『寝ている隙に…』

『ウワア…』

切歌はすでに語尾のデスをつけることすら忘れていたほど引いていた。

だが、答えは――

『いやあ、ちよつとあるヤツが俺にその情報をくれてなあ』
『誰だそいつはあ!?』

『僕たちが渡しました』

そのとき、画面に編集の力で龍と狐が画面に映る。
そして：

「お前等かあああああいいい!!!」

藤堺のツツコミが炸裂する。

「ていうかなんで響ちゃんたちのバストサイズをあいつらが知ってる
のよ!?

友里さんの言葉に…

『いえいえ、バストサイズだけじゃなく、ウエストもヒップも調べてあ
りますよ』

「なあこれ本当に編集済みの映像か!? なんで友里さんの疑問に当然の
ように答えてるんだよ!?」

取調室が錯乱とする中、回想が終了する。

『…先輩、なに泣いてるんだ?』

『いや、すまない…。取り調べのことを思い出すと、思わず涙が…』
『なにされたんですか!?』

そして、皆の相談が続いたとき…

「3人とも、食事を持つてきたよ」

傷だらけの山崎が三人の食事を持つてきた。

『ありがとうございます!!』

『あの中であなたはマトモそうだからな。マトモな人間がいれば、幾分か心が落ち着く』

『そう言つてくれると俺も嬉しいよ』

『ところで、怪我の方は大丈夫ですか?』

『ああ。ホント沖田隊長には困つたものだよ』

『にしても、なんだよあいつッ?!ミサイル真つ二つにするとかありえねえだろッ?!』

『まあ沖田隊長の剣の腕に關してはとても真似できるものではないよ』

『あの男もそうだが、あの変態男もなかなかの太刀捌きだつた‥‥‥』

『変態男つて、誰のこと言つてるの?』

『あの土方と言う男です。あの男から私たちを、その‥‥‥視姦をしていたと‥‥‥』

『視姦?あの規律を重んじる副長がそんなことするわけないけど‥‥‥』

『ですが、あの沖田と言う男が‥‥‥待て、あの男の言うことが信じられなくなつていてる‥‥‥』

『まあ、沖田隊長は屈指のドSですからね』

『ドS‥‥‥。そういうえば、土方がサディスティック星の王子、と言つていたが‥‥‥』

『まあそんな星あるわけじゃないけど、実際そのレベルなんだよなあ‥‥‥』

『話を戻すが、やはり土方はとてつもない剣の腕だ。私でも捉えるの‥‥‥』

が精いっぱいだった』

『まあそうでしょうね。ですけど、やはりこの真選組の中で一番剣の腕が立つと言つたら、やはり局長だろうね』

そのとき、さきほどの全裸仁王立ちの姿が、回想で映し出された。

そのとき女性陣は一気に目を隠す。

『はあッ!?あの変態がツ!?!』

『私も流石にあれは……』

これには皆も驚いていた。

あの変態が、この中で一番強いというのだから。

「あんな全裸野郎が強いとか…ありえなすぎるのデス」

「切ちゃん…人は見た目によらない…。あんな恥部丸出し変態野郎でも、意外と強いのがもよ」

「デデエス!?調の口が悪くなつてしまつたのデス！」

そう言つている間にも、会話は続く。

『あの人普段はああだけど、隊士皆が局長を尊敬しているんだ。あの人かいなけりや、今の俺たちはいないからね』

『本当にそなんですか…?』

『まあ、君たちからしたらどうだろうね。ちなみに、沖田隊長が副長の命を狙つて いる理由があるんだ』

『あれ、理由があるんですかツ!?!』

『明らかに面白半分…いや、もう完全に面白がつてやつてるだろツ!?!』

『ところがどつこい。違うんだな。沖田隊長も、副長も皆局長を尊敬している。沖田隊長は、どうしても局長の隣にいたいんだ。だから、

そのためには副長が邪魔なんだよ』

『……あの男にも、人情があつたのだな……』

『……尊敬する人の隣にいたい気持ちは何となくわかりますけど……でも、命を奪つていい理由にはならないと思います』

『ははは、そんなまともな回答を聞いたのは久しぶりかな。でも、ここはそんな綺麗事で通じる世界じやないんだ。過激派組織【攘夷志士】もいるし、そいつらが江戸の平穏を脅かすのから、そいつらを斬つて止めるのが俺たちの仕事だからね』

『その人たちと、話し合えないんですか？私たちは同じ言葉が話せる人間だから、きっと話し合えば分かり合えるはずです』

『……話し合いで解決できるほど、ここは優しくないんだ。それに……君たちの話、俺は信じてるよ。君たちは嘘をつけるような人間じゃないことも、俺は分かる』

『山^ズ——』

「ザ・ワー○ド」

「「「「?!」」」
!!!」

突如、止まつたと思えば、謎の文字が登場した。
そして…。

『は〜い。ちょっとストップね』

画面に狐と龍が現れる。

『いやあ〜いい感じだねえ』
『そうだねえ』

「…雑談なんていいから、さつさと続き見せろデス」

『さて、さつさと言うこと言つて終わりましょう。誰かに視聴者さん
に怒られちゃうからね』

『そうそう。特に切ちゃん辺りに』

「これ本当はリアルタイム映像なんじやないのか!?」

藤堯のツツコミが入つたが、無視だ。

『俺から言いたいことはただ一つ。調子に乗るなよ、山崎』

『そうそう、山崎のクセに』

そう言つて、時が戻る。

「「「「.....」「」」」

『a k-iさん.....』

『だからこそ、そんな綺麗な心を持つている君たちには、こゝは過酷な
世界だ。君たちの世界がどれほど平穏なのかわからなきけど、そんな
綺麗事は通じない。それを肝に銘じておいてくれ』

ゞザ・ワー○ドゞ

「またがよツ!?

『だからアンパンのクセにカツコいいこと言うなよ』

『ほんと、バトミントンのクセに』

「山崎さんつて人：すつごいボロクソ言われてますね：」

山崎に、未来の同情の視線が突き刺さる。

『さて、俺はそろそろ行くよ』

「……」

このとき、弦十郎は山崎の言葉に、感動していた。

彼女らに対したら、きつい言葉かもしれない。だが、そこにフオローを入れて彼女たちの心に衝撃と安らぎを与えていた。

「彼は…すごいな」

「え？」

「彼は俺たちに似ている気がする。過酷な環境にいれば、自然と人は、曲がってしまうものだ。それを自覚しているというのが、とても素晴らしいことだと俺は思っている」

「司令…」

「それに、さきほど狐と龍が言つたことだが、カツコいいかっこ悪いではなく、子供が不安になつてゐるときに、手を差し伸べてくれる誰かがいることは、0と1ほど違う。彼は、そんな1になつてくれている。彼に、感謝しなくてはな」

『さてと……』

『『『??』』』

『そこのてめえらッ!!さつきからコソコソコソ全部聞こえてんだよッ!!いいだろ別に地味キヤラがカツコいいこと言つてもツ!!お前らは俺を雑に扱うのがそんなに楽しいのかあああああああ!!!!』

カメラ方面に、山崎が鬼の形相で走つてくる。

『嘘だろおい!?なんでザ・ワー○ドの中の——時が止まつた状態での声が聞こえてるんだよ!?』

『知らねえよ!!とにかく逃げるぞ!でないとアンコまみれにされ

るうううううううう！』

『待てやてめえら！！アンパンの刑に処してやるうううううう！！』

『『『『ぎやああああああああああ!!!!』』』』

♪数日後♪

『さて、まず響君だつたかな？』

『は、はいッ!!』

『君は終が担当することになる』

『分かりましたッ!!よろしくお願ひします終さんッ!!』

『Ｚ～～Ｚ～～』

『おい茶髪。終兄さんはまだ寝てるから静かにしてろい』

『す、すみません……』

「あれ？なんかすぐ飛ばされてない？」

次の画面が、かなり省略されていた。

ナレーション『哀れな藤堺にご説明しましよう』

「なあこれやつぱりリアルタイムの映像じゃないのか!?それと哀れつて言うなよ！」

ナレーション『今までの内容を簡単にご説明いたします』

そうして、ナレーションは語った。

三人がここ、真選組屯所で滯在することを許されたこと。

こちらの世界での問題が終わるまで、この世界の政府——幕府が三人を返すつもりがないことを。

そして、今彼女たちの監視を担当する紹介をしていくことを。

「返すつもりはない、か…」

「では、一刻も早く翼さんたちが平行世界の異常を解決しないと戻れないということですか…」

「響たち、ちゃんと帰れるかな…?」

「大丈夫だ。きっと、翼たちなら問題ないだろう」

そして、進んでいって、クリスが絶望の顔になるところまで進む。

『クリスちゃん。この世の終わりみたいな顔してるよッ!?』

『な、なんでこいつなんだよッ!?せめて別なのにしてくれッ!!例えば

山崎とかッ!!』

『山崎は観察が仕事だからそれは無理だ。それに、総悟が自ら君の監視を買って出たからなあ』

『はあッ!?』

「よりによつて、あの男の人…!」

「しかも、自分からつて、明らかに悪意しか感じない…」

「なに企んでいるんデスか!?!」

『あ、待つてください終さんッ! それじや、またね翼さん、クリスちゃん!』

終が出ていくと同時に響も出していく

『さて、やるとなつたからにはまず、てめえの剣の腕を見てやる』

『いいだろう。あなたの剣の腕には興味があつた。その決闘、ぜひ受けよう。では、また会おう雪音。その……頑張つてくれ』

そう言いながら部屋を出ていく二人。

そして部屋には総悟とクリスが残された。

『さて、これから楽しい楽しい日々が始まるなあ……』

『う、うわああああああああああああああああああ!!!』

そうして、クリスの絶望の声が響、画面が一度暗くなる。

「クリス……」

「クリスさん……」

「クリスさん……」

「クリス君……」

皆の懺悔の声が、虚しく司令室に響く。

そして……

『次回……』

次回予告が始まつた。

『くウ……ッ!! 雪音エー！ 曰を！ 曰を覚ませえ!!』

「「「「!?」」」

聞こえたのは翼の声。

しかも、その声には後悔などの負の感情が混じつている。

『クリスちゃん……ッ!! どうして…どうしてこんなことに…!』

次に響の声が。これには、悲壮感が漂っていた。

『すまない。これは、完全に俺の責任だ…』

悔しそうに言う、近藤の声

『あのバカ…！なんてことを…！』

怒りを露わにする、土方の声。

『…………』

無口を貫き通す、斎藤。

そして…

『助けてエ!!』

クリスの、悲痛な声が響く。

『おいおい…。逃げんなよオ』

『ひいいい！あ、アタシをどうする気だよ!?』

『なに、ちょっとばかしいろいろとやるだけさ』

『なにをやるつもりだ!?』

『それはやるまで秘密だ』

『に、逃げ『逃がすかア！』

沖田は、逃げるクリスに縄を投げ、グルグル巻きにする。

『ヒイ！』

『安心しろオい。R—18のような展開にはならねえからよ』
『だとしたらなんなんだよ!?』

沖田は、悪に満ちた顔で、こう言う。

『Gに近いことだ（脅し）』

『Gってなんだよ!?』

『Hじゃねえだけ堪忍しろオい。それじゃあ、ゴオ…』

沖田は、縄を引っ張つて、謎の部屋へとクリスを引きずる。

『た、助けて！先輩！響！おっさん！みんなアああああああああああ!!!』

『次回…雪音クリス、死す！』

『おいどうすんだよ、クリスちゃん逝つちゃつたぞ!?』

『これは流石に予想外の展開ですよ…どどどどどうすれば!!!』

予告の後に、小さな小声が聞こえた。
そして、沈黙がこの部屋を支配する。
そして…。

「クリスウウうううううううう!!!」

「クリスさあああああああん!!!」

大パニックが発生した。

仲間の死。それは皆を動搖させるのには、充分であつた。

「弦十郎さん！行かせてください！今すぐに！」

「そうデス！ 今からでも皆のところに！」

「司令！」

「…………よし！わかつた！だが、せめて一人でも残つてくれ！」

「じゃあ、私が『皆さん大変です！』」

卷之三十一

「すまないが今はそれどころではない！例の平行世界の件でとてつもないハーフが『桂小太郎のハーフ』です！」桂くんがどうかしたのか？

「なんだとオオおおおお!!?」

まさか桂のまたもや脱走。

卷之三

「なんでそんな急に…!?

「そのときの状況は!」

「それからトイレは行こなきり行方が分からなくなりました！」

「かしこまりました！」

「俺たちは平行世界に行くメンバーを決め弦十郎さん！」今度はなんだ!!」

司令室に、エルフナインが入ってきた。

しかも、息を切らしていることから急いで走つてきていたのだろう。

「どうしたんだエルフナイン君!?」

「た、大変なんです！大変なんですうううううううううう!!」

「分かつた！大変だというのは一まずわかつた！それで、何が大変なんだ!?」

「実は…………ツツ!!!」

その、エルフナインが放つた衝撃の言葉に、さきほどまで騒がしかつた司令室が、一瞬にして静寂に包まれたのであつた。。

再会と逮捕

「クリスウウウウウウウウウウウウウウ!!!!!!」

前回、クリス——ゲロリスを馬乗りにして登場した沖田総悟。そしてそれを目撃した万事屋組とマリア+モブども！衝撃のクリスの変貌ぶりに驚愕を隠せないマリア。さあ、どうぞ！

新八 「ちよツ!? 沖田さん?! なにやつてんですかあんたあ!!?」

沖田 「なつて、騎乗だろ」

新八 「いや騎乗してゐるバリバリ人間じやないですか!?」

銀時 「そつだ！ それに騎乗つたら普通女が上じやねえか！」

新八 「てめえはナニの話をしてんだあ!!」

出会つた瞬間のツツコミとボケのオンパレード。

この話の内容に白い目で見る神楽。

そして今だ放心中のマリア。

そして、目覚める

マリア 「はツ！ そつだわ！ あなたクリスに何をしたの!!?」

マリアは沖田の胸倉を掴もうと沖田に突進する。だが、

ゲロリス 「とお！」

起き上がつたゲロリスがマリアを背負い投げした。

マリア 「ぐはあ！」

その衝撃でマリアは電柱に激突する。

マリアは頭から地面に崩れ落ち、コートが外れる。

新八「マリアさん!?」

銀時「クソつ！股が開かれる状態になつてつんのにカメラがねえなんて！」

新八「てめえはさつきからエロ話しかしてんじゃねえよ！」

沖田「おい……」

沖田の声が地面から聞こえる。

先ほど、ゲロリスは沖田を守るために立ち上がった。

そして、沖田はゲロリスに馬乗りになつていた。

沖田「俺を地面に落としてどうすんだよ……」

ゲロリス「あっ！すみませんご主人様！」

マリア「ご主人様！」

マリアは先ほどの状態から立ち直り、銀時の腹に一撃を入れてから驚いていた。

銀時「グホオ……」

神楽「自業自得ね。ていうか作者。私の出番が遅すぎアル。もう650文字行つてるアルよ」

新八「神楽ちゃん、誰に喋つてるの……？」

そんな三人は無視され三人の口頭は続いていた。

マリア「どういうこと!? ク里斯がご主人様だなんていうはずはないわ!!」

沖田「いやいろいろと事情があるんだよ」

ゲロリス「いくらマリアでも私のご主人様を悪く言うのは許さない

ニヤン！」

マリア「ニヤン!? とうとう語尾も変に!?」

そんな口頭が続いていると、周りに人が集まっていた。
特に男が。

銀時「おいマライ」

マリア「マリアよ！」

銀時「いやあすまねえ。作者のタイピングスピードが速すぎてミスつすた結果だ」

マリア「作者…？」

???「言わないで！」

マリア「…今、誰かの声が聞こえたような…？」

神楽「仕方ないネ。これでも作者はパソコンスピード認定試験2級の実力者アル。少しミスるくらい問題ないネ」

新八「リアルの話を持つてくんじやねえよ！」

銀時「でもこれ書いてんのも作者だぜ？」

新八「おい作者！ てめえただ自慢したいだけだろ!!」

???「いやあ…えへへ。実はこれ書き始めたのビジネス文書検定の合格発表で合格した日なんだ」

新八「おめでとう！ でもそういうのは前書きや後書きでいいだろ！！
本文で書く必要ねえだろ！」

???「これはそういう小説じやないか！」

新八「身も蓋もないこと言うんじやねえ!!」

マリア「…かすかに誰かの声は聞こえるんだけど、何を話しているのかわからぬいわ…」

ゲロリス「私もです…」

沖田「この声はお前たちにやあ聞こえねえよ。なにせ天の声だから

な

マリア 「天の声…？」

沖田 「ところで、とりあえずお前等の体に発情している猿共が周りにいるんで、場所を変えようや」

マリア 「あ」

マリアはようやく周りを見た。

周りに人の大群。そして大抵が男で自分たちの——マリアとゲロリスの——体を見ていた。

モブ 1 「あれって噂のハイグレ星人じゃね？」

モブ 2 「赤の方はニュースでやつてたけど…あの白い方、なんだ？」

モブ 3 「まさか新たなハイグレ星人か!?」

ゲス 1 「グヘヘ…ハイグレだあ」

ゲス 2 「うつほッ！興奮してきた！」

マリア 「…とりあえず、場所変えましょう！」

マリアとはじめとした一同は、人気のない場所へと向かつて行くのであった。

マリア 「はあ、はあ…」

一同は、人気のない場所へと到着した。

マリア「こ、ここまでこれば…」

新八「大丈夫でしようね」

神楽「一部変態もいたアルよ」

銀時「まあ、分からなくなるがな…」

新八「おい！」

沖田「にしても、まさか仲間がまだいたとはねえ：」
ゲロリス「私も驚きでした。来てたんだね、マリア」

マリア「つい数日前にね…。そんなことより！沖田って言つたわね
！クリスを早く解放しなさい！そしてそこから降りろ！」

ちなみに、沖田はクリスにまたがつて、またゲロリスは四つん這い
になつて移動していた。

沖田「こいつ次第だ」

マリア「その言葉に嘘はないわね！クリス、目を覚ましなさい！」
ゲロリス「なに言つてるんですかマリア！私はご主人様のペット兼
奴隸！ご主人様の元を離れるなんてありえません！」

マリア「奴隸!?」

沖田「だとよ。残念だったな」

マリア「まさかあなた！始めつからこうなると分かつてたわね!?」

沖田「なんのことやら？」

マリア「クリスを返しなさい！」

ゲロリス「ご主人様をいじめるな！」

沖田を攻めるマリアだが、それを阻止するゲロリス。
だが、そこに止めに入るヤツがいた。

銀時「おいてめえツ!!!」

沖田「なんですか？旦那？」

銀時「もしかして、奴隸つてことは毎夜毎夜その口り巨乳に【ピ---

ん!!」をさせてんのか!?夜の処理をさせてんのかあ!?ああああ

新八「てめえはなんつーこと聞いてんだあ！」

マリア「あなた少し黙つてなさい！」

二人のツツコミと同時に二人の蹴りが銀時に直撃する。

銀時「ぐはあ！」

新八「すみませんマリアさん、うちのバカが！」

マリア「大丈夫よ。とにかく、今すぐにクリスを解放し【ガチャ】ガ
チャ?」

マリアの手に、手錠がはめられていた。
マリアに手錠をはめたのは沖田だ。

沖田「それじやあ、13時15分。わいせつ物陳列罪と暴行罪で現
行犯逮捕」

そして、しばらくの沈黙が訪れ…。

三人「「「はあああああああああああ!!!!?????」」

「しばらく前」

土方と翼、齊藤と響は合流していた。

土方「よお。終」

終「……」

土方「相変わらずだんまりか。そつちはどうだつた？」

響「と、特に問題ありませんでした！そつちはどうでしたか？」

翼「私たちの方も特に問題はない。あとは沖田だけなのだが……」

土方「今、たぶん面倒くさいことになつていてるに違ひねえ」

響「ど、どうしたんですか？」

土方は先程の事を響に説明する。

響「沖田さんが二人か……」

響は明らかに渋い顔をしていた。

土方「まああいつは総悟とは違う方向なんだけどな……」

翼「例えばなんなのだ？」

土方「別に言う必要ねえだろ。言つたら言つたで絶叫するに決まつてらあ」

翼「それは、沖田のような発言を、すると……」

土方「まあな」

二人の脳裏に、沖田の言葉、【ピ――――】【ピ――――】
【ピ――――】などが連想された。

響「その坂田さんって人も、そんなこと言つちゃうんですか……？」
土方「おうよ。俺も詳しくは知らねえが、セクハラじみた行動を時々起こしてる」

響「それ、なんで捕まらないんですか？」

土方「まあ時間が経てばすべてなかつたことにされるからなあ、こ

の世界は」

翼「いや、なかつたことにしちゃダメだろ!?」

土方「ゞ都合主義つてヤツだ」

響「いやあ、アニメじやないんですし、そんな法則があるわけ——」

——

土方「は？なに言つてんだてめえ。この世界は——おつといけねえ。これ以上はタブーだ」

響「ちよつと!!そこまで言つたなら最後まで言つてくださいよ!なんなんですかこの世界は!!」

翼「そこまで言うのなら最後まで言え！」

土方「いやあ、だけどなあ……」

土方の発言はどうも区切れが悪くなっている。

それは確実に何かを隠しているという証拠であつた。

ポンッポンッ

そのとき、終の手によつて土方の肩が叩かれる。

土方「なんだ？」

【副長。それはこの世界にとつては周知の事実。常識です。なので隠す必要はないのでは?】

土方「なんでおめえ今に限つて発言!?執筆!?してんだよ!?今それいられねえよ!!」

まさかの終にボケ?をされたことに驚愕を隠せない土方。

響「終さん、普通にできたんだ……つて、そうじやなくて!土方さん！教えてください！この世界の秘密を！」

翼「そ、うだ！それに常識なのであらう？ならば私たちに隠す必要な
どないではないか！」

土方「…黙秘権を使う！」

響「あつずるい！」

翼「するいぞ貴様ア！」

ズル方「うつせえな！てめえら一旦黙れや！！…ていうかズル方つて
なんだよ!? 土方だよ!!俺はどこもズルくねえよ！」

全くズル方は…。ズルいの方のズルに決まっているじゃないか。
別にどこもずれているわけでもないのに。バカなの？

アホ方「誰がバカだああああああ！！ていうか、なんでアホ方!?せめ
てバカ方にしろよ！統一しろよ！ん…………誰がバカ方じやああああ
ああ！！」

翼「何故だかわからんが、土方が勝手にキレたぞ？」

響「どうしたんですかね？」

土方「ただの創造主の嫌がらせだ…」

響・翼「——？」

二人には土方の言っている意味が分からぬ。

土方「はあ…とりあえず、あいつらが来るまで待つぞ。——なん
だ、終？」

終が土方の肩を叩く。

そして、終が指をさす。そこには——

???'ちよ！離して！」

沖田「だーかーら。わいせつ物陳列罪だつての」

ゲロリス「そうです！おとなしく捕まつてください！」

???'わいせつ物はあなたもだからクリス！ていうか反論できる余地

がないのが悔しい！」

銀時・新八・神楽「「————」「」」

そこには……手錠をかけられたマリアと、それを黙認して歩ている
万事屋組三人。

そして、沖田とゲロリスだつた。

土方「なんだそいつウ——ツ!!!?」

響「マリアさああああん!!!??」

翼「マリアアアアアアア!!?」

終「……」

そう、それはマリアだ。
マリアがいたことに驚愕し、絶叫する二人。

響「な、なんでマリアさんがこの世界に!?」

翼「まさか、ギヤラルホルンを通ってきたのか!?」

マリア「あ、翼に響！」

響「どうしたんですかその状況!?」

マリア「見ての通りよ。あなたたちと同じ理由で捕まつたの」

響・翼「あ……」

二人はその発言だけで完全に理解した。つまりはそういうことなのだ。

土方「ていうかなんでこいつらも一緒にいるんだよ!?」

土方は銀時たちを指さす。実際、彼らがここにいる理由も土方達に
とつては謎である。

銀時「いやあ、ちょっと成り行きで…」

沖田「土方さん。どうやらこの女、何日か万事屋の旦那のところで世話をなつてた見てエですぜ」

土方「なるほどな…。だが、どうして今ここにいるんだ?」

銀時「いやあ、あのねえ、大人の事情つてのがあるんだよ…」

新八「そうです。僕らは悪くありません」

神楽「むしろこいつに無理やり連れてこられたネ」

♪回想♪

三人『『はああああああああああ!!!!?????』』

時間は、マリアが捕まつた時だ。

マリア『え?』

マリアも突然の出来事に理解が追いつかず、素つ頓狂な声をあげていた。

そして、なんとか思考が追いつき…

マリア『ちょ!?これどういうこと!?』

沖田『さつきも言つたろ。わいせつ物陳列罪と暴行罪だつて。そんなにS Mプレイを所望しているかのような恰好しやがつてMなんですか?』

マリア『Mじゃないわよ!』

マリアは反論するが、沖田は聞く様子はない。そこへ…

銀時『おいおい沖田くうん? うちの同居人になにしちやつてくれてんの?』

銀時だ。銀時は厳つい顔で沖田に迫る。

銀時『こいつはなあ。今やうちの大事な同居人なんだよ。そう簡単にやれるワケにはいかねえなあ』

新八『そうですよ。こつちにだつて事情はあるんです。理由も聞かないで、勝手に連れて行つては困ります』

神楽『マリアを連れて行くつて言うのなら、死ぬ覚悟をしてから行けやクソガキ』

沖田の前に、万事屋三人が立ち上がったツ！それを感じ取り、「フシャーツ！」と警戒の声を出すゲロリス。

沖田『大事な仲間？【ピ――】の間違いじやありやしませんかい旦那？』

マリア『ちょ／＼!?』

沖田『ところでメガネ。お前ついに童貞卒業したんだな』

新八『ちょ！僕とマリアさんはそんな関係では決してないですよツ！ていうかR18の内容多すぎやしませんかね！』

新八は顔を赤くしながら必死に弁解する。

沖田『そりかうそりかい。まあどうでもいいか』

銀時『なんだあ？お前にしては随分と潔く下がるんだな』

銀時の言う通り、沖田ならここで絶対一つや二つカマをかけるだろう。だが、それをしなかつたことに疑問を持った銀時。

沖田『旦那。俺にだつて真面目なときはあります。こいつを屯所に連れて行かなきやなんねえんで』

銀時『だから、俺たちがそう簡単に下がるとでも――』

その時、沖田は一枚の写真を銀時たちに見せた。その写真は――

沖田『これ、見覚えありますよね、旦那?』

銀時『な、何故お前がそれを…!?』

沖田『うちの猫は優秀なんですか』
ゲロリス『ニヤア～』

銀時たちが見せられたその写真。

それは…

沖田『この女と一緒に屯所に不法侵入したこと、今見逃せば不問にしますぜ?』

そう、この写真は前に真選組の屯所に侵入したときの写真だ。その証拠に銀時がマリアの脚にしがみついている。

新八『これ撮られてたんですか!?』

神楽『おいクソガキ!肖像権行使するアル!』

沖田『残念だなチャイナ娘。その法律はまだ制定されてねえ。故にこれは法律違反じゃねえんだよ』

銀時『じやあ不法侵入は『不法侵入はいつの時代であろうと犯罪なのは変わりないですぜ』くツ!』

マリア『……会話が生々しすぎる…』

江戸と現代が融合したこの世界独自の会話なため、マリアには会話が生々しく聞こえてしようがない。ていうか現代要素が混ざつてゐるならそういう法律くらい制定されててもいいだろ、と思うがそこらへんは触れないお約束である。

銀時『よーし分かつた!じやあ、手錠はそのままで!だが俺らもついていく!』

沖田『……ついていつて旦那は何がしたいんですかい？』

銀時『そりやあもちろんかん——仲間のためだ！』

マリア『今確實に本音が漏れ出てたわよ！』

沖田『とりあえず行くか。ホラいくぞ変態』

マリア『だから私は変態じや——否定できない！』

と、ここで回想は終わる。

沖田「なんてことがあつたんできあ」

翼「そんなことが…。マリア、大丈夫か？」

マリア「ええ、なんとか…」

翼はマリアをなだめる。だが、マリアの表情は暗いまだ。

響「にしても、マリアさんがこちらの世界にきていたなんて…」

マリア「ええ。でも、降り立った瞬間にバイクに轢かれて体を蹴られてキリモミ回転した拳句、銀さんたちが飼っている犬に頭を噛まれたわ」

響「想像以上に悲惨な目に合つてた！」

マリアがこちらの世界に来た時のことを見かされた響はマリアの悲惨な体験に体を震わせる。

土方「にしても、こいつらの同類が他にもいたとはな…。驚いたぜ」

沖田「とりあえず、こいつどうします？」

土方「一度屯所に連れてつて、そこで決めるしかねえな」

タバコを拭きながら答える土方。確かに今響たちの身柄を預かっている真選組としては同類であるマリアを連れて行くことになんの疑問もない。

マリア「私はこれからどうなるの？」

土方「おそらく、保護対象——と言うの名の強制的な協力者にされるだろうな。お前らがここに来た理由はこいつらから聞いてる」

マリア「そう……」

元々、響たちがこの世界にきた理由はこの世界の異常を解決するため。それはこの世界全体に影響しかねないほどだ。だからこそ、彼女の答えは決まっている。

マリア「強制なんかじゃなくて、こちらから仲間になるわ。だつて、それが私たちの使命なんだもの」

銀時「マリア……」

新八「マリアさん……」

神楽「マリア、カツコいいこと言つてるけどその恰好じゃ全然かっこよくないネ」

神楽からの指摘に、全員が頷く。

今のマリアの服装はシンフォギアであり、それに手錠をつけている。これではダサいだけだ。

マリア「…私、当たり前のこと言つただけなのに…」

響「落ち込まないでください、マリアさん…」

翼「ああ気持ちは痛いほど伝わる。今日は遅くまで語り合わないか？」

マリア「そうね。そうさせてもら——「あん、どうした終？」

マリアの言葉が中断する。声の主は土方だ。見ると、土方は終が

持つているケータイ画面を見ていた。

しばらく見ていると、土方の顔が驚愕の顔になる。終からケータイを取り上げると、皆に見せる。

土方「おい、これ見ろ!!!」

土方が突き出してケータイ画面には、一つのニュースが流れていった。

その内容とは――

『えー緊急ニュースです。つい先ほど、【ハイグレ星人】が出てきたとされる水色の穴のようなものが、突如消滅しました。繰り返します――』

「「え…?」」

その情報は、三人を絶望させるには、十分な内容であつた。

江戸一番のからくり技師

「閉じた…ギャラルホルンのゲートが…?」

突然の絶望的な情報により、頭の処理が追いつかない響。そして、それは翼やマリアも同じだった。

「どういうことだ…。一体、どうして…?」

「こんなこと、今までなかつたのに——」

「おいおい、どうしたんだそんなに絶句して。あ、もしかしてウン——

」

銀時のない発言が出る最中、新八のツツコミと言う名のハリセンが銀時の頭を直撃する。

「痛つてえな！なにすんだよばつつかん！」

「デリカシーなさすぎですよ！マリアさんの最初の話、もう忘れたんですねか!?あれがないとマリアさんたちは故郷に帰れないんですよ!？」

いつもと違つて切実なツツコミに——ツツコミに切実もクソもないのだが——銀時はハツとする。

確かに、居候させる前にそんな説明を聞いていた、と。

「それにして、一体どうしてそんなことになつたんだ…?」

「ニュースに出てるつてことは、真撰組にもこの情報は伝わっているはずでさあ」

「——自分が行つてきます。

「終！よし、悪いがすぐに行つて来てくれ！」

「ええ!?あの、私は…」

終が率先して立候補したが、響のお付け目役は終だ。

終が行くとなると、響もついていく必要がある。

「土方、すまないが今は分かる通り緊急事態だ。立花を私たちと一緒に同行させてくれはしないだろうか？」

「——駄目だ。こいつには今まで通り終と同行してもらう」

「そんな……」

「あなた、今がどんな状況かわかつてゐの!?」

そのとき、マリアが土方に對して怒鳴った。

マリアたちには他人事ではなく、完全に関係者だ。ましてや元の世界に帰れなくなつたとなれば、それはなんらかの異変かもしれない。もしそこでカルマノイズでも出て来てしまえば、被害は拡大する。

そのためにも、装者は一人でも多くいた方が良いだろう。

「ああ。確かにこれは異常事態だつてことははつきり理解してゐる。だがな、それは公私混合つてヤツだ。今まで通りこいつには終を——」

「——頭硬いねえ、土方くうん」

そのとき、銀時のふざけたような声が、辺り一帯に響いた。

「なんだと?」

「いつも言つてるだろう? そんなに頭が固いと、いつか禿げるよ? そこのチャームポイントであるV字ハゲも、ジョリジョリ／＼つてなつちやうよ」

「チャームポイントじゃねえよ! あと禿げてねえし! あとなんでジョリジョリ／＼なんだよ! 普通バラバラだろ!」

「いやあでもほら、今現在進行形でジョリジョリ／＼つてなつてるよ」「はあ!」

そのとき、ようやく一同に聞こえた。

ジョリジョリ～～と言う音が。今まで二人のボケとツツコミで聞えなかつたが、実際に、今までずっとその音が鳴り続けていたのだ。そして、気づいた。土方は自分の後方に不快感があつたことを。そこには――。

「何してんだてめえ!!?」

「あ、バレやした?」

沖田が、その手にバリカンを持つて土方の頭の面積を徐々に減らしていたのだ。

土方の感じた不快感は、落ちた小さい髪の毛だつたのだ。

「いやあ、いざれ朽ち果てる運命なんて、今のうちに栽培しどうかなつて…」

「俺の髪の毛は作物じやねえんだよ!! ふざけんな!!」

「いいや、沖田君の言う通りだ。聞き分けのない▽字ハゲにはこれくらいのお灸を添えないと…」

「ふざけんなよ!! 公務執行妨害で逮捕して『ガチャ』あ?」

そのとき、ガチャつと言ふ金属音が土方の腕の辺りに響いた。

その手には、手錠が。そして、その手錠のもう片方は、とある一軒家のパイプに繋がれていた。

「ご主人様! 繫げましたよ!!」

「よくやつたゲロ里斯。あとでご褒美だ」

なんと、クリスが気配を完全に遮断して土方の手に手錠をつけたのだ。

「おい総悟!! これ外せ!!」

「いやに決まつてゐじやねえですかい。このままだと話が進まないん

で。それに、もう終さんも行つちまつてゐるし」「え、あ…」

響が隣を見ると、いつの間にか終がその場からいなくなつっていた。
どうやら、いつの間にかこの場から離脱していたらしい。

「これで、こいつはついていくしかなくなりますね」「クソつ…」

沖田は響を親指で指してそう言つた。
土方は完全に沖田の策略に嵌まつていたのだ。

「お前、どつちの味方なんだ！」
「少なくとも土方さんの味方ではありやせん」

沖田はそうキッパリと答えた。

「ああもうわかつた！今は臨時で認めてやる!!だからこの手錠の鍵を
——」

沖田は、土方が言葉を言い終わる前に、懐からマヨネーズを取り出
し、そつと胸ポケの中へと入れた。

「マヨネーズじやねえよ!!鍵出せ、鍵!!!」

「何言つてんですかい。マヨネーズはあなたのキー・ポイントじやねえ
ですかい」

「うまくねえよ！あ、ちょ、おい！すまん、俺が悪かった！俺が悪かつ
たから全員俺を置いてくな！」

一同は悲願する土方を完全に無視して、ギャラルホルンのゲート跡
地へと向かっていくのであつた——。

*

「——見事になにもないわね」

「そうだな。先ほどまで、確かにあつたはずなのだが：」

時間は過ぎ、銀時や響たちはギャラルホルンのゲート跡地へとついていた。

正確には、そこが見えやすい建物の上に来ているのだが。そこにはたくさんの人だからができており、とても入れる状況ではなかつたため、当然の措置であつた。

目線の下にはたくさんの政府——幕府関係者であろう人物たちが、この異常事態を解明すべく、躍起になつていた。

「一体、どうしてこんなことに——」

響たちには、この状況が理解できないため、軽いパニックに陥つていた。

特に響が酷く、その顔は憔悴しきつているような顔だつた。

「もう、未来に、合えないのかな…？」

「気を落とすな立花！絶対に帰れなくなつたとはまだ決まってないぞ！」

「そうよ、気を落とさないで」

二人も軽く絶望しているだろう。だが、まだ決まつたワケではないことで、完全に絶望するほど二人の心は柔くはない。

最後まで抗つて、絶対に戻つて見せる。二人はその意志に包まれて

いる。

「そう、ですよね。まだ帰れないと決まつたワケじゃありませんよね。
すみません、落ち込んじやつて」

「無理はないわよ。こんな状況じゃね…」

「にしても、人込みがすげえな」

「これじゃ中に入れないアルよ。こつちに来て正解だつたネ」

「それに、穴を隠してた幕すらなくなつてるとなると、どうやらあの
ニュースは本当のことだつたらしいな」

幕、とは。ギャラルホルンのゲートを隠していた幕のことである。
当初は設置されておらず、ポールのみだつたのだが、なんでもそこ
で人身事故が起こつたらしく、危ないと理由で幕が引かれたのだ。
だが、それが跡形もなかつたため、ゲートが消えたと言う理由は十
分に立証できたのである。

「——それで、帰れないとなると、皆さんどうするんですか？」

新八が、当然の疑問を言い放った。

そう、まず直面するのはこれからどうするか。帰還方法が断たれた
今、何をするべきなのか。

その答えは、もちろん一つだ。

「そんなの、決まっています！」

「どうにかして、ギャラルホルンのゲートを復旧させるしかあるまい」
「ゲートが消えたのなら、あちらだつて異常に気付いているはずよ。
それに、もし気づいていないとしても映像があるから、いざれ気づい
てもらえるはずよ」

「でも、あてはあるんですか？ 跡形もなく消えたんですよ？」

「それは——」

確かに、探すと言つても手掛かりなしじゃ、どこから手を付ければいいのか分からぬ。

実際、手がつかない状況だ。

新八の指摘に、黙ってしまう三人。

「一つ、心当たりがあるぜ」

そのとき、救いとも言つてもいい声が響いた。

沖田だ。

「本当ですか沖田さん!?」

「ああ。だが、それはあくまで心辺り、であつて、必ずじやねえ」

「それでも、教えてくれ。今は手がかりが欲しいんだ」

「――平賀源外」

「――――――」

「誰ですか、それ？」

「平賀源外? 源内なら知つてゐるが……」

「(やつぱり、この世界は私たちの知つてゐる歴史と酷似してゐる部分があるわね……まあ、今はどうでもいいわ。)その人が、どうしたの?」「そいつは、この江戸一番のからくり技師を自称してゐるヤツでなあ。今は指名手配中だけだな」

「指名手配?」

その言葉に、マリアが反応する。

指名手配。その言葉が意味するのは、その源外と言う人物は、犯罪者であると言うことを示唆していた。

「そいつの居場所、俺が知つてんだ」

その沖田の爆弾発言に、一同は愕然とする。

「ていうか、なんで指名手配犯なのに捕まえないの？」

当然の疑問がマリアから来る。

「ああそれはな、あの爺さんには土方専用抹殺マシンの製作依頼を出してるんですか」

「なんてもん作らせてんですかあんた!？」

警察の職務を放棄し、あまつさえその指名手配犯に殺人マシンを依頼する沖田の鬼畜さに、驚きを隠せない一同。

「おいクソガキ。源外のじつちゃんに変なことしてねえだらうな?」「してねえよ。おめえらじゃねえんだから」

お前が言うな——。その言葉が響、翼、マリアの頭によぎつた。
そのとき、マリアが少し、あることがおかしいことに気付いた。

「ちよつと待つて、銀さん。今までの話の流れだと、銀さんたちもその平賀源外って人と知り合いのように聞こえるんだけど……」

「あ、そりやそうだろ。俺ら度々そこに通つてるからな」

「ええ!？」

またの爆弾発言に、驚愕する三人。

まさかこんな身近な人物が指名手配犯と繋がりがあつたなど、予想だにしなかつただろう。

「でもまさか、あの時沖田君が源外のジジーのところにいたのを見た時は驚いたぜ」

「居場所がバレたつて、源外さん冷や冷やしたつて言つてましたよ」

「いやあ、当初は捕まえようと思つてたんですが、あの爺さんのからくりを作る技術は本物だ。だから、俺の役に立つからくりを作つてもらおう思つてね」

「その貴様の『役に立つからくり』というのに、悪意しか感じないのでが……」

「うるせえやい。それに、土方が一緒じゃあ行けなかつたしな」「あ……」

そこで、一同は気付いた。

最初から沖田は、その源外と言う人物のもとに行くつもりだつたのだと。

そしてそのために、土方を行動不能にしたのだと。もしこの場に土方がいれば即座に「御用改めである！」と叫んで突撃していただろう。

「そこまで見込んで、土方を……」

「そういうワケだ。さて、さつさと行くぜ」

「——にしても、よく見つけられたよなあ。あのときや結局はぐらかされて聞けなかつたけど、どうしてあそこが分かつたんだ？」

「フツ、——旦那」

「二次創作の特権つて、知つていやすか？」

「いやメタイ!!」

—————あの方、なんやかんやで平賀源外のいるところへと着きました。
* * * * *

「ここが、源外さんがいるところなんですね」

「そうだぜ。ほんと、二次創作の特権って便利だよな」

「そうだな。原作じやありえなかつたことも、二次創作つて言つておけば、すべてが許されるからな」

「いつまでその話引きずつてんだ！あと、すべてが許されるワケじやないですかからね!?」

二次創作の特権についていつまでも語り合つてゐる銀時と沖田にツッコミを入れる新八。

普通、できるはずのない会話をすることが許されるのが、この小説なのだ。

「二人の意味が分からぬ話は放つておいて、とりあえず入りましょう」

「そうだな」

二人に呆れたマリアが、一番に源外のいるであろう建物の扉へと入つていく。

「お邪魔するわy——」

——瞬間、源外宅から放たれた蒼い光が、マリアを飲み込んだ。

「マリアさああああああん!!!!?」

あまりにも突然の出来事に、ワケが分からずマリアの安否を確認するために——本人はただ叫んだだけだが——響は叫んだ。

それに、突然家宅から殺人レーザーが放たれれば、誰だつて驚く。

それレーザーはそのまま曲線を描きながら上空へと飛んでいき、そのまま爆発音とともに爆裂霧散する。

「な、なんじゃありやああああああああ!!?」

「ま、マリアはどうなつたのだ!?」

全員が、マリアがいた場所へと目を向ける。

そこには、全身が黒こげになつたマリアが、倒れ伏していた。

だが、ピクピクと体が少し動いているので、どうやら生きてはいるようだ。

「マリアアアアアアア!!!」

「ヤム○ヤアアアアア!!」

「いや誰ですかそれ!?」

神楽の叫びに、響がツツコむ。

完全に別人の名前を叫んでいた神楽。実際、マリアの伏し方はヤム○ヤと酷使している。

だが、そんなこと知るはずのない響は、完全な間違いとして認識してしまつていた。

「こりやあ見事に黒焦げたな。ま、この程度で済んでよかつたな」

「そうだな」

「いや軽!!」

沖田と銀時の軽い対応に、ツツコム新八。

仲間を全く労わらない彼らの態度に、翼が怒りを表す。

「貴様ら! マリアがこんなになつてしまつたんだぞ!? もう少し…労わるとかないのか!?

「無事だからいいじやねえかよ。漫画とかでよくある、[ピ——]とか【ピ——】が露出しないだけ、マシだろ」「ななななな／＼／＼……」

銀時のセクハラ発言に、顔を赤くしてしまった翼。

彼女とて一介の女性。やはりこういったものには反応してしまうのだ。

「それに、今はあのレーザーのことを気にするべきだと思うぜ。爺さん、なにがあつたんでもえ？」

沖田がそう言うと、扉から入る。

——そして、そこにはバラバラに散らばつたなんらかの機材。そして、その機材に埋もれている人の脚があつた。

「ジジイイイイ!!」

「源外さああああああん!!」

流石の銀時も、この状況に驚愕し、新八とともに脚へと駆け寄り、二人がかりで引っ張る。

「く、暗いです…」

「おお、ゲロ里斯。怖いのか。——よし、先頭やれ」

「貴様は本当に最低だな!!」

クリスが涙目で沖田にそういう。

調教済みのクリスは、感情に素直だ。

故に見栄などを張らずに自分の意見を率直に言う。

そして、そんな素直なクリスは可愛い。いやほんとマジで。もう、食べちゃいたいくｒ？」「ナレーターさん、ちゃんと仕事してください」おつとつと。話が逸れてしましましたね。給料のために頑張りますか。

だが、そんなクリスに対し、非常に先頭を行けど命令する沖田は、まさに鬼畜の極みである。

「うおおおお…抜けねえ!!」

「神楽ちゃん! 手伝つて!!」

「おっしゃあ! 任せるネ!!」

神楽が参戦し、源外の脚を引っ張る。

「よいしょー!!」

スプーンと言う音とともに、飛び出ていた足が出てきた。
——下半身とともに。

「「「「ええええええええ?????」」「」
!!!」」

五人の絶叫が響く。

抜けたと思つたらまさかの下半身のみ。

この衝撃の状態に、叫ばずにはいられない。

「ちよ、どうすんですかこれ!?」

「源外のじつちゃんが死んじゃったアル!!」

「とにかく戻せえ! 貼り付け直すんだ! 上半身を掘り起こすんだあ

!!

「立花! 私たちも手伝うぞ!!」

「は、はいい!!」

皆が皆攬乱し、大慌てで源外の上半身を掘り起こす。

と、いうより上半身と下半身が取れた時点で生存は絶望的だ。

それでも、パニックを起こした一同は一生懸命に上半身を掘り起こす。

そんな中、冷静に周りを見ている人物が二人。

沖田とクリスである。

「おいクソガキ！おめえも見てねえでちゃんと手伝え！」

「いやあ、依頼を出しているとは言え現指名手配犯。このままそいつの首を持つて行けば、昇進して土方を蹴落とせるかもしけねえじゃねえか。俺にとつてはどつちに転んでもうまい話なんでね」

「やはり貴様はクズだな!! 雪音、雪音はどうだ!?」

「私はご主人様の意向に従うだけです」

「やはり駄目か！」

少しの希望を持つてしてクリスに祈願したが、さらりと断られてしまつた。

もう考へても仕方ないと翼は源外の上半身を掘り起こすのに集中する。

ここ最近酷い目にしかあつてなくて存在価値が曇つているが、シンフォギアは元々高性能であり、常人の何倍、何十倍の力を発揮する。ポイポイとゴミを投げるような感覚で大きな瓦礫をどかしていく二人。だが、源外の上半身がどうしても見つからない。

「どこにいつたんだ源外のジジーの上半身!?」

「まさか、あのレーザーでとつぐに真つ二つに――！」

「子供にはお見せできないレベルネ！ナレーター、モザイクの準備するアル！」

「一体誰に言つてるんですかそれ!?」

今はステルス機能を起動してるので見えないけど、私はここにいます。

それにちゃんとバラバラ死体が映つても、モザイクはあちらの方で処理するんで安心してください。

まあこの声は聞こえてないんですけどね。

さて、そんな中、沖田はとあるところへと目を向けていた。

「——ゲロリス」

「なんでしょうか、ご主人様」

「あそここの瓦礫、どかしてくれ」

「はい！仰せのままに！」

クリスは沖田の指示通りに皆とは違った場所の瓦礫を退かし始めた。

そして、しばらくその場所の瓦礫を退かし続けていると…。

「あー酷い目にあつたぜ」

「大丈夫か、爺さん？」

「「「「え？」」「」」

クリスの退かした瓦礫のあつた場所から、初老の男性が出てきた。

「ジジイ！」

「源外さん！」

「源外のじつちゃん！」

「え!? もしかして、この人が——!?」

「おうよ。江戸一番のからくり技師とは、この俺のことよ」

この男こそが、平賀源外。

自称、江戸一番のからくり技師。

だが、その名称に似合うほどの腕を持つていることは確か人物だ。

そして、彼にすぐに問い合わせなければならないこともある。

「あ、そうですよ源外さん！·さつきのあれ、なんなんですか!? そしてどうして源外さんがそつちに!? 下半身だけが出て来てビックリしたんですねよ!」

「落ち着けよ。一気に質問されちゃあ耳がもたねえ。質問は一つずつにしてくれ」

「じゃあ……この下半身はなんなんですか!?」

まず最初の疑問。

この源外の下半身そつくりの下半身だ。

これは一体なんなのか。正直レーザーの方が一番気になるが、今はこの質問の答えが知りたい。

そして、源外から返ってきた答えは――。

「ああ、それか。それは俺そつくりのからくりだよ」「はあ!?」

「あの実験はなにかと危険が大きかつたものでね。リモコン操作性のからくりで俺そつくりのからくりに操作させてたんだよ。俺は安全などころで操作してたんだが、案の定な――」

「そんな危ねえもの造つてんじやねえよクソジジイ!!」

当然である。

あんな危険極まりない核兵器レベルの装備を作つている時点で危険すぎる。

事実、あれがシンフォギアを纏つたマリアや翼、響以外だつたら確実に瀕死だつただろう。

いや、普通なら即死なのだが、この世界の原作キャラは瀕死で済むのだ。それが、この世界のルー…おつと、喋りすぎましたね。

「第一、なんでそんな危ないもん造つてんですか!?」

「いやあ、ある奴から依頼されてよお」

「誰だよこんな危ねえもん造るように依頼したバカは!?ていうか受けて造つてんじやねえよ!!」

銀時のツツコミの通り、こんな危ない危険物を一体誰が依頼したのか?

どこかの裏社会の人間?それとも地球侵略を目論む天人?どちら

にせよとんでもない破壊兵器を造つてゐることに変わりはなかつた。

「爺さん……」

「おお沖田！流石にこんな危険物を造る者を放つておくことなどでき
ない！早急に捕まえるべきだ！」

「いえ、沖田さん！捕まえるのではなく、こゝは警察としてガツンと一
——」

翼と新八のもつともな指摘に、沖田は——。

「爺さん、このレーザー砲……もうちょっと威力増し増し且つ使用者
に負担が行かないように出来ねえのか？」

「無茶言うな。使用者に負担がないようにはなんとかしてみるが、流
石に威力向上は見込めねえな……。それに、そんなに注文が多いとお前
さんが決めた予定日に間に合わねえよ」

「いやお前が依頼したんかいいいいい!!」

まさかの事実、発覚。

なんとあの危険極まりないレーザー砲の製作依頼者が沖田だつた。
なんだろう、本当に戦争でも始めるつもりなのだろうか？

「これが完成すれば、土方を抹殺することも容易い」

「あんたにはそれしか頭にないんですか!?」

「それに、なんというものを依頼しているのだ！貴様本当に警察か!?」

当然の指摘である。

沖田総悟、本当に彼は警察なのだろうか。いや、ほんとマジで疑う
わ。

名前を鬼畜外道に改名した方が良いんじゃないかな？

「つーかそもそも、あのレーザー砲はなんなんだよ!?」

「あれはな……ス○ブラつて……あるだろ?」

「ス○ブラ?なんですかそれ?」

「大人気格闘ゲームアル。さまざまゲームのキャラクターを操作して競い合うゲームネ」

「それが、どうしたと言うのだ?」

「画面外にぶつ飛ばされる時によ、なんか光が出るじやねえか。それをぶつ飛んだ時に発生したエネルギー体だと仮定して、逆にそのエネルギーをレーザーとして利用できねえかなって…」

まさかの事実。

あれほど強力な武器の元ネタがまさかのゲーム。

しかもあんまり目立たない脱落時のあの光がモチーフになつていた。

「ジジイ!てめえやっぱバカだろ!!」

「どこの世界にゲームをモチーフにして破壊兵器造るバカがいるんですか!?

「何言つてんですかい旦那。そしてメガネ。こういつた斬新な発想が、未来を切り開いていくでさあ」

「言つてることカツコいいかもしけねえけど、造つてんのはただの破壊兵器だろうがあ!!切り開く以前にその先どとぶつ壊されるわ!!」

「——爺さん。実は、造つてもらいてえものがあるでさあ

「話変えんなあ!!」

銀時と新八のツツコミを完全に無視し、沖田は源外に対し本題を切り出した。

「なんだ?今お前さんから依頼されたもん造つてんだ。そういうのは後からにしてくれ」

「まあまあ。とりあえず話だけでも聞けや。実は、こいつらのことなんだが——」

沖田は拳をグーにして親指で三人——四人を指した。

響と翼、そして調教済みのクリスと、今だに自爆されて死んだヤ〇チャ状態のマリアだ。

「——いろいろとツツコミたいところ満載なんだが、とりあえず……あれ、起こさなくていいのか？」

源外が指さしたのは、一番ツツコミどころの多いマリア。そして、二人はマリアを見て——。

「あー忘れてた!!」

「しまった！色々ありすぎて忘れてしまっていた！大丈夫か、マリアー！」

* * * * *

「う、うう……」

「大丈夫ですか、マリアさん？」

「取り合えず、お茶でも飲んで元気出せや」

「ありがとうございます……」

あれからしばらくして、マリアが目を覚ました。

今だに黒焦げなところはあるが、ようやく色を取り戻している。

源外から出されたお茶をゆっくりと飲む。自分がこうなつた元凶なので、素直にお礼は言えないのだが、それとこれとは別であるため、一応お礼を言った。

「いやあ、まさか他人に当たるがあ思ひもしなかつたぜ」

「いや、普通に考えたら当たるかもしけないって思うでしようが」「まあまあ過ぎたことをぐちぐち言つたつてしゃーないだろ？で、その恰好を見るに今噂の【ハイグレ星人】だよな？」

「——ちょっと待つてください。なんですか、それ？」

【ハイグレ星人】の単語を聞いて、響が反応した。そして、それは翼も同じだ。

それと同時に、嫌でも分かつてしまふ、理解してしまつていた。その【ハイグレ星人】と言うのが、自分たちのことだと。

「そう言えば、内容が衝撃的過ぎて頭からずり落ちていたが、あのニュースでも私たちのことを、そう…」

「いやあまさか本物に合えるとはなあ。噂通りのハイグレ姿じやねえか」

「ちょ！ そんなこと言うのやめてください！ これには【シンフォギア】って言うちゃんとした名前が——」

「でもハイグレなことには変わりねえだろ」

「うツ…」

「それを…言われると…」

認めたくない。二人の頭にその言葉がよぎるが、姿が姿なので反論の仕様がない。

実際、この恰好のせいで『わいせつ物陳列罪』の罪状で捕まつているのだ。

「諦めなさい、二人とも。私はもう……慣れたわよ」

マリアがどこか、遠い目をしている。

もう、なんかすごいくらいの修羅場をくぐつて来た目をしている。

なんだろう、謎の威圧感がある。謎の説得力がある。

「マリアさん…どこ見てるんですか…？」

「なにやら、いつものマリアではないように思える…」

「考へても見なさい。こんな格好、行つてしまえばただの高性能なコスプレ。こんな格好が通用するのはハロウインだけなのよ…」

「マリアさん、本当にどこ見てるんですか!?」

「マリアが、謎の境地に至つたように見えるのは、気のせいだろうか…？」

本当に、彼女の思考がどこに行つてしまつたのかが理解不能だ。まるで、悟りを開いたかのような、そんな顔をしている。

「それで、こいつらを連れて来て、結局何がしたいんだ？」

「実は、こいつらの帰還方法がなくなつちまつてな。次元やら時空間やらを飛び越えることのできるからくりつて、あるか？」

「おいおい沖田くん。そんな都合のいいからくりなんて、あるわけねえだろ。それに、それはもう言つちゃなんだけどからくりつつ一桿をはみ出てる「いや、あるぞ」あるんかい!!」

「源外さん! それって本当ですか?！」

新八の驚きとともに、三人の顔が歓喜に包まれる。

絶望的だった帰還方法が、こんなにも早く見つかつたのだ。喜ばないわけがない。

だが——また同時に違う疑問も生まれる。

「にしても、よくそんな都合のいいからくりがあつたね。前々から造つてたアルか?」

「いやあ、この坊主にからくり製作依頼を出される前に、とある2人の天人から、製作依頼を出されてな。そのまま保管庫にしまわされているんだ」

「二人の天人？それってどんな天人だったの？」

その製作依頼を出したと言う天人に、興味を持ったのか詳細を聞くマリア。

「なにして…『龍』と『狐』の天人だつたが…それがどうかしたのか？」

「え、マジ？あいつらここに来てたんだ」

「やつぱりあの二人か…」

「え、知つてるんですかお二人とも？」

その龍と狐の天人に、心当たりがあると言う二人。

ていうかあの人たちそんなもん依頼してたのかよ。私たちの知らないところで何やってんだ。こんなに問題が早く解決してしまつたら見栄えがないだろう見栄えが。

あとでの二人に文句言わなければ。

「あ、そう言えばまだ二人には話してなかつたわね。あなたたちの生活、すべて司令室で映像が流れてるわよ？」

「え、ツ？」

二人の、かすれた声が響いた。

「ち、ちなみにどのあたりから…？」

「私が来たときは、あなたたちが真選組と戦つている前で終わつたけど…それ以降ももうとつくな流れている可能性があるわよ」

「そ、それって、つまり――」

「あなたたちのこれまでの全部、司令室で流れてるわ」

「ああああああああああ!!!」

「――」

マリアからの、実質的な死刑宣告を受けた。響は叫び、翼は膝から

崩れ落ちる。

今までの中には、自分たちが全裸にされたものもあつた。それが、司令室で流れているとなれば――。

「いや、でも流石にモザイクはされていたわよ？」

「それでも！ 映されたことすらよれ！ もうお嬢いしいないよ！」

「(……以外に、気にしてたのね) 翼は…」

「詠ね。心ここあうずぎわ一

ショックが大きすぎたため、二人の反応はそれぞれだが、傷ついていることに変わりはなかつた。

いたる。

「クリスはダメね…。」——よし、源外さん。そのからくりを見せ

「 太田。」

「——駄目だ。アレはあくまで依頼されている物だ。
赤の他人に使わせることはできねえよ」

「せめて、せめて見せるくらいは…」

一默目だ。せめて本人からの許可くらいねえと――
＼ルルルルルル

突如、電話がなつた。

ていうか、あの爆発で電話回線が生きてたのかよ。すげえな。

「あーもしもし。え、ああー。一体どのようなゞ用件で?……え、良い
んですかい? はあ……はあはあ……それでは」

かかつた時間はわずか15秒足らず。

源外は電話を切ると、銀時たちの方を振り返る。

「なんか…たつた今依頼者から電話がかかってきて、自由に使つてい
いってよ」

「本当ですか!？」

急な展開に、思わず声を上げてしまう響。いや、これは響だけでは
なく、翼やマリアにとつても僥倖であった。
つーかマジで都合よすぎだろ。どこから見てんだよ。あの二人。
情報伝達早すぎだろ。

「な、なんというタイミング…」

「依頼人から許可が出たんだ。案内してやる」

源外は瓦礫を退かしながら進むと、扉を開けた。

全員がその扉の中に入ると、そこには大量のからくりが存在してい
た。

「な、なんという数だ…」

「す、すごい…」

「ていうが、こんなに敷地があつて、よく今まで警察の目を搔い潜れた
わね…」

「まあしやあねえだろ。あんな税金泥棒どもの力量じや、源外のジー
さんの隠れ家を探すことなんて不可能なんだよ」

「旦那。そりやあ聞き捨てなりませんね」

税金泥棒、と言う言葉に反応したのか、沖田が銀時に対して敵意を
向ける。

それと同時に、クリスも「フシャーー！」と銀時に対して敵意を向
けた。完全に猫である。

その敵意に敏感に反応したのは、翼とマリア、そして神楽と新八

だつた。

神楽や新八は「ああまたか」程度にしか思っていないが、二人からすれば急に雰囲気が変わった彼に警戒の意を表している。

「（なに：彼の雰囲気が、急に変わった…？）」

「（まるで隙がない…これが、天才剣士と言われた沖田の実力か…！？）」

マリアは沖田の戦う姿を見たことはないが、雰囲気だけで彼が只者ではなくなつてているということに気付いた。

対して翼は一度彼の剣の腕をその目で見ていた。クリスのミサイルをその刀一つで真つ二つに斬つたのだ。波の剣士ではないことは理解していたが、まさかここまでとは――と、思わず関心してしまう。

普段はふざけた男だが、こういつた場面になると人が変わる。それが彼、沖田総悟だ。――と言うより、シリアルスになつたら大抵銀魂キヤラは人が変わるんだけどね w。

「なんだあ、沖田君。事実を言われてキレてんの？」

「――旦那」

より、一層空気が重くなる。

唯一この邪見な雰囲気に気付かなかつた響も、この雰囲気の悪さに気付き始める。

「え、なんですか、これ？」

そんな響の疑問に誰も答えることなく、沖田が口を開いた――。

「旦那。せめて『税金泥棒』の後ろに『土方十四郎』を付け加えてくだせえ」

「「——ツ!!」「ズコオー!!

まさかの返答に、ズツコケる三人。
あれほど邪見な雰囲気だつたのに、まさかのおふざけ回答。
ズツコケずにはいられなかつた。

「ああ悪かつたね、沖田君。『税金泥棒土方十四郎』。——あれ、これ
漫画にしたら売れんじやね?」

「売れねえよ!!二人ともバカやつてないで、さつさと進んでください
!」

的確なツツコミが新八から炸裂した。
いつもおふざけだつた。本当、少しチビつちやうところだつた
じやねえか。ふざけんな。

「おーい、ここだぞ、ここ!!」

源外の声が響き、一同は源外の元へ駆け寄る。

全員の目に映つたそれは、大きな布で覆われた、謎の大きな物。
全長5メートルほどあるであろうそのからくりは、異様な存在感を
放つていた。

「これが…時空間を移動するからくり」

「まだ形を見てないのに、なんだか不気味な雰囲気がありますね…」

「まあ時空間を移動するからくりなんだから、普通じやないことは確
かね」

「できえな…」

「そうですね…」

「「——」「」」

それぞれが感想を述べている中、万事屋組は物静かだつた。

それを気にしたマリアが、三人に問いかける。

「どうしたの、三人共？」

「いや……なんか、これを見ると、懐かしいつつーか……なんか嫌な予感がするつーか……」

「僕も、なんか同じ感じがします……」

「私はなんだか黒歴史が掘り返されるような感覚がするネ」「——？」

三人の言葉に、マリアは訳が分からず首を傾げる。
そんな中、源外が布に手をかける。

「お前等、よく見とけ。これが、時空間や次元を移動する、俺のからくり!!」

バサアアアア!!と言う布の音と共に、その全貌が露わになる。

それを見た瞬間、三人の体が固まり、沖田とクリスはすまし顔で。

銀時たちは「やつぱりかー」的な顔をしていた。

源外は、目の前にそびえ立つそれを、自慢げに語った。

「名付けて!!人体装填型ネオアームストロングサイクロンジエット
アームストロング砲だああ!!!」

一同の目の前にそびえ立つそれ。

それは、黒光りに光つた5メートルのチ○コだつた。

それを見た瞬間、三人は——。

「「いやあああああああああああああ!!!!」」

悲鳴を上げた。

* * * * *

「な、なんなんですかこれえ／＼／＼!?」

「なにって、人体装填型ネオアーム「それはいい！何故こんな形をしているのかと聞いているのだ！」

当然の反応である。

これが次元や時空間を超えるからくり？どう見てもただのわいせつ物である。

装者以前に女性である彼女等にこれを使用しようと無粋の極だろ。どう考えたつて。

そして、翼の疑問だが、これは意外な人物が説明した。沖田である。

「ネオアームストロングサイクロンジエットアームストロング砲。こいつはすげえんだぜ。前に【攘夷戦争】について話したろ？」

「確かに——天人による地球の支配に異を唱え、決起した者達によって引き起こされた戦争だつたな。それがこれとどう関係していると言ふのだ!?」

「この大砲の元となつたオリジナルはな、かつて攘夷戦争で江戸城の天守閣を吹き飛ばし、江戸を開国させちまつた戌威族いぬいの決戦兵器だ」「お前たちの国はこんな卑猥な大砲に負けたのか!?」

こんな大砲に負けたとなると、完全な恥でしかない。

こんな大砲に負けたこの国に、同情心を抱いてしまう三人であつた。

「——で、これが本当に時空間を移動するからくりなの!?」

「そうだぞ」

「なんでこんな形なのよ!?せめてちゃんとした形に直せないの!?」

「無理だ。理由は二つ。まず依頼人がこの形で納品するように言つて
いるからだ」

「——急にあの龍と狐を殴りたくなってきたんだけど」

「奇遇だなマリア。私も同じことを思つていた」

あーご愁傷様です。龍さん、狐さん。

つーか、確実にこのために形をチ○コにしたような感じがするんだ
けど…。

でも、龍さんと狐さんつてギャラルホルンのゲートへの干渉権限、
持つてなかつたはずなんだけどな…。

まあもうどうでもいいか、おもろいし。

「——それに、これまでの流れからすると、その龍と狐の天人…かは
謎だが、そいつらがギャラルホルンのゲートに何かしらの細工をした
のだろう。でなければ、こんな都合よくからくりの製作依頼を出すは
ずもないし、都合のいいタイミングで許可も出ないしな」

「この一連の黒幕は、あの二人と見て間違いなさそうね」

「あのー…とりあえず…どうします? 使いますか?」

響の躊躇う言葉とともに、現実に引き戻された二人。

今彼女らは、窮地に立たされている。元の世界に戻るために、女性
としての尊厳と矜持をすべて捨てる必要がある、この現実に。

それに、人体装填型と言う時点でどこが発射口なのかが容易に想像
できてしまう。そんなの、モザイクを掛けないといろいろとヤバい。

「——とりあえず今は待つて。それで、もう一つの理由を聞いていい
いかしら?」

「それはだな…そもそも、この形じやねえと時空間移動装置は稼働し
ねえんだ」

「何故だ!?何故よりによつてこの形なのだ!もつとマシな形があるので

はないか!』

当然の叫びである。——この流れ使うの何回目だつけ?

わざわざチ○コの形でなくとも、もつとマシな形が存在していたはずだ。いくらこの形で納品するとしても、もつとマシな形が——。

「だから。これは動く動かない以前の問題なんだよ。この形じやねえと、中の精密機械がうまく噛み合わねえんだよ」

「何故!もつと、ほら、なんか……試行錯誤はしたの!?」

「それはもちろん。だがな、やつぱりこの形がジャストフィットなんだよ」

「そんな……バカな……」

翼が、再び膝から崩れ落ちた。

元の世界へ戻る手段が得られたと言うのに、まさかのその形がアウト。

一人の女性として、このからくりを使うのは、どうしても許容することができない。

だが、このからくりを使わなければ元の世界へ戻れないのも事実。迷いが、彼女等を襲つた。

そのとき——。

「——そんなに迷つてんなら、こいつにやらせるか?」

「ご主人様のためになら、なんだつてやります!」

「「「「「」————「「「」」

沖田が、爆弾を投下した。

そうだった。今のクリスは沖田に従順だ。

もし沖田がクリスにアレを使えと命令すれば、彼女は迷いなくそれを実行するだろう。

それだけは、なんとしても阻止しなくては。六人の思考が一致した。

「よし、命令だ。こいつを使「わせるかあ!!」

翼が沖田に対して斬りかかる。本気で殺す気だつた。

沖田は咄嗟に刀を抜刀して対峙する。

「危ねえじやねえか、青髪。俺はお前らがこれの使用を渋るから、仕方なくこいつに命令して——」

「それがダメだと言つてはいる！それに、本当にそれを使用したとして私たちの世界に戻れる保証など、どこにもない！」

翼の言う通り、この人体装填型ネオアームストロングサイクロンジエットアームストロング砲を使用したとして、本当に元の世界に戻れる保証などないのだ。

別の世界に飛ばされる可能性だつてある。そんな不確定要素の多いものを使用するなど、愚の骨頂であつた。

「あーそ、ら辺は大丈夫だぞ。当初はそこも俺は懸念していたんが、依頼人の天人から特別な精密部品を貰つてな。それを使用することで特定の世界へ行けるようになつたんだ。装填したものがあつた世界へと一直線だぜ」

「大丈夫じゃねえか」

「あの人ら、なんつーもん渡してんだか。準備に抜かりはないつてか？」

「それでも！こんな卑猥な大砲を本人の意思なくして使わせてなるものかあ！」

「ご主人様から離れる！」

クリスが翼に向けて銃弾を放った。

そして、それを横からマリアと響が入つてその銃弾を受けとめる。

「クリス！ 目を覚まして！ あんな大砲使っちゃダメよ！」

「そうだよクリスちゃん！ あれを使っちゃつたら女の子として終わっちゃうよ！」

「私は雌ですけど人間ではありません！ ですので問題はありません !!」

「大ありだあ !!」

「おいーーーで戦いをおっぱじめないでくれ！」

源外の悲痛な叫びも聞き入れられず、闘いは過激さを増した。

——その数時間後。闘いは終わったが、何故か、何故か源外のからくりはすべて無傷だったと言う。

何故かって？ 編集者チートだよ。私はその権限持つてないけどね！

ちなみに、勝敗だが、沖田とクリスの圧勝だつたらしい。

銀時たちはただその闘いを見ていただけだったが、途中で退室した。

理由だが、「俺達いなくてもいいんじゃね？」らしい。

その後沖田がクリスにあの大砲を使わせようとしたが、なんでも使用するつもりもなかつたから充電とか一切しておらず、結局使用できなかつたらしい。

あと、充電には半年くらいかかるらしい。

装者たち三人は思つた。

「あれは最終手段だ。もし、もし本当に帰還方法がなくなつてしまつたら、本当の本当に、いや、ガチで最終手段として使うしかない」

⋮

と、心の中で思ったそ^うな。